一二人宛勞働者が入つて來て立飲みをする。土間の上にテーブル一脚をおき、酒場は臺があつて大樽がある。次の間には古ぼけた球突台とピアノがある。亭主は便々たる腹をつき出して、外の暑い街路を眺める。

仕方なしに外の新聞賣場で新聞を買つて來て調べたが分らん。金を拂つて、人通りの少い郊外の街の電車に乘り、一度乘替て飛行場の横へゆく。此處にもそれらしいものはない。

然し一度來ようと思つた飛行場を、見ることが出來た。大阪城東練兵場の 樣であるが土地は惡い。横に森がある。こゝがドイツ空軍の策源地の一つだなと感概が深い。大きな機体が七十有餘ある。滑走し初めてゐる者、着陸するもの色々ある。

場の端の小店で休む、勞働者が數人休んでゐる。今日は渡歐以來の暑さである。それでも日本よりは凌ぎ易い。日本に居れば仲々外へは出られぬが、それでも視察だから一日を家居して空費すべきでないと走り廻る。

青島と上海とにゐたといふ船の樂手(クラリオネツト)が瓶の口からビールを飲んで暑さをしのいでゐる。それから英語で色々と土地の模樣をきく。下級者の悲哀は服裝にもあらはれてゐる。それでも呑氣で悠揚で好人物の處がある。日本の勞働者の 樣にいら〳〵して居ない。ドイツ人はも少し、辛辣な所があり、スマートさを持つてゐると思つたが大体に於て、人柄は非常に善い。氣長で

朴訥な所が一見して分る。今朝も電車賃を拂ふのに、十マークの札を出したが、嫌な顏一つせずに釣錢を叮嚀にくれる。

それからこゝの區劃農園をよく見た。各種のものを作つてゐる。三四坪の低い家を建てゝ、美しく粧飾したり、蔓やバラを蔕はせたり、ラヂオをひいたり、旗をたてたりしてゐる。週末に來て栽培するのである。よく出來てゐる。低い櫻の木にさくらんぼが一杯實つてゐる。

地下で歸り二時午食して分れて、散髮屋へゆく。待つてゐる間にうと〳〵眠つた。こゝは一軒を店の間で一寸中央に仕切りして一方は婦人の斷髮化粧室に使つてゐる。手眞似で横と後とを刈つて前は其儘にしてくれといつて仕上げてもらふ。英國の樣に、シャンプーは要らぬか、香水は入らぬかなどとすゝめぬ。

代金一マークと二〇ペンニツヒをやつて出て、勝川教授の所にゆく。不在、こゝの女中は十四五歳の子娘だと思つて年をきくと、二十三といつたのには驚いた。日本人間に評判の可愛らしい無邪氣な子である。

同君同伴、ベルリン駐在武官大村閣下を訪問する。久濶を叙し、色々の談話をした。閣下が先日外相に會はれた時「どうも、ドイツは軍備は縮少されるし、以前貴殿が駐在の時はドイツも盛であつたから軍事上の御參觀を乞うても辱しくなかつたが、此節はどうも困つてゐます。それで青年男

女の精神、并に体育發達の爲に諸種の企劃をやりますが、此節の若者は兎角熱心さが無く困つたものです」と話されたといつた。其他種々の御話もあつたが、來客があつたので、辭して支那飯屋で夕食を注文しかけると久次米教授、松井文學士が來合して共に食事をする。

暑いから、給仕に煽風器をかけさす。この音はエヂプト以來であつた。煽風器も渡歐以來見初めの使ひ初めで、このブーンといふ音を聞いて大阪の夏を思ひ出した。

今日も大分暑かつた。外へ出ると、今日廣告に出てゐた樣に、樂隊を先頭に十數旗のS・P・G赤旗をたて五列に並んで共產黨の連中五六百人隊伍堂々示威運動をしてゐる。一人の巡査が先頭に歩いていく。婦人も大分混つてゐる。後の方は歌をうたつて、自轉車隊が二十人位ついて、日暮の街を進んで行く。一糸亂れぬ所に共產黨ながら注意をしてゐる所が窺はれる。近日大會があるのであるといふ。

松井君など〻明日のプログラムを相談した上歸宅、一週間分の支拂をする。喫煙のときにマツチ一箱くれたのだと思つてゐたのも、ビルについてゐる。切手代、電話をとなりでかけてもらつた代、郵稅不足、風呂一回、朝食に特につけてもらふ果物代、晩のビール代五日分、合計三〇マークと少しとある。それで十五ペンニツヒの釣錢も、きちんともらつて、西洋流を發揮した。主婦から結婚につき色々の話をきく。

八月二日

倫敦では一ケ月以上居たが、警察へ屆けなかつた。こゝでは是非屆出をしなければいかんといふので、用紙に記入して主婦と二人警察へ行く。六七人も來てゐた。私のは滯在二三週間といふのであるから、一分もかゝらないで手續は終る。大抵長く居る人は詳しく聞かれるさうだ。その時巡査に二マーク位やるさうだ。

簡單にすんで外に待つてゐると、主婦は他の警官に遇つて何か話してゐた。後で出て來ていふには、「前の自動車屋が喧しく毎晩二三時頃に、自動車をブー〳〵言はして仕方がないから、近處數軒の署名をとつて陳情したのだ」といふ。成程、前は自動車數臺のガレージになつてゐた。エンヂンの音が時ならず夜半の夢をさます。私も度々びつくりした事がある。警察はすぐ注意を與へようと答へたそうだ。

これから一人、博物館のピクチウア、ガラリーへ行く。入口で入場料を拂ふときも、帽子と鞄を預ける時も釣錢を七分位渡してじつとしてゐる。足らんでないかといふと、殘額を渡す。二人ともづるい奴である。大陸では買物をしたとき釣錢を目の前でよく改めることである。つまり三圓の釣のあるときは順々に二圓五十錢位迄渡して、じつとしてゐるので、それでよいのだと思つて急いで外へゆくと殘りの五十錢はその儘である。足らんでないかといふと、まだこれから渡すのだといふ

様な表情をするのに私の友人にも二三出遇つたさうだ。

繪畫はもう見劣りしてならない。メンツエル作のフリードリツヒ王及サンスーシーの宮廷の圖などがあり、鐵工所の繪などがよい位のもの。ボツクリンの作品には神秘的のものが多い。マリアの悲しみ、海姫などは目をひくに足る。二階には新しい表現派のものが多い。三階は宗教畫的のクラシカルなものである。疲れて外に出る。今日は少し曇つて細い雨も折々降る。

トライチケの像

午食をすまして、三時頃伯林大學の構内で、後庭の大戰記念碑を見たり、前庭のトライチケの像を初めて見る。力の哲學を說いた彼は、故國の敗亡を知らぬ前に死んで幸福である。前庭中央のヘルムホルツは溫厚な學者らしい。

四時から教室へ入り、外國人向夏季講習のクロイケル博士の文學の話をきく。五十人位出席してゐる。人相はよくないが、太い大きな聲で、レシテーションをやり、せりふの眞似は抑揚頓挫、仲々手に入つたもので、講義が終ると拍手喝采であつた。

それから松井文學士も來て、今夜休操くらぶへ行く筈であつたが今日は休操はないといふので、三人藤卷へ行き、日本食をして、當

地で有名なスカラ座の二マーク半の安い所へ入る。廣い大きな建物で、殆ど一杯入場してゐる。

バンドがよく、殊にピアニストのジエンギルベーが、一度オーケストラを指揮し次によい曲を彈いて聞した。この人は伯林一流で、ワルツ等の輕いものが得意であるといふ。

馬、犬、猿の藝がよく仕込んであつた。ハンブルグの程、目まぐるしくはなかつた。主婦の話に「隨分戰後生活に窮して自殺者が多かつたです。私の知つてゐる老婆は、七十幾つで毒をのんでラヂオを耳にかけた儘、死んでゐました。新式の自殺と笑ひも出來ません。眞に困つたことです、ドイツは外交が下手でした。カイゼルのみが信じた總理大臣が惡かつたから、國民は實にえらい苦しみをさせられます……」

八月三日

正午大浦君來訪種々打合する。共に外出、ポツダムストラツセに行き、ウエルトハイム百貨店に入る。仲々大きな店である。各種の品物を澤山置いてある。

玩具部を見る。隨分廣い所に陳列してある。種類も多く、品數も多い。人形、動物、セルロイド笛、太鼓、舟、風車、組立玩具、電車、自動車、汽車、繪本、牛乳車、組立のお家、車掌帽と用具巡査帽、廻轉台、嵌め繪、幻燈器械、玩具望遠鏡等である。

それを一々一方からよく調べてみた。も一度來て見ねば充分分らない。然し、特に珍らしいと思ふものはない。それから、元カイザーのゐた城(シロス)へ行く。松井文學士の研究してゐる心理の實驗器具を一通見せてもらふ。こゝに丈、三十四五室心理の研究所があるといふ。世が世であれば此處は飛ぶ鳥をも落す大カイザー皇帝の居城であるのに。その一部を、大學が提供をうけて、人民共が大きな顏をして出入してゐるのである。かはつたものである。

各室を大体見て共に徒歩で、ベルリン体育本部である Berliner Turner Schaft へ行く。相當大きな建物で、室內運動場は約二百坪位あつて、各種運動用具が備へつけてある。天井は高く、横に見物席がある。床は木である。別に、水浴室、更衣室などある。外の運動場は四〇〇坪位である。

ドイツには、ドイツチエ、ツルナー、シアフトといふ体育聯盟があつて、各府縣に支部があり、全体で百六十萬人の會員があるといふ。

毎週子供二回、大人三回位、夕方六時から十時迄の間に一定の時間に來て、指導者に從ひ、体操をするのである。女子も婦人も會員である。小人は一ケ月會費五十ペンニツヒ(二十五錢)、大人は二マーク(一圓)であるから相當の額である。

この邊は一寸場末の感のする所であるが、六時に行つて見てゐると、七八歳から二十歳位までの男子が來て更衣しては、バレーボールの様なのに參加する。

先生も二人出て來て指導する。短い猿又と半裸体、又はシャツである。少年の方はボール當をする。斯く、夕食後にこの様な所に集つて体操をやるといふのは、實に体育を重んじてゐる証據である。又一方から考へると、これらの青少年は運動をする場所がない。大阪の小店員などは折々街でボール投げをやつて通行の邪魔をして叱られてゐる處を見るが、こゝでは街路では絶對に遊ばれないのだから、自然この様な施設が必要となるであらう。私が見てゐると一人の母親が來て先生に月謝などを聞いてゐた。又十二三歳の女の子が二人來てぢつと見てゐた。

それから体操などを見て、こゝのモツトーである。四F、卽ち快活、自由、敬虔、愉快の話をきゝ、支那飯屋へ行く。兒島教授、福井中佐、三浦教授などに遇ふ。先日大阪への打電の不足料一マーク七〇ペンニツヒ徵集に來たといふ。

八月四日

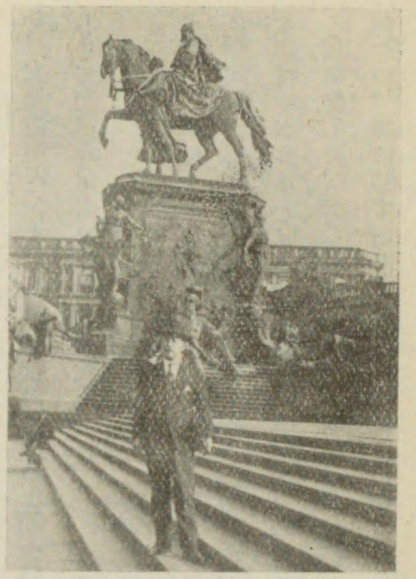
朝電話が二回島津製作所員からかゝつて、明日心理學の器械製作所を案內してくれる筈。正午宿を出てウエルトハイム百貨店へ行き、ドイツ家庭用品を研究する。

食事をして、近處のクンスト、ゲバーベ博物館とフオーククンデ博物館へ行つたが休暇中で仕方がない。海に關する博物館が非常に面白いと聞いてゐるが、もう時間が無い。

いふ。それから、シロッスの心理學教室で松井文學士と教育に關する圖書を調べて外へ出て、ウヰルヘルム一世の大銅像の前で寫眞をとる。六枚三マークで十五分間に繪葉書形に仕上げるといふ。

ベルリンの景勝の土地には此の寫眞師が多くゐる。粗末な器械ではあるが、寫眞術の發祥地丈に直ぐ手際よく仕上げてくれた。

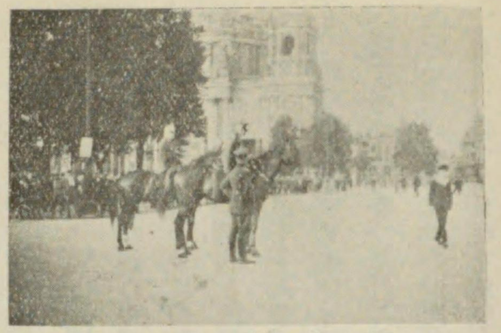
今日は此の城の前の大廣場へ、ドイツの共產黨の大デモンストレーションがあるといふので見る。六時半頃になる警官が四方に配置され、赤旗を押した立てゝ黨員の行列が四方から繰込んでくる。婦人や子供や勞働者が樂隊を先頭にして、歌をうたつて來て、所定の場所に陣取る。そして定



ウヰルヘルム一世銅像前にて

フリードリッヒ街を通る。大きな寫眞屋に「寫眞現像二十四時間內に仕上げます」と日本字でかいてある。クック社へ寄り、大陸旅行日程を相談したり、米國を經、日本へ歸國の船の相談をする。

アキタニアか、マゼスチックの二等で米國鐵道、太平洋を一等とすることに賴む。倫敦へ聞合せるから、一週間の中に返事をしてくれると



共產黨大會

刻になると、ラッパの合圖で各所で演說を初める。二三萬の人々が靜にきく、城の垣の上に立ち、大寺院の階段の上に立ち、銅像の傍に立つて各團体が、本日は世界大戰の記念日とあつて非戰運動をとくらしい。

八時頃、ラッパの吹奏で、山の如き群集は小ぜり合一つしないで隊伍整々として退出した。警官隊は其他の要所にも配置してあつたが事なくて終つた。

夕食して歸り入浴。主婦は下女に手紙を渡して私の部屋へ送る。曰く、「今晩は頭痛がしてゐますから御用を伺ふこと出來ません、何か御用があれば、此の紙に御書き下さい」といつてきたから、英語で頭痛の三療法を繪と說明の文章にかいて、仁丹をそへておくつたら、「あの繪はよく出來てゐるから紀念に永く殘します」といつて來た。

貧之をかくすためか、主婦の部屋へは私が入るのを好まないらしいから入つたことがない。

七月五日

朝勝川教授來訪、大村閣下より五時の茶に招待。十一時下宿を出て隣の煙草屋の電話をかり、大村閣下へ本夕出席の旨返事をして大使館の方へ出掛る。途中大浦君に出遇ひ同伴して行く。

竹内書記官に面會してドイツの文部省から學校參觀の許可が下つたか否かを聞く。一寸待つてくれとて入られたが、今度は書記を連れて出て、此の人に聞いてくれといはれる。それでその部屋へ入つて聞くと、それはまだ、ドイツの外務省の方へ願出てないといふ。

私は六月の末日、勝川教授を介して、間に合はぬといけんから、大使館からドイツの外務省を經て、文部省へ學校參觀の許可を願出ておいてもらつた。

そして七月の二十日に伯林へつくと、直ぐ大使館へ行つて竹内書記官に面會して依頼し、歸宿すると葉書で改めて禮狀と依頼の意をこめて書いた。それから數日前もう、ドイツの學校が初まるので葉書で、許可が下り次第、通知してくれまいかと竹内書記官に依頼してやつて、今日行つて見ると、願書はまだ、ドイツへ廻はさず私の机の中にありますと書記が答へる。

實に驚いてしまつた。こちらは限られたる日程の中で有効に見學したいと思つて、未だ英國を立たない内から頼んであつたのに。其後北國をまはり伯林へ來て、もう二週間餘になるのに此の有様である。從來、見學を依頼しておいて、許可が來た時にはもうゐない人もあつたと聞くが、私はプ

レペアドネスで用意周到、早くから依頼してあるにも拘らず、それが何の役にも立つてゐない。

で、書記に大使館から一般紹介狀を認めてもらうことにして、小學校は國立で仲々許可が一週間や十日では下らんから外の人が行くのについて行くことにする。失望してしまつた。こゝで七月十九日發兒童生活第四〇號を受取る。

私等のカイロ！駱駝行の寫眞などと私の文及びロンドン日記が出てゐる。大浦君と奪ひ合ひで讀む。午食して二時迄に急いで、島津出張所の金井氏を訪ふ。雜談の上案内せられて、ライプチーゲル、ストラツセ街の應用心理實驗器械陳列所へ行く。

此處はビオルコスキー氏及ハンブルゲー氏が經營してゐて、前者は立派な著書をし、後者は技師で種々學界に貢獻してゐる人である。二人とも熱心に說明してくれる。陳列所を順に見た。

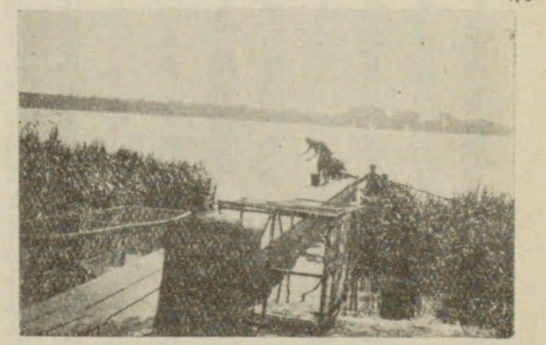
それから、職業指導の意味で、當市の自動車運轉士の能力を試驗する部屋がある。自動車が一臺おいてあつて、前面の壁に各種の電球があり、それが点火するのによつて、ハンドルなり足や警笛等を適當に動かしたり鳴らしたりせねばならん。そしてその間の時間なり、正誤の表が別のレコードに書かれる仕掛であるから、直ぐ運轉手としての能力の如何が分る。

非常に親切であつたから、學院のメダルと私が使つてゐた舞扇とを進上し、急いでタキシーで大村少將邸へ馳せつける。

既に同船であつた宇和川半禿居士を初め、右田林學博士、陸軍將校達が見えてゐた。色々ドイツの造林の話などあり、食堂に入つてシヤンペンを拔き、少將は「本日は小生の五〇に近くなつた誕生日につき御招きした次第であるが、十三年前の昨日は英國がドイツに戰爭を通告した日で、實に、此の國は上下を擧げて昂奮し、續いて日本とも開戰といふことになり。呑氣に誕生を祝ふなどといふことは出來なかつたが、本年は再び當地に赴任して諸君と會することを喜ぶ」の意味の御話があり、右田老博士からも挨拶があり談笑の間に祝意を表した。

宇和川老はミュンヘンのビール飲用特製コップが氣に入り大に氣焰をあげてついにもらつて返ることにした。大に馳走になり、別室で英國、ドイツ日本の將來につき話し合つて、私は記念帖に「懷舊の十三年や夏涼し」の一句を認めた。

京人形と寫眞帖を呈して宿に歸り、主婦をよんで色々ドイツの事情をきく。



シヤフヘンブルグ島の學校

八月六日

午前中調べ物をする。正午下宿を出て、五ポンド丈、ツヲー驛で兩替して、電車で郊外に出る。シーメンスシュツケルトの工場を外から見る。隨分嚴丈で大きな工場である。澤山の職工が出て來てゐた。電車を下りて歩くと、森である。槲の木が十數町の廣さに茂つてゐる下を一人あるく。砂道をぽこ〳〵歩むと、テーゲル湖へ出る。湖水の横の料理店で靜に飯を食ふ。細長く湖水があつて、三角のヨットの帆が浮ぶ。こちらの水邊で水泳をしてゐる者もある。こゝで此の島の有名な島の學校のことを聞く。何れ參觀に來る下準備である。一度見ておかないと、朝早く授業の間に合ふ樣に來られない。

渡船を渡ると、そこも湖邊で澤山人がゐる。すぐ後は森で、森の中に三四坪のビラコロニー（別莊植民地）の家が澤山ある。極めて簡單な小屋で、それでも少さいテーブルをおいたり、炊事も宿泊も出來る。何百軒となくある。今日は土曜だから大勢來てそれ〳〵午睡したり、樂器をならしたり、炊事をしてゐる者もある。これは市民にはガルデン、コロニーと共に非常によいものである。

家の外側に簡單な炊事道具をおき、綠蔭で靜に話してゐるのもある。こゝから又渡船で對岸へ渡り、電車で、このテーゲル湖の北の方から大きく一周した。この邊にフンボルトの城がある。松林の中を縫うて、場末を通つたり、畫火事をみたりして、此れでベルリンの郊外は稍解つた、隨分廣

い森である。

勝川君を尋ね、共に松井君の送別の爲支那料理を食して歸る。

ベルリンの市街は放射形になつてゐるのでよく道に迷う。これでよいと思つて行くと、とんだ所へ出る。道路は立派である。郊外の道路でもよく修理してある。……留學生もマークの下つた時は贅澤出來たらしいが近頃はマークも恢復して餘り派出な生活も出來ぬ。然しドイツへは日本から學者ばかりが來るから相當日本人は尊敬せられる。自然居心地がよいらしい。しつくり落付ける街である。

米國人が大勢來て札びらをきる。レストランもカフエーも百貨店も賑である。一般に外國人の來遊する樣に設備をよくする。

八月七日

寢てゐるとノツクする者がある。起きて見ると三浦教授で、今日はスプレワルドへ行けないから同宿のルーマニア人の案内で、グリウナウへ行かうとのこと。それで急いで用意して後から同君の下宿へ行く。

高岡高商の伊藤氏も來り、一行四人ツウオ驛へ行く。スプレワルドは、スプレー川の支流が何十

とあり、その間の島の上の村で、村民は往來するに船を用ひ、日曜には古代その儘の服裝で寺院に集るから、人々は態々見物にゆくのである。

今日行くグルウナウは伯林のボート競爭のある所で景色もよいのである。今日も仲々暑い。窓外にガルテンコロニーがある。旗を立てゝ祝つてゐる。隨分伯林市外にはコロニーは多い。

やがて一時間もたゝない中に汽車はグルウナウ驛につく。驛から出て共に午食をする。こゝでも矢張、ピアノ、セロ、バイオリンで奏樂してゐる。傍に盲目ばかり四五人を二人の目明きが世話して食事をさしてゐた。汗をかいて食事をすまして外へ出ると、スプレーの河がある。この河の畔によい旗亭がある。對岸は森で岸には美しいべらんだの旗亭がある。

ヨツトが上下する。手にもつ擢の兩端で水を搔くボートが進む。小汽艇が音をたてゝ走る。こゝで二十四五人ボートに乘つて河上に進む。水は赤濁りである。兩岸に水泳してゐる者が多い。殊に右岸の松林の中には數百人の裸体が見える。水は滿々と森の木の根迄浸してゐる。

左岸につく。大勢泳いでゐる。ボートが澤山ある。眠つてゐる者食事をしてゐる者、食堂もある。森である。森の中を縫うて上る。

三々五々きやつ〳〵と騷いでゐる。猿を飼つてゐる所から二人の女連と一緒になり、松林の中の急坂をよぢて山に上る。頂の見晴しはよい。塔のあるミウゲルツルムの建物がある。

塔に上ると實に見晴しがよい。目の下に今渡つてきた、スプレー川が蜒々と流れて白帆が上下してゐる。河のあなたには松林をへだてゝ遠い所にラジオの高い柱が見える。それから右にベルリンが煙つてゐる。

背面にはフリードリツヒハーゲンといふ大分大きな湖水がある。それより右には丘があつて、その上にビスマークタワーがそびえてゐる。然し見渡す限りは松や白樺などの森である。この大都會に近い所に、昨日のテーゲル附近の森といひ、こゝといひ、もう林ばかりである。寫眞を寫したいと思つたが、これでは黑い繪になつてしまふ。

一昨夕右田博士も言はれた通り、ドイツの植林は進歩してゐる。南獨の造林に立派な所があるといふことであるが、都會に近い所は何處でも永い年月に濫伐をするものであるが、この樣な廣い面積の林はとても日本では見られない。丘の上の塔から見ると只もう樹海を見るに等しい。

こゝでビールを飲んで丘を下る。丘の下の白樺の森の中に寫眞屋が金屬の薄い板に一分間で寫してくれる。それを試みる。大勢が立つてみてゐる。こゝにも二町位の長さの小さい湖水があり、大勢食堂で休んでゐる。それから林をつきぬけるとフリードリツヒハーゲンの岸に出る。澤山の人。

渡船で對岸へつくと、この湖水の首になる所にある川の底のトンネルを通ると、盛り場があつて、射的とか、こま廻し、色々な遊び道具がある。そこを拔けると松林の中で、幾百組の團体が日

曜を樂しんでゐる。そこで休んで元の盛り場へ出る。盛にダンスをしてゐる。汗をかいて何十組かゞ踊つてゐる。

ぽつ〳〵歩いて、この町の選擧侯であつたジョーキン、フリードリツヒの銅像を見て街に進む。潮時と見えて大勢が引上げる。隨分澤山な人だ。驛では四五分おきに發車するが、とても混雜だ。矢張乘車の時は押し合ひ、つき合ひもやる。

仲々暑かつた。ベルリンへ歸ると、ルーマニア人がルーマニアの食堂へ案内するといふ。行くと四五室あつて同國人が多い。食事をすまし、非常に疲れて歸る。入浴をしてくつろぐ。これで一通り伯林の郊外は分つた。非常に趣味のある遊行であつた。

八月八日

午前十時久次米教授來訪あり。話の後、同行してもらつて、セーネベルグのラートハウス（區役所）へ行く。此の區内の學校につき聞き度いといへば、それは、フリードナウの區役所へ行けとのことで、タキシーにのつて行く。何れも塔のある大きな建物である。

三階へ行つて課長室へ入る。課長は、中等學校及小學校の係長に案内してくれる。來意を告げ、大使館からの依頼狀を示すと、ペスタロジ、フレーベルハウスへ電話をかけて、明朝參觀の手筈に

してくれた。「今度の月曜には校長が來るから其の節校長に紹介してやらうから來い」といつてくれた。課長、係長と事務が違ふからあちこちと間誤つかされる。

こゝから又、タキシトで、シヤトロツテンベルグのラートハウスに行く。中等學校の課長に遇ふと、「どうもドイツの文部省の許可がなければ中等學校の方へは參觀を許可すること出來ん」とて、幼稚園係長に紹介してくれた。その室で賴んで幼稚園丈の參觀許可書をもらつた。一つの紙片ではあるが、課長の承認を經たり、面倒くさい手續である。

小學校へは正式に許可出來ないといつたから、それでは校長へ個人として紹介してくれと賴むと電話で明日の十時に行つてよいといふことに懸合つてくれた。

伯林に於ける日本大使館員の手落の爲私は遠くから手續を賴んでおき乍ら實に困つた目にあつた。遠慮なく觀られる所を、手數がかゝる。六月の末から賴んであつたのにと今更腹が立つ。

それから久次米君の勞を謝し共にドイツ銀行に行く。縣人が四人一緒になつた。皆金をとりに來てゐるのである。それからフリードリツヒ街で午食する、今日は非常に暑い。ロンドンから送り返したシヤツがほしい。仕方なしに網シヤツを買ふ。日本にゐたら夏休で横の物を縱にするのも嫌なのに一生懸命血眼で視察にかゝらねばならん。

エルンスト書店へゆく。工科に關する書物を賣却してゐるのであるが參觀について智慧をかると

マネージヤーは流暢な英語で、「成程フオルクシユーレは文部省直轄だから文部大臣の許可がないと觀られぬか知れんが伯林市の管轄の學校があるから、その市役所の教育課へ行つてきけば私はそれでよいと思ふ」とてきはき教へてくれた。

禮をのべて出る。ウンターで三浦教授の所へゆく。汗びつしよりになる。扇子は進物用に持つて來たのに、それを使ふ。

寫眞屋へ現像を賴み、支那食堂へ行き夕食して歸る。不在中大浦君來訪の由。主婦に學校のことにつき手紙を出してもらふ。先晩下女にワイシヤツの縫上げを賴んだが三〇ペンニツヒ手數料をビルに書き出してある。例によつてきつちり釣錢をもらう。ロンドンの下宿にゐた、ドイツ娘が手紙をくれる。町を通ると子供がよく切手をくれといふ。

二十三人以上店員を使用する所には必ず一人の割合を以て癈兵を使用すべしといふ法規が伯林にあるといふ。三菱かどこか知らないがそれを知らなかつて罰金を課せられたといふ。

定食のスープには果物汁の樣な赤い冷いのを出す店が多い。食後の果物はコムポートといつて果物を煮たものを出すのもこの町の特色。本國名物のポテトはナイフで切らずに、フオークで割るべきこと、誰かゞ教へてくれた。

久次米君と同宿のドイツ人が誕生祝をして男女青年が酒を飲んで朝の三時迄騷いだと、私の前の

通りでも朝の二三時頃に男女が頻繁に通行する。朝の二三時は日本の十時十一時頃か。先日下宿の横のタバコ屋で郵便配達夫に遇ひ「私のはないか」と尋ねると「庄野のはない」と答へる。賢い奴だと感心する。下宿の婆と話すると面白い。馬鹿みた様で抜けた所はない。セムシの多い町、一寸坊子みた様な不具者も目につく。

大通りの、街路樹の葉が散る。青々してゐるのもある。八月に入ると冷いのが普通であるといふのに暑いこと。然し晝寢する間もなければ、したくもないもしすれば晩にねられぬ。

佐多博士、長井博士の歡迎會は明晩。日本學生旅行團が近く來伯するといふ。

八月九日

今日こそと早く起きて用意し、昨日かつた網シャツを着て出る。手帖を買ふと、ぽつ〳〵雨が降る。今日は學校の始まる日である。子供が背嚢を脊負ひ前へサンドイツチの入つた革袋をぶら下げ三々五々登校してゐる。

昨日、區役所の紹介で十時に二ケ所へ行かねばならぬことになつたので、ペスタロジーフレーベルハウスは後に廻はして小學校を先にする。

タキシーで、シャロッテンブルグの Witzleben Strasse 35 フォルクシューレ學校の前で止まると

二學期の始めの日

女子校と男子校が並んで子供は開門を待つてゐる。上級は既に中に入つて幼年部丈が待つてゐるらしい。母親や下女などが送つて來てゐる。それを一枚寫眞にとる。

門が明くと男子校へ入る。その背の高い哲學者の樣なウルブレヒト(Ulbrecht) 校長は二三の職員が挨拶に來たのに話してゐる。來意を告げると、それは隣の女子校だからとて生徒を一名つけて隣の廊下續きの學校へつれて行かれる。この校長室へ入ると、一二名の新入兒の母と話しを終り Dr.Lamprecht 校長は喜んで愛想よく學校を觀せてやらうといふ。

こゝも四階建である。一番下の組と上の組を觀せてくれと頼むと一年生春組の女兒級へ案内してくれる。四十二人出席してゐる。誠に可愛らしい子供である。フロックの輕裝で、金髪と目とが人形その儘である。リボンをつけたのが四人、目がねが一人である。教室は英國の下級生の教場と異り、余りごたゞ〳〵標本とか教具をおいてない。

窓ぎわに花の鉢植が四つ、右横に小さいカードに○を九以下順々にはりつけて數をかいたものが九枚かけてある。黑板には片端にアルハベツトを色チョークでその繪の所にかいてあつた。計數器

一つ、柱にメートルの印のついた木が打ちつけてある。

先づカレンダーの九日の9の字から教授に入る。カードノ〇をさゝせたり、一齊に一たす一、二たす一、三たす一の練習。日本人が此こに一人居られる。一つの字をさして見よ、といつて、それから拍手で數を唱へしめる。子供を順に前へ出して加へる勘定。

一齊教授で、女先生の聲も高く、英國と違ひ、日本の教授に似てゐる。それから黑板の繪を見て發音練習をする。

國語である。一齊に唱へしめる。本を出させる。色刷の繪で繪單語から後の部分はお伽噺になつてゐる。Bäian—Fibel Ausgabe KI

それから上級十四歳女兒の教室に入る。ドイツの詩である。祖國を詠じた愛國の歌を、先生が字句につき問答する。教室は簡素である。生徒は大分大きい。あくびしてゐる子もある。何にも机上に出してゐない。

要点を板書して問答。一人の女兒を前に出してよましめる。抑揚、聲の上下、仲々レシテーションが甘い。机は片足の方だけは鐵のレールの上にある。机の下に足もたせのはす板がある。こゝで時間が終ると、整頓をして出ると共に一齊にサンドイツチを食ひつゝ階級を下り、運動場をそのまゝ歩きつゝ食べる。妙な習慣である。

こゝで充分話も聞きたいが、十時迄に他へ行く約束があるので校長と再會を約し、土産を呈して引とる。始業の日であるが式もない。すぐ教室で授業を初める所は實質的である。

又タキシーデKarl—Schrader—Str. 8のペスタロジー、フローベル、ハウス(Pestalozzi—Fröbel Haus)學校へゆく。大きな木が茂つて建物も高い。廣い運動場はなくて、樹木と處々に阿屋がある。玄關から校長室へ入ると早や二三人の婦人も見學に來てゐる。先生が多い。二十餘人居る。秘書が急しく電話をかけタイプライターを打つてゐる。

こゝには保姆練習生も二百人程ゐる。幼兒も二百人位ゐる。三歳より六歳迄で六人に先生がついて茶菓を與へてゐる。こゝには玩具や人形の家がどこにもある。

大きな建物四棟の外に新築中のがある。一千八百七十三年に、フオン・ヘンリエツト・シユレーダーが設立したのに初まり、現在では當市で有名な幼稚園である。風呂場がある。三つ浴槽があつて入浴せしめる。小使も數人居る。

一ケ月三マークから十マーク迄保育料を納める。貧兒は無料である。階上階下を見る。五十坪位のホールが二階に、同じ廣さの体操場が下にある。室數も多い。練習生の手工室、裁縫室、讀書室ヂスカツション室、製本室、木工室、レクチウア室がある。

學齡兒で朝は他の學校へ行つて、午後このハウスへ來る者の室もある。炊事室も立派である。庭

の木の間に雞舍がある。四坪位の農園が十四五ある。神經質の子供は、別に一室で保育する。二三歳の子供には幼稚園で赤い上着をきせて五六人に二人の先生がついてゐる。

仲々校運隆昌で參觀者も多く、日に增しこゝの事業は實を結ぶのである。校長室で校長に學院アルバムや琴の爪入れの漆塗りの箱を呈し署名してもらひ、私も記念帖にかき、參考書繪ハガキを買ひ案內の先生にも竹に雀の手拭をあげる。一緒に參觀した婦人が切手をくれと私に申込んだ。

それから豫て行きたいと思つてゐた動物園へゆく。その頭字をとつた「ツォー」は驛名で、その驛へは度々行つたが、動物園は今日の樣な涼しい日に見ておくに限る。隨分廣い。チンパンジーが自轉車にのつてゐた。大勢の見物である。ライオンは親が八疋、子が四疋、虎の子四疋親四疋ゐた。

Waldchauke とかいた自然木で椅子を造り、山の家らしい料亭で飯を食ふ。小學生が見物に來てゐる。自然の儘の生活ではないが、建物はそれ〳〵熱帶や其の動物を產する國風に建てゝあるのが面白い。アラビアの土人の區劃がある。手品をして見せる。駱駝にのつてせ見る。手細工品の生業をしてゐる。動物園の一區に人間を入れて見せ物にした所も妙である。可愛想とも思ふ。二十人位ゐるであらう。

植物園へは行かない。活動寫眞をうつすから一マークくれといふ。歩いてゐる所をとらす。動物園へ行くときウイテンバーグ、プラツツ市で場を見た。肉、花、果物等を天幕張りで賣つてゐる。

あんなのを見るのが面白い。細雨が斷續して降る。下宿に歸る。

主婦が「日本茶をあげませうか」と英語でかいて召使にもたせ來る。いりませんと答へる。岸博士より來電。夕方支那飯屋へ行く。日本婦人が二人子供をつれて來てゐた。どうも晩には支那飯が一番甘い。

歸ると主婦がクリスマスの人形を出して說明してくれた。ドレスデン附近の貧乏な農民の副業にこしらへた木製の天使や、サンタクロースなどである。

八月十日

タキシーで、ウキツレーベンスクールの男子部へ行く。校長に遇ふ。學院兒童の成績品を上げる。こゝは兒童數七百人、十九組ある。

第一時はヴーマー氏教室の十一二歳組である。兒童はシャツと半ズボンである。

教室には戶棚一、暖房の上の小戶棚、水槽二、虫の飼育箱一、新聞の繪の切り拔、兒童用黑板は横の壁、地球儀、ヒンデンブルグ大統領の小寫眞、ベルリン周圍圖等があるる。

算術である。

板書

						E 1 3
					Z 7	3
				H 6	1	
			T 1 ×	0		
			5			
		H 6	3			
	Z 7	0				
	2	4				
E 1 3	1					
3	2					
3	3					
3	8	4	3	3	1	3
3	5	0	1	3	7	3
T 1 ×	H 6	Z 7	E 1			

兒童は何も出さず、問答にて計算。

この例題に七分間かゝる。

問答しつゝ一名を前に出し、又質問して計算する。これを、入念に說明し三十分程かゝる。氣の永い教授。兒童は飽き模樣である。

これを記帖せしむ、兒童は帖面にインクで入念にかく。

別に

2118	1915	2479
×45	×36	×54

の三問を板書したけれども、第一問にかゝつたものは四五名であつた。記帖に暇どつたのである。その教師は篠原助市教授、手塚岸衞氏などの署名の帖を見せた。餘り感心した教授ではなかつた。

次に校長が公堂、雨天体操場、教員室を見せてくれた。こゝは女子校と幷んで建てられ地下室をいれて五階ある。立派な建築である。この校長は一九〇〇年以來此處に在職し校長になつて七年になるといふ。

校庭へ行く。廣葉のロスカチタニアが茂り、アーホールン、リウスターも枝を茂らしてゐる。子供が遊ぶ。運動場は女子と半分々々である。室内体操場は一日交代で使用する。体操器具は澤山ある。運動場は四百坪位。

となりの大きな建物の背面が、運動場に面してゐるから、その壁に動物の繪を描いてあるのはよい思ひ付。小鳥を飼ふ大きな網籠は空になつて、小さな花園には赤い花がしよんぼりある。第二時は八九歳組を若いプレンヂ先生が教へてゐるのを見た。三十七人の男兒である。

出席をつける。書取の帖面をかへしてゐる。一冊とつて見ると一九二六年、十二月に朱で訂正し次に一九二七年六、二九日に朱で訂正してある。隨分使はない帖面と見える。

兒童は双眼鏡入れの様なサンドイツチの入れ物を首にかけてゐる。机上には何も出さず、ドイツ國語の教授である。發音訂正。方言訂正の例を兒童にいはしめ、それを各自に發音せしめたり、板書したり、活用を教へたり、兒童はあくびしてゐた。

第三時、クルツ氏教室、十三四歳男兒三十人。地理、教材は太平洋諸島とアメリカ、濠洲の圖を兒童に板上に書かす。三名の兒童を地圖をとりに走らす。太平洋の島の名をいはしむ。

こゝで一寸困つたのは、ヤルート島は日本領であるといふことを兒童が言つたとき氣の毒な氣がした。それから濠洲の地勢氣候等問答。兒童が兒童に發問する。

コロムブスの話、西印度諸島の話。中央アメリカ、南北アメリカの話、地勢、他の組でゞも左様であつたが、この先生も溫厚な人だが、生徒が答にいきつまると床をふみならし大聲叱呼する。英國とは大分違ふ。日本流の教育法だ。否日本がドイツ流を汲んだのか、先生によると、黑板拭ひ用の海綿で、兒童の鼻の先を小びつどく、つゝくのもある。

これで十二時である。小さい組は歸宅する。玄關で先生に握手する。母親が數人迎へに來てゐる。親爺が、ちよろ松を自轉車の先に乘せて、スーツと歸る、何處も同じ人情だ。

校庭の端にある手工室を見る。この先生ビスマルクを小さくした様だ。著書もあるといふ。成績品を一つ〳〵棚から下ろして見せる。此の点英國とよく似てゐる。見る方が辛かつた。一目に見え

るものを根氣よく說明する。これが大陸の人間の長所だと辛抱して一々褒める。室にあるものは大略。

大ボール紙切器（立派なもの）
壓搾器
丸トイシ、
ロクロ　大鋸　三〇
鉋　三〇　成績品戸棚　一
ヤスリ　五〇　五台の長机に六人宛
鐵の万力はしつかりしてゐる。

成績品は、厚紙細工（四角形、六角形、狀差、表紙、盆、〇、木工（狀差、盆、ガクブチ、箱、寫眞、帽子立かけ）位で英國と大差ない。

材料室が横に二坪程ある。中は亂雜、兒童が來ると十二人だけ座らしめ他は歸らした。ブリキの小片を與へ鍵などにつける圓形番號札をつくらした。銅貨をあて〻圓をかき云々…と教へる。

こゝの校長に教育方針などを聞きたいが、今日は非常に暑く、校長は疲れてゐるらしく、且つ忙しいらしい。英語も拙い。仕方がないから午後は授業もないので此處を辭し、フリードリツヒスト

ラツセへ行く。

チヤガルテンの森の中を通る。晝尙暗く涼しい。二時近くになつて午食し、クツク社へ行くと、巴里から返事が來てゐて、マゼスチツク二等の空室があるといふ。太平洋の航海も二等にして契約する。半金丈入れてくれといふ。

大統領官邸前を通る。門前に巡査が二人居り、玄關に銃をかついだ兵士が二人ゐた。左官が垣を修繕してゐる。この邊は官衙區域である。

ハンブルグ、アメリカン汽船會社のショーウインドーに北歐の地圖の善いのがある。買ひたいと思つてゐたので、中へ入り賣つてくれといふと、時節柄御見舞として喜んで差上げますと巧な英語でいふ。ウエルトハイムへ行く。米國婦人がパイプを買つてゐるが、賣子の娘に分らんので通譯してあげる。上には上があるものだ。書籍部にスプランガーの心理學のよいのがあるが、今日は金がない。

寫眞屋へより三浦教授を訪ひ、日本茶と、海苔をよばれる。バルコンは涼しく、白い入道雲の立つ青い空に飛行機がとぶ。伯林の空には飛行機が蜻蛉の樣にとんでゐるかと思つたが、一日に一台見たり見なかつたり、無論毎日とんではゐるのであらう。

七時より日本人倶樂部へ行つて、醫師の十日會の人々に、お產や細菌、其他醫學上のフイルムの

映寫を見せてもらふ。日本へもお產の映畫は來たが實に明瞭なものであつた。殊に細菌が血液中にて活動するのを顯微鏡的活動寫眞にとつてあるのは驚異である。醫學界に益すること大であらう。しばらく見てゐると、息づまりで腦貧血の氣味があつたので、バルコニーから見る。隣の三階から見下して不思議がつてゐる人もあつた。

歸ると十一時半大浦氏來訪、參觀の打合せをする。手紙が澤山來た。それをよんでしまつても三時迄ねむられなかつた。

八月十一日

八時に朝食を濟すと、今日はドイツの新憲法發布の記念日であるので、ウイツレーベンの女子校へ招かれて行く。タキシーで玄關へゆくと、女教師が公堂に入りかけであつた。男子部は八時から九時迄に終り女子は九時から十時迄である。

校長は女兒を着席せしめてゐた。この点日本と違ふ。校長が子供を席につかした頃女の先生などが來るのは妙だ。正面には左右に二個宛一間半位の高さの綠樹の植木鉢をおいてある。着席すると、校長は壇上正面に上る。老女教師がタクトをとつて前の二列丈が三重奏で唱歌をやる。

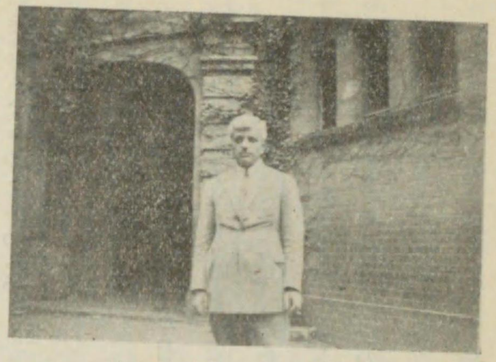
次に二女兒が順に出て、校長の前の演壇の前へ行つて、一寸片足を曲げて一揖し、ドイツ愛國の

詩のレシテーションをする、一言一句立派であつた。

それが濟むと、校長が祖國を愛せよといふ訓話である。話は男子校の校長と違ひ下手である。十分程して、後の二列の女兒が四重奏の唱歌、仲々日本の女學校の上級より甘い。又二人上級の子が順にレシテーションをやる。それが終ると校長が訓話を續ける。つまり一度に長いと飽くから、變化をつけたのである。二十五分程話した。向ひ側にはピアノの傍に老女教師が上席で七八人女教師が並んでゐるが、美しい人は居らぬ。

然し女兒の可愛いこと、私は英國でよりも久し振りであるから、此處の子供が美しいと思つた。黄金色の髪、赤、青、白、黄とり〴〵の服、眼、顔色、口もと誠に愛らしい。どうして此のあどけない子供が此の街でよく見るぶく〳〵と太つてとても日本の人力車に乘せたら、こはれそうな婆さんになつてしまふのかと思ふと不思議でならない。十六七迄の子供は格別愛らしい。

終りに一同起立して、片手をあげて、ホー〳〵と呼ぶ。萬歳にあたるのだ。そして國歌を合唱した。



ラムプレヒト校長

入口に立つてゐると校長が分つたかといふから、大凡わかつた。仲々立派な式ですといふと、よく來てくれた。忘れなかつたのは妙だといふ。何時迄ゐるか、も一度來いなど愛想をいふ。

こゝを辭す。昨日の新聞に明日は黑、赤、黄の國旗をかゝげる樣にとかいてあつたが、ほんのぼつ〳〵立つてゐる丈である。電車には一方に國旗と一方には當市の市旗である黑熊の立つてゐる旗をたてゝゐる。黑熊は御愛嬌だ。店も休んでゐない。

下宿へ歸るとき、今日は午食に出られないから、邦貨二十五錢で厚さ一寸の四寸角位のチースと十錢でトマト二つ、十二錢で大きな菓子三つとを買つてかへる。これに十五錢のビールで午食には餘る程ある。バターを見たが日本の五分の一の値である。

津田氏より來電あり、無事の報にて安心。

八月十二日

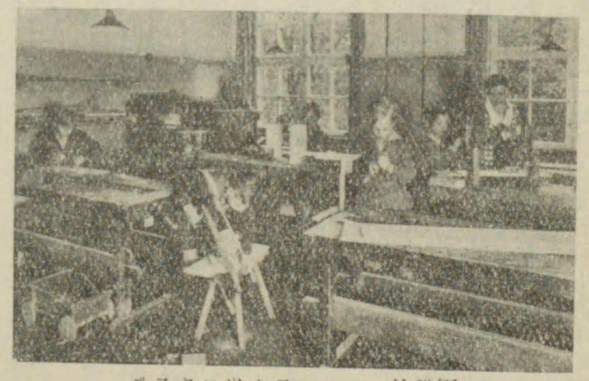
朝から大雨である。タキシーで、ニーリング、ストラツセの十番地、シユーレ、キンダーガーツンへ行く。これは二十年以前に、シヤーロツテンブルグに初めて出來、現在に於て、此の區に十校あり、ベルリン市内に四十校出來た位に必要な施設で、學齡兒であり乍ら、小學校へ入學するには心身何處かに欠陷のある者を一年間收容するもので、幼稚園と小學校の一年生とを結合したもので

ある。兒童は一旦は小學校へ行つて、そこで心身の檢査をして、他の兒童と一緒に就學出來ないものを此處へ送るのである。

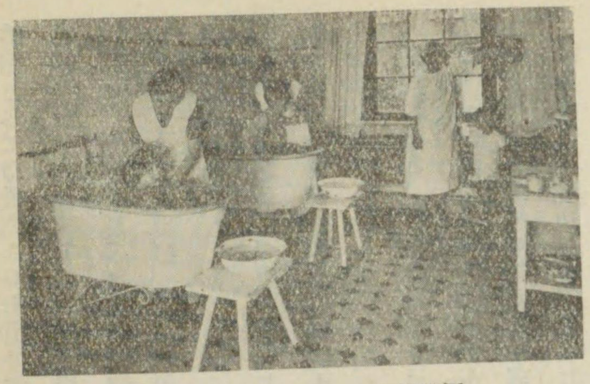
こゝの小學校の隣地四百坪位の處に七十坪程の平家建で、先生は一人である。玄關から入ると右の室が教室で、机は二人用十五脚あつて、十四名出席してゐた。成程、見た處兒童は何處か欠陥があるらしい。男女半々であつた。母親が一人參觀してゐた。教室は十三坪位で、周圍には額などをかゝげ、今子供が籠を持つて森へ行つた話をしたので、こんどは粘土細工で籠をつくらした。

出來上つた子は私の處へ持つて來て見せる「ゼア、ショイン」とほめてやる。籠の柄にした紙の小片を片附けさしたり、机ふきの布を渡したり、成績品には豫て用意してある、姓名入のカードを入れて保存するなど先生の小さいことまでもの用意が床しい。こゝで、看護婦が來て、子供に牛乳を與へる。牛乳と、携帶して來たサンドイッチを食べる。

それから、体操や遊戯や、恩物で塔をこしらへたりしてゐた。樂器はない、小さい太鼓を先生がたゝいて行進せしめる。正午になると皆歸つて行く。私の所へ來て握手して行く者もある。



ペスタロツチフレーベル幼稚園



ペスタロツチフレーベル幼稚園

此處では重に遊戯殊に手工によつて數の觀念などを教へるので、小學校よりは幼稚園の保育に近いと思はれた。誠に結構な施設である。時間割も定まつてゐて、毎週觀察して記入する帖簿をも見せてくれた。室は此の外に、先生の室と、石炭などをおいてある室とホールで、これも十四五坪で器具標本類はない。前は芝生で廣々としてこんな市中で三百坪餘りの芝生を十數人の子供の爲に持つことはよいことである。

夫から、ゲーテ、ストラツセに二つの齒科學校へを訪ねる。之は、シャーロツテンブルグ區三十五校の兒童の齒科診療の爲に小學校に附設してあるので、目下は女醫三人、看護婦三人であるが近日五人宛にするといふ。主事が一名ゐて、各校を廻り、此處へ來る必要ある者の手續をする。案内せられて見ると、待合所があつて、そこに兒童が待つてゐると正面に電氣裝置で、一から五迄の數字があらはれると順番の者が、その室へ行く。五室あつて(二間半に三間半位)極めて清潔に立派な器具がおいてある。別に待合所の前にうがい室がある。

玄關より入ると三十五校の兒童のカルテの簞笥がある。秩序

整然としてゐる。こゝを出て食事をし、三浦教授を訪ひ、共に中勘へ行つて、ビザを依頼し、ビアノ屋へ行き交渉する。大崎教授とも一緒になりトキワにて夕食す。今日は午迄雨風であつたが後は涼しい。一旦晴れて夕方また降り出した。

八月十三日

大浦氏を訪ひ、共にタキシーにてテーゲル湖にゆき、シャーフヘンバーグの島の學校へ行かうとした。先日來た、渡場で直接にその、島につけてもらう。波は靜に釣をたれて居る人もあり、綠樹の蔭汀に映つて美しい。

島につくと、船頭に謝して、ブイト飛び上る。すぐに茂みの間に入る。細徑が木立の間にある。人は見えぬ。犬も居らぬ。鳥もみえぬ。無論この、テーゲル湖中にある島であるから、小さいものである。でも視界は林でさえぎられるから、どれ丈大きいのかと思ふ。

程なくして、新しい校舍らしいのが見える。その横を通つて行くと、半裸体の學生らしいのが、木の皮を剝いてゐる。二人は梯子をかついでゆく。島の學校は此處かときくと、その向ふですといふ。垣をこへて行くと、水際に蘆が生へ、水汲場があつて校舍がある。

これが島の理想學校である。一まはりまはると、入口がある、學生が二三人除草してゐる。學校

を包んで森がある。

學生に案内を乞ふと校長室へ連れて行つてくれる。本が澤山おいてある。壁にペンキで學生の畫がかいてある。

バルコニーで、學生に口授してタイプライターを打たしてゐた校長は喜んで說明してくれた。又そこへ十七歲位の學生をつれて來て英語で說明さしてくれた。

この學校は一九二二年に創立したもので、初めこゝは此土地の豪家であるフンボルト家の別莊であつたのを、こゝの現在の先生に與へ先生は伯林市へ寄附し、只今の校長ブルーメ氏は此處にその先生三人とで二十人の學生を集めて學校を創立したのである。

無論、公立の學校である。現在教師は常任が四人で數學、博物、古典、倫理を分擔し他の課目は四五人の囑托教師が來る。目下八十人の生徒で入學は十二歲以上十八九歲迄で、十二歲組、十四歲組、十六歲組の三組にしてゐる。全部寄宿舍に收容してゐるのである。學費は一日九〇ペンニツヒの者もあり、三マーク餘を納める者もある。

島の學校

簡單なる入學試驗がある。學校の特長は、學校が塾制度になり勞働を課すること。學課の程度が進んで居ることである。在學は普通六ケ年である。校舍は此の島に三ケ所ある。

朝は六時に起床、島を一周して來て七時に學科を初め、九時半に朝食、それから學課や、体操がある。十二時半に午食して農業作業などをする。夕食は七時で、九時入床である。先生も學校に起臥してゐる。土曜には歸宅することも出來るし、親も尋ねて來る。酒煙草は禁止物である。

それから博物の先生に乞はれて署名し、土産をこの學生にまで與へ案内せられる。

音樂兼圖書室がある。二階には二三人位の室がある。屋根裏にもある。玄關には當番表がある。地下室には、炊事室、洗面場、風呂場がある。炊事女二三人が水を運んでゐる。十四五坪の木の蔭の校庭に机をしつけてある。こゝで食事をする。

その机の前に蘆が生えて、アヒルがゐる。板の踏台を水の上に伸ばして、ボートに學生がのつてゐる。湖水の向ふに白い帆がすべる樣に進む。夏の雲が湧く。微風もない靜かな朝だ。

一丁程あちらの木の間に、机をおいて黑板がある。木でかこまれてゐる。全くの密林だ。その密林をゆくと草葺の小屋があつて此處も教室に使ふ。そこを拔けると左手の柵内に牛が七疋草を喰つてゐる。右のトマト畑に學生が耕してゐる。四五丁の畑が、キャベツ、大根、瓜などを實らしてゐる。又進むと學生が伐木してゐる。

新築の校舍では、ペンキを塗つてゐる者、鋸で木をひいてゐる者、先生はゐないがせつせと仕事をしてゐる。森の中で掛聲がきこえる、十四五人が木を倒してゐるのだ。

又元へ歸つて反對の方向へ木の間を分けてゆくと古い納家がある。その横の古い家も教室や寢室にしてゐるのだ。納屋は會堂に使つたり一部は豚をかつてゐる。雞舍もある。小さい學生は古煉瓦を整理してゐる。小屋の古屋根を棄てゝゐるのもある。

この小屋の後の丘に上る。テーゲルの湖水をへだてゝ北の町が見える。長閑だ。草が濕つてゐる木の朽葉の香がする。露がポタリと落ちる。理想の學校だ。多年私が頭に描いてゐた學校だ。

ドイツも學制の統一と劃一を勵行した。そして學制が立派になり、完備したと同時に行きつまつた。統一の美から、再び統一を超越した變化を求めた。統一を破つて變化と復雜の美を求めた。然し此れは又善すぎる學校だ。現代の型を破り過ぎてゐる。

此の島は學校の島である。周圍二三哩の此の小島は學校王國の支配する國である。世界に數多くないであらう。他の住民は少しもゐない、教育の理想鄕である。劃一を破つて新式の個性に卽し、古典と作業の教育を施さんとする所に尊い体驗が與へられる。

昔の塾に歸つたのである。學校教育が大衆を集めて集團的に粗製濫造をする弊を痛感して、少數の學徒を少數の指導者が日常起居を共にして心身共に救うて行かうとするので、行きつまつた現代

教育の反動である。今後の教育は當然これに歸着せねばならんのである。

實に美しい島だ。靜謐が島を支配する。先生と生徒とが林で、水際で、畑で少しも他の妨害なしに樂しい生活をする理想鄕である。ドイツも規則づくめの喧しい國ではあるが、どし〳〵新企劃を許すところに偉大な點がある。新しい企てを反逆者として鎭壓にのみ努めるのではない。

學徒よ、此の島の學徒よ、汝等に榮あれ。學生はボートに吾等をのせて木の蔭から漕ぎ出した。テーゲル通ひの白い小蒸汽船が行く。向ふ岸につく。學校の規則ですから、十ペンニヒ渡し賃を下さいといふ。三十ペンニヒを與へて堅く握手して分れた。

森の間を通つて電車で北へ大廻りして、又フリードリツヒストラツセの方へ出て、大浦氏をフイーテとヘーゲルの墓へ案内する。雷がなつて夕立になつた。

午食して眼鏡屋と寫眞機屋へより三井物産へ行き、夕方ルーマニア人レフター氏に晩餐に招かる。男女五六人來て非常に賑かであつた。おそく歸ると、ドクトル、ラムプレヒト氏が訪問して呉れ、明日茶に來て呉れとの事である。

八月十四日

起きると直ぐ荷物を整へて、主婦に今朝轉宿するといふた。主婦からは明日中といふことであつ

たのであるから、どうしたかと心配して聞く。明日は視察で忙しいから今朝かはると述べ支拂をすます。ミナといふ老婆に心附を與へ、タキシーで、ルイボルドストラツセへ來る。

今日は一同フリウナウへ行く筈であつたから、揃うてツオーの驛へ行つた。先發のルーマニアのレフター君の友達も兩三名來てゐた。こゝで私は午後、茶に招かれたから濟まないが失敬すると一同に申譯して歸宿。

荷物を取り出して午後一時、氣輕で、ヒヨウキンなワルター婆と台處で飯と冷肉を食ふ。それから一休して、午後三時過、モンゼンストラツセの校長ラムプレヒト氏を訪ふ。煙草を買はうとしたが何の店も休んでゐる。校長の奥さんも出て、茶の用意が出來てゐる。

奥さんの從弟夫婦も來て話をする。校長はウイツレーベン女子校に勤務してゐる善い人だ。校長の話を總合すると。

一、ベルリンの小學校長の年齡は大抵四十五歳以上だから自分は三十八歳で若い方だ。俸給は一ケ月四百五十マーク、この八月から全般に十割二十割の增俸があつた。

二、教師は六十五歳になると退職せねばならん。

三、在職中妻には毎月二十マーク、子供には一人につき十五マーク宛手當がある。

四、年末賞與はない。

五、女教師は未婚者をといふ規則であるが實際は既婚者もゐる。
六、教員會は一ケ月一回である。
七、シヤーロツテンブルグに六ケ所、若い教師を指導する會があり此の學校にも設置してある。
次の火曜に最近外國語の獨逸語に對する影響につき氏は講演し、實地授業もあるから來觀しなさい。
八、私はポーランドのポイセンに生れ、この市へ來て七年になる。昨年はフランスの各國人の講習に出席した。
九、ベルリンの小學校で教師は煙草をのまれない規則だが實際は休み時間に吸ふ者もある。
一〇、教員の任免は上司へ校長から申請する。
一一、午前十時日蔭に於て寒暖計が二十五度以上になれば、ヒート、ホリデーと稱し休校を校長が計らふことが出來る。

右の様な座談があつた。その内に氏の署名簿へ感想をかいた。子供と校長の弟、奥さんに土産をあげる。奥さんがピアノをひく、地震のことをきく。煙草をすゝめられる。五時半迄居て分れた。室には矢張りよいものはおいてゐない。三階の奥の部屋で、こゝでも校長はよい暮しは出來ぬらしい、天津料店で夕食して、ノレンドルフの活動寫眞を見る。

ヴワルド、クリーグと稱し三ケ月から上演してゐる。世界の大戰を寫したもの。戰前、ドイツの農工商業の隆盛や平和な農村の狀を寫し、バルカン半島の暗雲から開戰に至る迄を非常に手際よく表現して、ベルダン卽ち西部戰線からロシア軍との戰ひの有様、一進一退の模様を非常に巧に表はしてゐる。見てゐて私はドイツの爲に涙を流した。
ドイツ人も落涙するといふ。戰の悲酸殘忍さがあらはれてゐるが、終りの方は物足りない。もすこし世界の平和とか何とかの暗示へと進めたかつた。
歸つてラヂオをきゝ日記をつける。

八月十五日

朝プリンゼンストラツセの、ビクトリア、ルイゼリヂウム女學校へゆく。玄關へ入ると二人の當番の女生徒がゐて、英語の先生をよんで來る。それに大使館の紹介狀を示すと、一緒に校長の宅へ行かうといふ。それは街路に面した建物の中にあるのであるが校長が、參觀の順序を女教員に云ひつけてくれる。六十四五歳の上品な老人である。
この學校は六十七年以前フレデリツキ三世の妃であつたヴイクトリア、ルイゼが教育に熱心で、この學校のパトロンとして初めて出來た市立女學校である。

教師二十人、生徒六百人、十歳十一歳より入學十六歳迄在學する。入學試驗は四月に、小學教師の推薦と入學試驗とによりて入學を許可する。各學年二組宛六つのフォームに分れてゐる。

然し必ずしも年齢によつて分けない、能力制である。何か一つでも特長があればパツスする。入學試驗は決してはげしくない。父兄の柄はよろしかつたが只今では、勞働者、商人、クラークなどである。教育の主義としては、キリスト教主義で

一、ゆるすこと

二、隣人を敬ふこと

ビクトリヤアルゼ女學校

等に留意してゐる。職業的教育はやらない。

訓育に就ては、家庭に於けることは到底學校の監視出來得べきことに非ず。活動寫眞等も制限し得ず。私の生活は父兄が責任を負ふべきもので、到底學校では干渉出來難いといつてゐる。

然し又中には私の組の十六歳の女子などは男子の友達に就て、一々私に相談に來るものもありますといふことであつたから、私は日本では男女七歳にして席を同じうせずといふ位の言葉もあり その点日本は西洋と非常に違ひますと說明した。

上級の育兒についての講義の時間には生徒が新聞雜誌の切拔きを持參して互に說明して先生が批評してゐたのを見た。圖畫はとても拙い。然し半身像が二十三幷べてあつたのは流石だと思つたが近頃それの寫生はやらないといふ。作曲は仲々甘いそうである。

家事は教へない。裁縫は教へる。運動場は六七十坪で狹い。私が寫眞をうつしかけると二三十人の生徒が前へ集つて喧しいこと、無邪氣でもあつた。

こゝの教師は大學卒業後二年間研究して其の資格を得る。俸給は一ケ月三百五十マーク位であるといふ。校長室で雜談して、此處を辭すと大雨である。午後二時ウエルトハイムで簡單に午食して三井へ行くと金が來てゐない。前遠く賴んであつたのに困る。それから歸宿、夕方、食事をして調べ物をする。

夕方の風が凉し過ぎる。街路樹の葉がぽつ〳〵散る。雨が斷續して降る。ベルリンを去る日も近い。居心地の善い所だ。

八月十六日

朝から雨が降る。三階の窓から雨を見つゝ靜に朝食をとる。故郷を離れ、學校を離れ、家庭を離れてこゝでは淋しいとも思はぬけれども早く視察する丈は視察したい。もう大分日數が經つので今

一息で歐洲は片附けられる。三井の支店から電話がかゝる。

午から出る。止んでゐた空から又雨が降り出す。三階の三井へ行く。女店員が金を渡してくれる。百六十ポンド受取る。近處で午食する。グツク社へ行つて、太西洋をマゼスチツク號、太平洋を大洋丸で横濱迄船は二等米國の汽車は一等で手附金として半金四〇ポンド支拂ふ。別に、ドイツ地方、ウイン、ブダベストから伊太利スイスの案を相談して、明後日切符を受取りに來ることにする。別れるときその係りに二マーク握らしてやる。

雨をしばらく避けてゐたが、電車にのつて、ウイツレーベン校へゆく。教員の研究會へ招かれたからである。五時半開會の筈を、四時半に行つて見ると、學校は閉ぢて小使丈しか居らぬ。校庭や便所や所々歩いてよく視察する。その中に校長が來て、よく來てくれたとて煙草をすゝめられ話をする。それから署名したり、校長の寫眞をとる。運動場へ出ると女生徒が來たので一緒にうつす。

日本の學校なら夏の午後四時半頃には先生や生徒のゐる處は大分あるが、こちらは放課後になると直ぐ歸るらしい。

五時半に、十四歳女兒組の「ドイツの詩」について研究教授が初まる。附近の小學校の男先生五人女先生十八人來校、教室の横に居並ぶ。私は正面の席に座らせられ、校長は一同に「今日は大阪帝塚山學院校長庄野氏が教育視察の爲來伯せられ、只今臨席されたのである云々」と紹介する。私は

立て默禮した。

教授者は女の先生である。教室の前の黑板には、ミレーの落穗拾ひや、夕の祈や、眞晝の繪、街外れの繪などをピンで止めてある。詩の題が朝、晝、夜といふのであるからである。

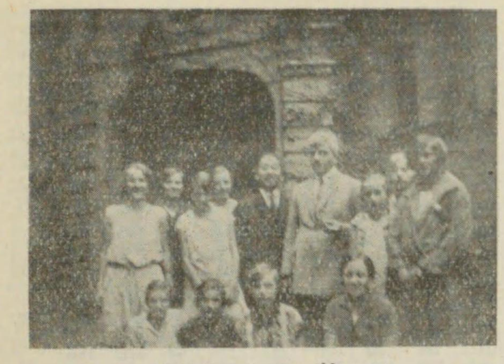
生徒は二十八人相當大きい。大抵、金の腕時計をつけてゐる。小學校の上級である。

詩形について問答。よく發問して、擧手した者に答へさす。生徒は日本の樣に擧手のとき「先生々々」と呼ばないかはりに親指と人差指とをパチ〳〵と擦り合はして鳴らすのがある。

詩を生徒が二人程巧に誦す。先生が模範をやる。それから鑑賞韻律の討論。字句の問答等をやる。板書は少しもしないで、教法も問答式で一時間をぶつ通した。七十分程かゝる。

男の先生は手帳に批評をかいてゐること日本と同じだ。教授は少し程度が高過ぎた樣だが、女の先生の教へ方は、きび〳〵して兒童をよく活動せしめ善い教授といへよう。

それが終ると午後七時から兒童を歸らして、批評會に入る。一同席について見ると、女の先生は皆、見榮がしない。一人だけ美



ウイツレーベン校にて

しい人があつた。

ラムプレヒト校長が座長につき、男の先生女の先生交々立つて批評や質問をする。校長は指導をする。然し日本の様に勿体ぶつた態度の批評や皮肉や長廣舌はない。簡單に要をつまんだところを打ち解けて笑ひ乍ら問答する。誠に氣持がよかつた。

それから七時半になつて、列席の中の美人の先生が前へ出た。校長は私に「これから、外國語のドイツ語に對する影響につき研究發表があります」と說明した。女の先生は大判の洋罫紙七八枚を朗讀的に說明した。フランス語、英語、イタリア語等より轉じて今日のドイツ語となつてゐるものを分類して解釋をつけた所矢張、學問の國である。

それから、それにつき質疑應答があつた。その時校長が、庄野さん、ドイツ語から日本語に轉じてゐるものがあるかと問ふたから「あります」と答へた。一例をいへば何です、といはれ一寸困つた「キンダーガーツン」もそうか、といつたから「そうです」と仕方なしにと答へたが、實は後で考へると澤山ある。これが終ると私に日本の文字を說明してくれとのことで私は「日、月、皿、山、川、舟」などの字を略畵と共に書いて說明した。

何か文章をかいて見せてくれといふから、草書で黑板一杯に、獨逸國萬歲と書いたら、皆總立になつて奇異な文字を私が早くかいたので「ワーツ」と拍手して、文字の意味を說明すると又大喜びで

今日の研究會は終つた。私に握手して行く人も多かつた。

校長は今夜はまだ、ユダヤ人の先生達が會合するので歸られないといつて、パンと魔法瓶入のコーヒを机の上に出してゐた。

ピアノを買ふなら明日一緒に行つてやらうといつてくれた。点燈の町へ出て、さて如何しようとしてゐると「街が分らんのですかと」尋ねてくれた若者があつた。支那食して歸宿。手紙數通。

先日ツオーで活動眞をとつたのを繪ハガキに燒付けて送つて來た。さぎではなかつた。ベルリンの町名は有名な人のをとつてある。學者なども多い、ペスタロジー、カント、シラー、ゲーテ、モンゼンの様なのである。其他、フリードリツヒ、ビスマークなどいふ町名もある。

この町の繪雜誌の表紙は時候柄でもあらうが裸体畵が多い。それも眞の裸体で多分はダンサーか、フイルムスターであらう。藝術もあらうが露骨の感がする。

子供が「オ早う」といふのが多い。日本人が多いからであるか。切手をくれといふ者も多い。こゝは乘合自動車から電車と地下鐵道とに乘かへられる。電車と地下鐵道とは互にのりかへられるので便利である。電車内で煙草を平氣で吸うてゐる。かまはぬらしい。犬をつれて電車にのるのは英國も同様でその代り二人分代金を拂ふ。

勞働者が晝頃、路傍でサンドイツチをかぢつてゐる。言ひ合した様に、水筒に水か茶を入れて飲

んでゐる。旅人でなくとも大きなルツクサツクに物を入れて背負つて行く。

帽をかむらない人が多い。前のボタンに帽をつるして歩く人も多い。アメリカ人が澤山觀光に來てゐる。百貨店には餘り高い物はない。こゝの新聞は小形だ。日本の新聞よりも小さく讀み安い。いらぬ記事が少いのか。

家は規則で三階建である。三階といつても、地下室は除き、西洋では日本の二階が一階といふのである。であるから實際は五階位である。その窓際に必ず花をつくる。よく咲いてゐる。庭がないからである。で西洋人が公園へ來て休むのも實際は全く土に親しめないからである。同じ階の一つか二つかの部屋にゐて上も下も横も皆他人の家だから、公園へでも來ないと、木や草や花が見えない。だから、窓際に必ず花を造る。

日本人は花を好むといふが、實際西洋には多く花をつくつてある。家庭にも驛にも公園にも店頭にもショーウインドーにも、花を愛好することを示すものがいくらもある。

八月十七日

早朝大浦氏來訪、共に郊外のオツトースクール訪問。これは昨日參觀してよいといふ返電があつたからである。路に添うて、新教育提唱者オツトー博士の家がある。その横の垣に添うて行くと五

オツトー學校にて

間に二十間位の平家建の校舍がある。

眞中が廊下で左右に小さい部屋が六つ宛ある。これは二十一年前、オツトー氏が或るパトロンから住宅と兩方を寄贈せられたとき創立したので、ドイツで少い私立學校の一で有名である。兒童數三十六人、教師四人と囑托が二名居る。オツトー氏の娘も教へてゐる。授業料は一年四百マルクで、隨分此國としては高額である。無論一の研究機關として市からの補助もある。

教育方針は自發活動を重んじ兒童中心主義で、教師の選んだ本を多く與へない。事物それ自身につき研究せしめ、兒童自身を發展さすことに努める。

一教室大抵五六人宛である。教室も粗末、校具標本は何にもない。壁は生徒が塗替へてゐる。腰掛を直してゐる者もある。授業は見るべきものがない。校長は書物を隨分澤山著してゐる。未來の教育、學校の改善、家庭の改善等も有名な著述である。

氏の住宅の二階の一室には事務員が二人書物や雜誌を發送してゐる。著書で一杯である。それ程氏は研究を發表してゐるのである。氏は六十四五の老人で色々話を聞いた。然し英語は拙い。

校舍の內部は粗末であるが、運動場は四百坪位あり、その傍に白樺が生えて樹木も多く閑靜な所である。然し實際教育そのものは、最新式として賛成者も多いが反對者もあるのであらう。然し此の國では兎に角教育行脚者にとつて名所の一つである。

兒童に繪をもらつたり色々話したり寫眞をうつして出る。又雨が降る。日本の梅雨の樣な天氣である。それから午食をして大浦君を案內して、ゲーテストラツセの學校の齒科診療所へ行く。門で主事が外出するのに出遇つたがまた引返して寫眞をうつさしてくれて、バスまで五六町送つてくれた。

シロース城へ行つて寫眞をとり、クツク社へよる。二マークストアーへよる。善い物はない。ウエルトハイムで土產にかみそりを買ふ。ゾーリンゲンの二人子供のマークがよいのである。英語を話す事務員が二階三階と同伴してくれる。これは英米の客の便利の爲である。親切であつたから金を與へようとしたら取らない。尤も大勢が橫で見てゐたからかも知れない。

それから歸宅する。晩はルーマニア人に返禮として、こちら二三人が招待する。

八月十八日

午前は先日來の疲勞に付休養、午後久次米教授旅行より歸り色々その話を聞かしてくれた。伊藤

久保氏も來訪。昨日ウエルトハイムで土產にゾーリンゲンのツインドル印のかみそりを注文してあつたのを早速配達して來た。

ドイツ物產より信用狀を書留で轉送して來る。久次米三浦氏とピアノ屋へゆき、一臺契約、荷物とハンブルグ迄の運賃とで計八百マルクになる。それから日本迄の運賃は百圓以下、稅が貳百圓程かゝるかしらん。も一度來て金を渡すことにする。寫眞屋へより、エルネマンの、レフレツクス取寄せ方依賴。トキワにて夕食して歸る。大浦君と電話にて明日の視察を打合せする。

愈々ベルリンに居る日も少くなつた。今晩は久保氏知人の案內にて、ブルーマーストラツセのカシノダンス場見物。四周及天井は支那、及日本の風景を畫き、色電燈十八臺、その廻轉につれ、人も壁も天井も七彩の銀河が宇宙に施轉するが如く頗る美觀であつた。客の各テーブルに電話機あり互に通話し得、バンド二組歐洲へ來て初めて見たる立派なダンス場であつた。

八月十九日

朝雨の中を三浦大浦氏と共にヴクトリア、ルイゼ、プラツツ附近の私立家政女學校レツテ、ハウスに行く。本校は一八六六年レツテ氏の寄附創立にかゝるもので、本建築は數年前完成したのである。中庭をはさんで圓形六階建の立派なものである。

他に英國、ドイツ人等九人と共に、校長室に於て校長から大略の説明がある。此處は女學校を卒業後の妙齡の女子が三ケ年間に各專攻の研究をする家政學校で、午前九時より午後一時過と午後二時から六時までとの二部に分れてゐる。生徒數約二百人教師百二三十人といふ大規模の理想的家政學校である。大部分は富豪の子女であるといふ。

食堂は毎日二三十人が當番になり一人が六人分の炊事の準備を整へる。家庭的の食堂である。

洗濯アイロン室　大机六臺の上で、電氣ごてを用ひワイシャツ等にアイロンをかけてゐる。

炊事第一室　生徒七名が無煙炭で大きな最新式のかまで物を煮てゐる。料理臺七臺。清潔なこと

第二炊事室　生徒十二名、料理臺二、大かまど、肉を煮てゐる。

第三炊事室　大机三、瓦斯かまど六尺四方位のもの一、其他三、鍋數十個を整然とならべてある

子供看護室　ベッド、ガラス戸棚(醫藥入)子供看護用うば車三、ガスかまど。

第四炊事室　一間四方の電氣かまど、別にかまど四、机、床は大理石塊の洗ひである。

幼稚園第一室　十坪位の室の卓をかこみ、五人の子供に育兒練習生三名ついて、手工をさしてゐる。

第二育兒室　子供四人、練習生二人。手技。

大便所　八つ位の腰掛便器が並んで、その間に何の目かくしもしてないのは日本人には異様

に思はれる。手洗器八個

第三育兒室　子供四人、練習生二人

食器洗滌室、炊事室　これは年少の女子に説明する爲の室で設備完全。

製本室　紙の裁斷器と壓縮器は大きく立派なもの、皮表紙、紙表紙、背皮の金文字、表紙のデザイン等をさしてゐる。素人と思はれぬ。

理科室　實物幻燈、階段式教室

化學實驗室　男子二人の先生が、牛乳とか其他肉類の化學的實驗をさしてゐる。設備の行屆けるには感心

ミシン室　大机三、足ぶみミシン二十臺

裁縫室　裁ち方練習　手ミシン十臺

裁縫員養成室　三年間修業

圖案意匠室　寫生をしてゐる。大きな織機がある。

購賣室　筆、紙、墨類

細工室　帽子や電燈のシェードなどをやつてゐた。

裁縫室　編物室、こゝにも織機がある。

刺繍室　捺染室大仕掛にやつてゐる。
手縫室　其他講堂、唱歌室を一覽。

午後一時になりかけたので大急ぎで三人中勘へ行く。オーストリ、ハンガリー、及チエツコのビザをとつてもらつてあつたのを貰つて、タキシーで米國總領事館へかけつける。

ビサを依頼すると寫眞を持つて來ゐない。恰度あり合せの自分の繪ハキガを見せると女事務員それでよいといふ。それを貼り付けて、室を二つ訪づれて出來上る。

ウエルトハイムで午食。クツク社で愈々中歐旅行の切符を二百五十圓程で買ひ取り、英國より日本への切符半金入れの受取りと切符引換証を受取り、フリードリツヒ街の土産店にて種々買物をする。それから、寫眞機屋へ寄つたが言付けたものが來てゐない。支那飯屋で夕食後ビクトリアルイゼバーに少憩。久次米氏などゝ分れる。

朝津田氏から佛教聖典贈らる。旅中の默想には非常によい書である。

八月二十日

一時にドイツ物産へ行き、三〇ポンド受取り、信用狀はハンブルグ支店に預けおき必要に應じ金を電報にて受取れる樣にして、午食。鐵十字の勳賞をつつた兩膝から下のないものに、街で金を與

へた。ヨーロツパには乞食が多いが、此の樣なのや、あはれな者にはつとめて小錢を與へる樣にした。

クツク社で兩替して、ビアノ屋へより、一旦歸り散髮して、三浦大崎氏と又ビアノ屋へ行き愈々契約して支那飯屋へゆく。

愈々出發の日も近づき忙しい。

八月二十一日

日曜の雨は休養に宜しい。三時頃午食と朝飯とを兼ね、荷物の整理をする。

ビール種類

ボツクビア　三月にだけ飲む、頭へくる、下級者に賣る店があり、飲みつ踊りつするものなり。
アマンビア　身体の弱き者に醫者が與へる、冬の頃暖まる爲これのスープをつくる。
ヘレスビア（ビルスナー）　ボヘミアにて作る、色うすし
ヅンケルスビア　色黑し、味重し、頭にくる　これが普通
スパーテンブロイ　初めの釀造者の名をとりしもの。

腸詰（ソーセージ）種類

チヤーベラトボースト、ラウホボースト　牛肉と Swine とをまぜしもの。
リバー、ボースト　牛のリバーより作る、あひるのリバーは高く、クリスマスに用ふ。
ブルート、ボースト　Swine の血と脂とを入れる。
ボツク、ボースト　ボツクビールと一緒に食べる、煮たてを食す。
ブルイ、ボースト　玉葱を入れたもの、煮たてを食す。
ビナー、ボスチエン　小さくうすく、二つづゝつながり居るが特色、煮たてを食す。

八月二十二日

十時迄荷物の整理をする。スーツケースに土産その他不用のものをつめ込んで、後からミュンヘンへ送つてもらうことにする。學院生徒及父兄から澤山手紙がくる。

ラムプレヒト校長に宛て寫眞を擴大したものを送る。三浦、久保兩君がロンドンへ出發するので伊藤教授と四人でツオーの驛へゆく。十二時半ロンドン行(ヘーグ經由)は出發する。出帆以來の親友をおくるので感概は深い。

驛の近處で伊藤教授と午食を共にして、それからクルフツスタンの大村閣下を訪問して、滯伯中の禮を述べ、それから、ウヰルマースドルフの元の下宿へゆく。老女中ミナが病氣で入院したとい

ふ。となりの煙草屋で小包を受取り、勝川教授を訪ふ。氏は私の元の下宿へ來て、戸口で郵便配達夫に津田氏から送つて來た佛教聖典を賴まれて現在の下宿へ持つて行て歸つた所だといふ。

これにも出帆以來の厚意を謝し、分れを告げ宿に歸り入浴して、伊藤教授と共に、ノレンドルフのピアノ屋へ行き代金を支拂ひ、荷造りの狀態を見る爲に、地下電車でずつと市の東の運送屋へ行く。太つてゐる主婦に話して見せてもらい箱の上に宛名を日本字でかく。ハンブルグまでの運賃五十マークである。

それを終つて出かけると亭主が後からやつて來て、酒手をくれといふ、二マークやつて充分注意してくれと賴み、支那飯屋にて久次米、大崎、伊藤君などと別れの夕食をして散歩して歸宿。

ワイマール

八月二十三日

午前中整理にかゝり午後大浦氏來訪、午後三時半共にタキシーにて、アンハルテンバンホフへ行く。久次米君も送られる。出かけに下宿の主婦が日本茶を入れ別れを惜しんだ。少し慾な女ではあるが眞情が可愛い。

ワイマールへ向け發車、久し振りに快晴の野には麥をかり入れる百姓が見える。汽車は西南に走る。エルベ河を渡る。造林の松の木が美しい。六時ウイツテンバーグ通過、煮たてのソーセージを二個紙の盆にのせパン二個が四十五錢である。

ハレの町を過ぎて日は暮れる。丘の家に灯が見える。八時前ワイマールに着く。驛前の、カイザーオーグスタホテルに入る。靜かな田舍町である。

こゝは、元サクソン、ワイマール大侯爵の城下人口三萬の古い都會である。ゲーテは一八三二年死去するまで五十六年間此處に住んでゐた。こゝには又シラーの家もある。

食後暗い街路樹の下をコツ〳〵と散歩する。思ひだした樣に電車が通る。二人三人、人が通る。公園は暗い。久し振りに靜かな田舍の街へ來てホットする。佛教聖典をよむ。

下のバーに、サクソニーの若者が數人卓をかこんでビールを飲む。主婦が出て來る、「今晩は」と皆挨拶する。村の感じが出て來る。ねまきのゆかたを着て便所にゆくと、チヤンバメードがジツト見てゐる。

八月二十四日

伯林の疲れでグツスリ眠る。下のガラス張りの食堂で、ハムエグと、コーヒを喫する。案内書を

ゲーテの家

讀んであつたから、宿で地圖をもらひ電車道に添ふて南へゆく。

こゝでも小學生が十一時のパンを校庭を歩き乍ら食べてゐる。公園がある。陸橋を渡る。婆さんが背に荷をかついで通る。ゲーテハウスと博物館へゆく。田舍の女學生が先生と見學してゐる。

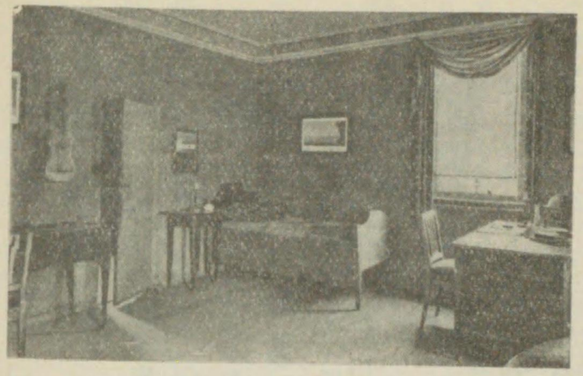
三階建の間口の大きい家がある。尤も今は博物館と兩方であるから。ゲーテの像が多い、四千冊の圖書もある。彼の書齋の暗きこと、小さい窓が二つある。それよりも彼の臨終のベッドのその儘にあるのは今昔の感に堪へん。荒板の床にカーペットもなくせまい部屋の隅の小さい床でこの大文豪は永久の眠についたのである。

筆蹟もある。什器もある。部屋數も多い。ピアノがある。これを彼の最愛の妻が彈じたのであらう。こゝを出て直ぐ近所のシラーの家へ入る。これは小さい。不相變彼の筆蹟や肖像が多い。ゲーテは富んでゐたが、シラーは貧乏であつた。

然し彼の臨終の床の上にバラの花を澤山おいてあるのは、隨分彼の崇拜者が多いからである。ゲーテといひ、シラーといひ立場は異るが、何だか、シラーといふと柔味がある。彼の詩は多くの女

性をひきつけたか、髪の毛に手紙をそへたのもある。

この家の前は並木で、小さい水盤がある。二人互に往來して文學を談じたのであらう。この小さな町から立派な文豪を出したのも故あるかなである。といふは、こゝは丘が起伏して靜かな天地である。恰度ストラトホードの樣な所である。想を練り文を遺るに適した所といへよう。



シルレル臨終の部屋

大きな公園を歩いて、南の方へゆく。二人の墓に詣でる爲である。左の丘を見つゝゆくと右に新しいカテドラルが丘の上にある。バラが階段の前に咲いて美しい。立派な墓が澤山ある。

二人の婦人に尋ねる。仲々廣いので判り難い。漸くにして、サクソン侯の菩提所に來た。少し違いで時間に後れ内部を拜する事が出來ん。こゝにゲーテをまつゝてあるといふ。

ベンチに腰をかける。物音一つ聞へぬ。又大きな木の茂つた下をぬけて街へ出た。

私は初めに南方へ行き過ぎたのである。二文豪が散歩したであらう街は今でも靜かで、小學生が歸つてゆく。線路工夫が工

事をしてゐる。繪ハガキ屋が多い。

公園の近くのホテルの食堂で午飯をたべる。二時になつてゐる。水密桃を六ツ四十錢でかつて宿に歸り、ソフワで食べる。トロ〳〵と眠つて、下へ行き支拂をする。こゝはチツプを二十パーセントとる。今朝の朝食の料をかいてないので、こちらからいふてつけさす。四時過の汽車にのる。

丘の上の畑に妻子總出で麥をかつてゐる。烏がとぶ、畑で牛にひかした大きな車に刈草を高くつんでゐる。川が流れる、丘がある。丘に添うて家が續く。英國の田舍と違う。空がどんよりする。古い家が見える。風車がある。寺の尖塔がそびえる。林檎が赤くなりかけてゐる。

二時間程でライプチツヒに着く。驛前のターミナスホテルに投宿。夕食後、目貫の通りを散歩する。中々大きな町である。人口六十五萬人あるといふから尤ものことである。

ライプチツヒ

八月二十五日

朝から大雨である。食事がすむと直ぐ驛前の觀光自動車にのる。雨がふつても十人位の同勢は早乘込んでゐる。どうも此頃は天氣が惡い。

オーグスタプラツツに出る。研究所があり、女子大學がある。大休此の町は一年二回のメツセーといつてパテント品、機械品其の他の市があるので名高く、一方圖書の賣買と毛皮なども取引される。商業の盛なる所である。であるから本屋、紙屋などの大きなのが多い。メツセーの時には澤山の人が世界の各地から來る。そしてそれは十六世紀頃から今に至つてゐるのである。

クーニツヒプラツツには織物のメツセー會場がある。重要な場所である。立派なモーリンの銅像を見てトマス寺院の横を通り、ツーリンガーホフに行く。此れは古い町にある、レストーランで、一五八一年から現存してゐる。部厚の天井板の彫刻、太い岩丈な柱、鹿の角其他を飾つてあるのが、時代がついて古色蒼然として仲々雅致がある。今でも澤山の客がある。大きな机、壁の繪、板の椅子等、どこか京都の古い料亭にも比したいが、これはドイツ流のがつしりした古風の家である。

二階にも十數室あり、學生がビールを痛飲した部屋には色々の繪がやる。大きな食堂もあり狩獵家連の部屋もある。戰爭畫のリリーフ、壁に飾つたギターも古く非常に由緒ある家である。

それから市役所と此の市で有名な大審院を見物してキングアルバートパークに行く。ビスマークの像がある。此の邊富豪の邸宅も多く殊に大學町は音樂、醫學、病院其他立派なる設備は非常に注目に値する。四千人を收容する市立の病院もあり、此の邊から立派なドイツの將來を負ふべき學生が作られねばならぬと思つた。先づ今迄見た中で立派なものと思ふ。

それから圖書館へゆく。立派な建築で、その前の芝生の廣場のよいことには感心。メセー機械館の尨大なのを郊外に見つゝ一八三〇年ナポレオンがドイツに攻入つた陣屋であつた古い平家建の家を見る。墓地も仲々美しく、殊にその横に六百萬マークを投じて作つた、佛軍擊退の記念碑は高さ九十一尺、荒削りの石を積みあげ結構の壯大なこと、プロシアの意氣込を示して四邊を壓してゐる。雨は斜に土砂ぶりである。

一同レストランへはいつて寒いので茶をのむ。アメリカの婆さんと話がはずむ。金の勘定が分らんので困つてゐる。案内人にも茶をのませて十二時過歸途につく。

宿の食堂で午食する。ドレスデン行は二時四分と六時十一分とであるが、都合で雨は降るし仕方がないから、勘定をして驛へ急ぐ、上靴を忘れてとりにかへる。漸く間に合ふ、雨は益々降る。

車窓の光景は變らない、ビーツを澤山栽培してゐる。二時間でドレスデンに着く、驛前のビクトリアホテルに投宿、氏名さへもかゝなくてよい。

入浴して夕食後散歩する。大きな店がある。人通りも多い。新式のコーヒ店で一服して歸り入床。

ドレスデン

八月二十六日

十時にサイトシイングカーが出るので九時にはドアをノックに來た。用意して驛前へゆく。二十四五人の一隊である。寫眞屋が寫眞をとる。

ビスマーク、スクエアから大學前を通り、南の丘の上に至る。公園になつて丘の上には普佛戰爭の大記念碑が立つてゐる。

市の光景を見る事が出來る。こゝにも郊外園がある。師範大學、別莊地を通る。公園、池運動場、そこには裸体の男子が砲丸投の銅像が青く光つてゐる。

博物館、ホテルホスピツツ、小公園、市役所を過ぎ中央區に至る。カローナ橋で、エルベ河を渡る。水は赤味かゝつてゐるが河蒸汽船や砂濱がある。田舍の味だ。

寒い。婦人は毛皮の襟卷の冬外套を着てゐる。レインコートでは寒い。日本の十一月の初めの樣だ。

野生林公園、小學校をはるかに見て、對岸の丘の上に上る。河に添うての丘には城がある。別莊

がある。森の下を過ぎて見晴しのよいコーヒ店で小憩する。こゝから全市を見下ろす。

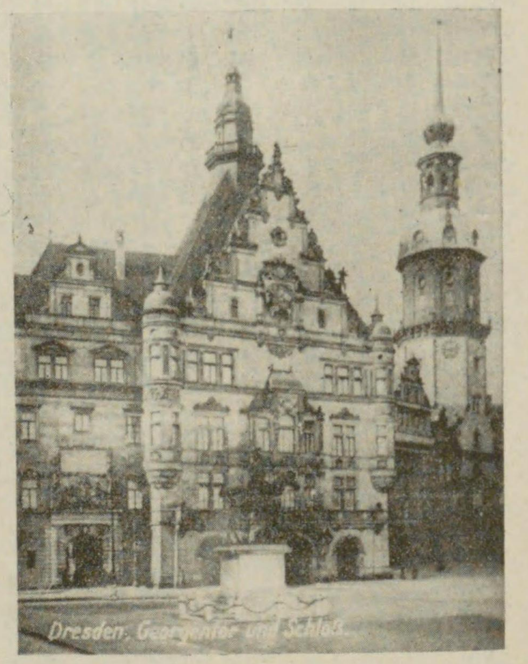
下にエルベが流れ、その向ふにドレスデンが田園に包まれ長く伸びて、その向ふは先程上つた、記念碑のある丘がある。田舍びた都會だ。何だか淋しい。

梨の木の枝をコツプ形、扇形等色々に作つてある。實がタワ〳〵にある、林檎が赤い。傍にこの丘へ上るケーブルがある。

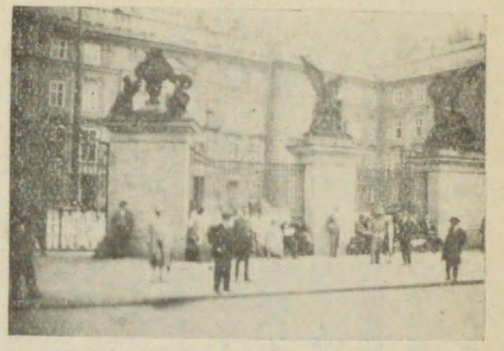
丘を下りて町の南のゲーテの住んだ家を見て、川を渡る。オペラハウス、廣場、寺院、オベリスク等の建物がある、立派な所だ。

こゝで自動車は終つた。先程の寫眞が出來上つた、一枚求める。

それから、ソフイーンチヤーチに入る、古い建物である。見るべきものは余りない。



ドレスデンのシロス



プラーグ大統領官邸

道路工夫が機械で、コンクリートを粉碎してゐる。それを見る。ノソ〳〵とやつてゐる。喧しくいはない、ドイツの味だ。

宿に歸つて遲い飯をたべる。

疲れたので午後は休養する。

夕方食事をして又驛の附近を歩く。

この町は繪畫の立派な美術館があるのだが見る氣がせぬ、巴里で見た伊太利でよいのを見る。それで澤山だと思ふ。

明日終日がけの觀光自動車が附近の郊外へ行くから行かないかとマネージャーがすゝめたが、それにも加はらない。

入浴して氣持よく休養する。

プラーグ

八月二十七日

朝食後支拂をする。ライプチツヒに忘れてあつたガイドブックを賴んであつたら今朝送つてくれ

た。但切手は五ペンニツヒしかはつてないので四〇ペンニツヒ拂つた。

十一時四十分プラートグに向け發車、エルベ河に添うて上る。川幅四十間位だ。對岸に家がならぶ荷物船、黑い川蒸汽が上下する。二十間位の長さの舟がうごく。

バド、シヤンダンは河に添うた少さい町だ。附近には岩がそゝり立つて、笠置か伊賀の鹿落谷の樣だ。日本式の風景だ。こゝで一二日休養したらよいと思ふ。但し山間の淋しい所である。

川蒸汽に人が澤山のつて上つてゆく。對岸を、ウワンダル、フヲルゲといつて休日に行軍する一隊七八人が元氣よく歩いてゆく。何處かの山へ上るのであらう。

橋を渡つてトンネルをこえると、次の驛でチエツコスロバキアの稅關があり、旅券を調べに來る。カチン〳〵と技手がハンマーで車軸をうつてあるく。午後一時半である。ドレスデンで食堂席券をくれたが、腹がへらないから行かない。

フラウエンとかいて婦人ばかりの三人の席がある一室が空いてゐたから、五十ペンニツヒやつて、こゝにおいてくれといつてあつたら、やがて來て、フランウエンの札をとつたから又五十ペンニツヒ與へる。

私はいつも小勢の處へ入る。一人物思ひをしたりするのに都合がよい。旅は物を考へる時である。テルビツツは山の間の川に臨んだ都會である。それから走つて、シエレケンスタインを通過す

る。田舍の人がガヤ〳〵驛でさわいで居る。

低い波狀の丘と畑は目の屆く限りに續く。廣いものだ。百姓が大勢草をかつてゐる。女は三角の布を頭からかつてゐる。一人の娘が鎌を忘れて汽車に見とれる。都會への憧憬か。よく耕作が出來てゐる。

大分南へ來たので、陰氣さが減じた感がある。四時半丘と河とに臨んだプラーグに着く。驛前の小公園を拔けて新築のホテル、エスプラネードに入る。一室五〇クローネで三圓五十錢位、堂々たる食堂、シツチングルーム等實に立派である。

町へ買物に出る。ベルリンに比して、いちじるしく人相が惡い。人格の下落が分る。貧乏くさい。油斷ならない氣がする。ボヘミアンガールの繪ハガキを買ふ。

大きなホテルに誰か知名の賓客があるのか大勢前に立つて見てゐる。その軒に日本と米國と此國の三本の旗を見たのは快心に堪へなかつた。スエーデンの宿には日本の旗が立てゝなかつた。えらくなつた氣持がする。煙草を買う、二十本入二圓近くである。

博物館前から折れて歸宿。兩替をする。一ポンドが百六十クローネである。食堂で夕食をして室へ歸り佛書をよむ。大勢友人のあつた伯林をなつかしむ。

一人宿に止つて九時頃床に入るのは淋しい。尤も今日の同じ列車の前部に一人日本人が乘つてゐ

ボヘミアの娘

るらしかつた。

八月二十八日

起床して食堂へ出て朝食をする。サイトシーングカーは八時半と二時半の二回にある。私はオーストリのビザを頼んだのにとれてないと思つたら矢張とれてゐたので午後の出發に變更する。タキシーを呼んで、ガイドブックで有名な所のみ數ケ所へゆくことにする。

先づ、此の町の古いタウンホールであつた廣場へゆく。そこの時計が名物なのである。月日の外に農事暦などが描いてある。今は点鐘の時でないから横の銅像を見る。こゝは、初めプロテスタントの起つた所で度々新舊教徒の間に戰爭の起つた所である。

この裏のウルトラ河は美しい。防禦の塔もあり、三十人の聖者の像もある。プロテスタントの一貴族の首が十年間此の橋の上で曝されたのである。河の兩岸は美しい。丘の上の建物が一寸エヂンバラを思はしめる。

それから公園に上つて、大統領の官邸の處へゆく。恰度衛兵の交代時で、スエトデンと同樣にバンドがあり二百人位の見物がある。それから十一時十五分に点鐘があるので急いで右の寺院へ歸る。大勢待つてゐる。カメラを明けて待つ人もある。

時間が來ると時計の上のドアが開いて、聖人が二人一寸うなづく。そして順々に聖人のうなづきつゝある姿が廻轉するのである。何でもないのであるが名所の一である。

運轉手も親切だが言葉は判らん。ドイツ語と英語をチャンポンにして此以上の見物を止め一旦ホテルに歸る。この賃銀四十五クローネ、一クローネは七錢である。

室へ歸つて日本への通信を數通認め、三時前下へ下りて支拂をしてボーイにバツグを持たせて驛へ來る。何かデモンストレーションの一隊が米國と此國の旗をかゝげ喧しくわめきつゝ汽車にのつて行つた。サツコー死刑事件ではないかと思はれるけれども充分意味が分らん。

食堂で食事をする。カツレツと注文すればビフテキを持つて來た。二人位は英語を話す。開札場へ何回も聞きに行て、漸く檢札してもらい、扨プラツトをきくと、こゝを上れといふから上る。列車が居る。運轉手に切符を見せてこれでよいかといふと返事が分らぬ。するとあちらにゐた若い品のよい人が來て、何かときく、ウイン行の列車はこれかと切符を示してきく、すると、このプラットホームは違ふあの向ひ側だといふ。又候下へ下りて向ふ側へゆく車掌にきく、こゝでよいといふ。いや早とんだ面倒くさゝである。旅行の不安はこゝにある。

四時發車、郊外がかつた處に遊園地があり大勢遊んでゐる。

チェツコは工業も盛であるが仲々農業も盛である。日曜であるけれ共百姓は野に出て働いてゐ

る。なだらかな丘陵が何處迄も續く。

アヒルを十數羽宛何の家にも飼つてゐる。山羊をも飼つてゐる。それを老人や子供が家へつれて歸る。牛の牧場もある。數は少い。垣らしいものはない。廣い。實に廣い感がする。そして百姓家は割合に少い。大きな丘の上を走るから見ゆる限りは田園である。麥をかつた後を山羊に食はしてゐる。

ターボアの町に汽車が止る。高い大きな寺が見える。雜草をよくかり込んである。何處を見ても無駄な草の生へてゐる處は少しもない。此れには驚く。

暮色がせまつて、同室のプロネシア人と話す。祖國が大戰の時、各國に改め入られたことを話す。ルーマニア人がよく話す。日本のことを話してやる。地上低く靄がかゝる。

チェツコといへば貧乏國かと思つたが中央ヨーロツパの富んだ國である。油と鹽がない丈その他澤山の工業がある。何しろ、ドイツ人、オーストリー人、ハンガリー人、ロシア人、チェツコ人、スロバキヤ人が居るのであるから政治もやり難く、共產黨議員も四〇人を數へるが大統領が人格識見共に卓越した人であるので、共產黨派は手も出ないらしい。チェツコ人は七百萬人でその中ドイツ人が三百萬人あるといふ。

八時ある驛につく。そこのプラットで食物を賣つてゐる。二十分餘り停車、夫々ビールを飲んだ

り、ソーセージを食べたり夕食をとつてゐる。日はとつぷり暮れて、ダニウブ河も暗く十時半といふに、ウイーンに着く。

鞄をさげて驛前へ出たがホテルらしいものは見つからぬ。そこで行人に尋ねると、どんなホテルかといふから中位といふと、それなればそこにあると教へてくれた。早速そこへ行き、食堂でビールを一杯飲んで室に入る。疲れたが眠られないで困つた。

ウイーン

八月二十九日

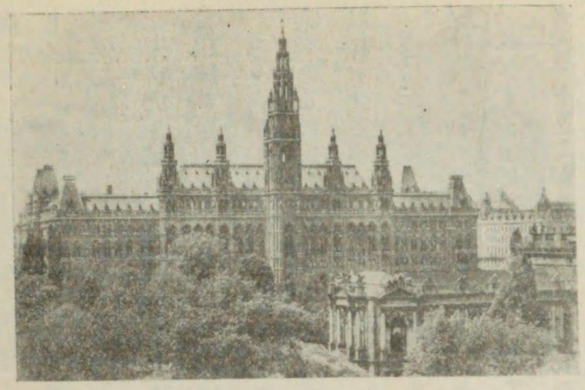
食堂で食事をして觀光自動車の時間をきくと、十時にオペラハウス前から出るといふので兩替をしてDの電車でゆく。道々立派な建築の前を通つた。

恰度間に合つて乘込む。陸軍省、測候所前を經て、ドノウから引いた、カナル(運河)を渡る。カールシアターは新世界の如く空中に直徑二十間もある娯樂用の風車がある。乘つて廻はるのであらう。戰勝記念柱と像も美しい。

大學、古寺院(ジョセフが身を以て免れたのを記念した有名なもの)の傍を通り、ドノー河の橋に

至る。濁水が流れて、ブダペスト行の汽船が居る。戰後に建てた、市營アパートメントを見てアウガウテン橋でカナルを元へ戻る。

それから、フランス、ジョセフ一世の王宮、研究所、銀行、大學を經て、ベトーベンが作曲をした家を見る。五階建の粗末な家である。シューバートはその近くで作曲したのであるといふ。



ウイーン市廳

立派なタウンホール、劇場、クラシカルな議會の建物の前を過ぎ、マリアテレザの像を見る。兩側は美術館で實に壯麗なものである。この邊が一番立派だ。その横に元の王宮がある。半圓形で堂々たるものである。フランスジョセフの住んだ古い宮殿もこゝにある。

センペトロ寺と天女群像の大理石の碑は街の中に目をひく、古寺院をめぐつて有名なカーントナー街を通る。

それから、郊外に近い、シヤムブロン宮殿へゆく。一千七百年代にたて初めたのである。

門に二本のオベリスクが立ち、前庭は隨分廣く、殊に後庭の

美しさ、何町もひろくて四方に大きな木の桓が切り立てた様に扇形にひろがり前面の丘の上にはアーケードが白くそびえ、宏大壯麗な宮殿である。この様なのは餘り見なかつた。ポツダムの新宮殿と少し趣がちがつてゐるが見事である。

王宮内を見る。侍從室を經、撞球室に入る。この部屋には一八五七年に、この建築の落成を祝して祝宴を張つた繪がある。この國の黄金時代である。

フランスジョセフ一世の室がある。パネルが美しい。彼の居室、彼の机、彼のベッドルームの質素であること、實に彼はこのベッドを持つて戰陣に臨んだのである。その洗面器は下等の下宿のそれにも比し得べきものである。

次に王妃エリザベスの室がある。妃はスイスで殺せされ給ふた。その以前に休まれた兩陛下の寢室は美しい。次に貴族引見室、食堂とその下に王の個人の庭がある。常に散策せられたのである。

ボヘミアングラスのサンデリアが美しい次に、マリアテレサの室がある。テレサ自身で編んだ、タペストリーがある。外國代表を引見するかゞみの間は壯麗である。この部屋の小さい机の上で外國との條約にサインせられた。ドイツのカイザーも此處へ來た。

ローサルームはスイスの風景をゑがいてある、王家がスイス出であるからである。秘密室がある。床の中央部が圓く下の食堂へ上下する仕掛である。

四方に陶器をかざり、うるしぬりの支那の繪がある。マリアテレザ室は結婚式の行列、市中の賑教會内の式、祝宴等の繪を六枚にかいてある。磁器室は凡て壁まで陶器である。

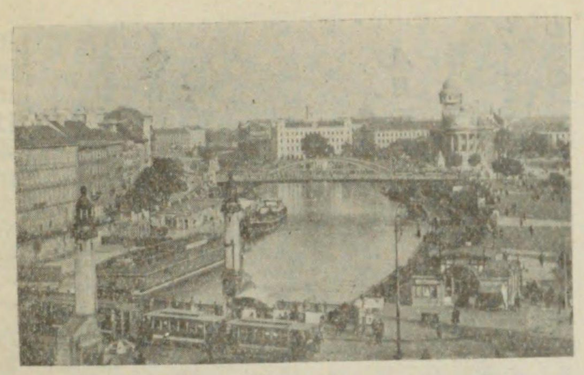
ナポレオン室はナポレオンがこゝに住んだのである。先帝の机もある。ゴブランが立派だ。百萬圓室は三年かゝつた室で、パネルは總て金の象がんで世界各國の繪を入れてある。

ゴブラン室はブリストル魚市場の繪や、十二脚の椅子の背にはその月の繪を入れてある。一八三〇年にフランスジョセフの生れた室がある。

それから、アドルフの部屋を見た。壁の上に描いてある風物は二百年前ともおもへず昨日仕上つた様な新彩である。

此れから、自動車は、オペラハウスの處に歸つた。シーズンであれば立派なオーケストラが聞けるのに惜しいことである。徒歩で、ゲーテの銅像を寫したり、博物館前のマリアテレザの大銅像を見て宿に歸り午食して少し眠る。

午後三時支拂をして、タキシーで東の驛に至る。四時半發車。



ンーリ井

田園には黍が大分植へてある。同室はドイツ人で、ウインに三十五年居る紡績會社の人と伊太利人と、もう一人何處かの人と四ケ國人であるが英語で雑談する。

食堂で金が不足して兩替したが率が悪い。ハンガリーの金は英貨一ポンドが此國の二十五シリングが普通らしい。

九時ブダペスト着、驛前のパークホテルに入る。湯で汗を拭いて疲れて直ぐ眠に入る。

ブダペスト

八月三十日

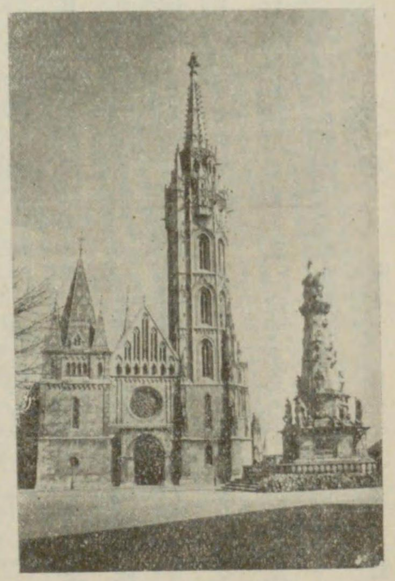
曇つた空である。食堂で簡單に食事をして觀光自動車の出る所への電車の番號をきく。所がしばらくすると淋しい所を無暗に走つて行くので、變だわいと思つて車掌にきくと反對の方向へ走つてゐるのであつた。下りて乘替る。やがて、ドナウ河畔に行つたが一分違いで發車した後である。

それが幸だと思つた。觀光自動車で廣く割合に印象少く廻るよりは、極めて善い所を充分に見る方が記憶によく殘る。そこで河畔に出る。壯觀である。

大きな鐵橋がある。濁水が末遠く流れる。水流も可成早い。兩岸に汽船が纜つてゐる。對岸の左

のゴツ〳〵した山の上には城砦がそびえてゐる。その右には王宮が巍然として美しく、その左には諸官衙と寺と尖塔が白くまだ先は山續きである。

そして兩岸には歩道がある。ホテルがある。歐洲第一といふ建築の立派な議會が川に臨んでゐる。實に壯大な景である。ウキンが善いといふが、此の川と山とに對しては私は、此處をとる。ドナウを挾んで何ともいへぬ詩的の味がある。その味は日本の河の味でなく、東歐の味、白い濁つた水、城砦のある丘の下を流れる川の味、ウキンを流れ、ブダペストを流れバルカンを黑海に迄流れて行く河の味である。

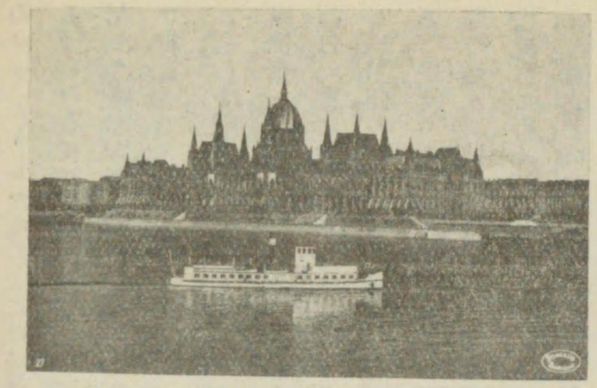


マチアス寺院

亡國的といつてはいけないが何だか淋しい。白々として然も魔力を持つ川ではある。大きな獅子の像のある、キツトン橋を渡つて對岸の山に上ると、サン、ステハフン寺がある。古から有名な寺でこの寺の廻廊の高い所から町を見下す。ドレスデンの山から見下す景は少し遠かつた。こゝは眞下にドノウがある。

川上のマガレット島は小公園で議會に對してゐる。私の渡つたキツトン橋の下に大きな塔橋があつて、それは、エリザベス橋とジョセフ橋である。對岸に町が見える。

此の山の方をブダといひ、大きな町の方をペストといふので、それを橋でつないでゐる譯である。この寺も美しい。よい建築である。



元　王　宮

この横に幼稚園がある。子供が輪を持つて遊んでゐる。私が寫眞をとると笑ひ乍らじつとしてゐる。保姆が木の下で編物をしてゐる。それから丘の上の諸官省郵便局の前を通つて元の王宮へ行く。恰度米國學生團と一緒に內部を見る。

舞踏室、宴會室の壯麗には驚いた。同行の米國の學生は茶目で王座に腰かけたり走り廻つたり、とても此の老大國の傳統や歴史の味を嗅がうともせぬ。やはり平民國の自由民である。

此の國でも、ジョセフや、マリアテレザの遺物を澤山見る。無全盛の時代には立派なことであつたであらう。王が威風堂々バルコンから此の市に君臨せられた昔を偲ぶ。

こゝを出てリフトで丘を下り、橋を元へ戻つて、クツク社へ

行き兩替をして、今度はウキンへ寄らないで、ブダペストから、ユーゴスラブのヒウメ及トリエスト經由ベニス行に切符をかへてくれないかと賴んだが、それは私のクーポンは八月發行であるから其月限りでないと出來ないといふ。

川の横のホテルの庭で樂隊を奏してゐる。ビールを飲み乍ら聞いてゐる。

クツク社の廊下で刺繍の大きなテーブル掛の見事なものが一枚四圓であるといふ。米國人が五枚かつて、私にも買へといふので稅關が面倒だからといふと心配はないといつてくれたが止めた。

再びドノウを見て宿に歸る。初めて水瓜を食堂で見て、繪にかいて注文して食ふ仲々甘い。日本のと同じである。支拂をすまし手紙をかき驛へ行く。再びウキンへ歸つて伊太利入をしなければならん。

雨が降り出した。淋しい郊外だ。家が少くて畑の黍の工合が朝鮮の淋しい田舍を思はす。日本人に會ふ。海軍々醫大島といふ人、食堂で話す。夕方食事は同室のウキーンの人と三人快談し乍ら食べた。

九時にウキン着、伊太利行の發車する驛の名をかいてもらつてあつたのでタキシーを呼んで、その驛前へやつてくれと賴んでのると一分間もかゝらぬ、それもその筈その驛前のパークホテルであつた。何の事だ。それに三シリング四〇とられた。いま〳〵しい仕方がない。

朝六時にノックを頼んで、汗を拭ひ日誌をかく。

伊太利へ

八月三十日

六時にノックしてくれた。急いで毛剃をして服を着替へ下りて行つて支拂をする。食堂で食事をせよといふから簡單に濟して停車場へ行く。

二等車に入ると豈計らんや、永峯中佐が乘つてゐる。然も差向ひである。同船で來歐し、ロンドンで遇ひ伯林で度々遇ひ、今又ナポリ行の長途の行を共にすることが出來た奇遇を喜ぶ。

同室は婆さん二人、一人は七十四歳で一人息子の大佐を亡くした人、共に英語を話すので非常に懇意にした。二時間程平野を走ると山地にかゝつて、所謂サマリング避暑地である。山形日本のそれに似て杉の木が黒く奇峯相ついであらはれ水流急で、青い刈り込んだ牧場のあたりに別莊が點在する。

汽車は段々上る。トンネルが多く、幾廻轉する。渡歐以來山らしい山を見なかつたので非常に嬉しく。このウイーンとベニス間はスイスのそれに似て風景甚だ佳いのであるといふ。南畵に似た景

である。木材小屋がある。水車小屋がある。炊煙靜に立昇つて夏日幽なるの趣である。

ホーホスタビツツの舊城砦が岩の上に突き立つ。そばの花が咲いてゐるのも珍らしい。三四十尺以上も高いであらう。板葺の家、古い家、古城、湖水と白帆翠巒、黍畑が車窓に入る。實によい景色だ。午過からは妙義か立山の様な突兀たる竣峯があらはれる。

所々雪の殘つてゐる所もある。思ひ切つて削立してゐる。大規摸である。日本の景色もよいと思ふがすぐ通り過ぎてしまふ。こゝのは一日中この雄大な間を走るのであるから仕掛が大きい。日本の登山家がロッククライミングを熱望してゐるが右も左も數千尺の嶮しい奴が次から次へと續いてゐるから彼等の一つを征服するにも中々のことであらう。

然もその峯は重疊してゐる。一列では趣がない。相當に凄そうなのが前へ出てその奥に切りたてた様な斷崖が一寸襟元を見せてゐるのであるから見る方で、ぞつとする。つまり槍ケ岳と燕岳と大天井の間を汽車が一日走つたと思へば間違はない。

水流は清冽だ。そこへ人間味を加へて古い山家が點在する。牛を四五疋放牧する。村童がボンヤリ立つ。親爺が大きな鎌で草をないでゐて、黑い杉が斷崖の根まで程よき景をつくつてゐるのである。然も數戸の村には寺院が必ずあつて、貧しい村ながら尖塔を高く神に捧げてつき立てゝある所がなつかしい。

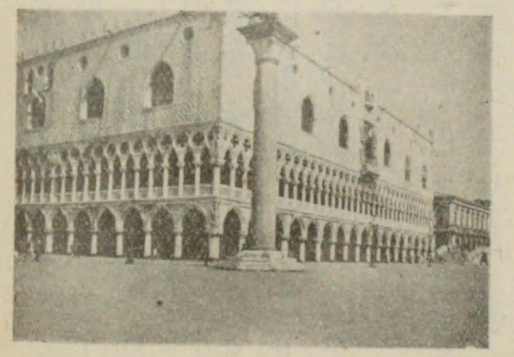
どこの山の隅にも神様を拜みたい人間が住んでゐるのである。

午食と夜食を車中で認める。黑シヤツの壯漢が車中を警戒する。乘降の客の言葉が伊太利語の輕快なリズムになつて響く、驛で兩替をする。夜十一時ベニスに着く。

婆さんと握手して分れる。驛前にホテルの客引が喧しい。驛の前はすぐ川で、暗い水面にゴンドラが浮んでゐる。直ぐゴンドラに乘る。細長い船である。二人漕ぎで、大通ともいふべき水路を進む。左右に四階建の低い家がならぶ。ボンヤリと夜の灯が水を照らす。どこかでセレネードを彈じてゐる。男女の乘つたゴンドラが音もなく進む。電車の停留場にあたる船の昇降場の灯が赤く、そこで爺が何か洗つてゐる。

暗の中にどこかの寺の廻廊がほの白い。數ある石橋の上を活動見物の歸りの人が音もなく出沒する。しはがれ聲の船頭が「これがドーヂスパレスだ」と教へる。若い船頭は酒手を賴みますといふ。

廣場に出た。パツト明るい灯が水際に並ぶ。ダニエリホテルの前で大勢の人がゐる。ダブルベツドを賴んで永峯氏と室に入る。



ドーヂヤスパレス

欄によると前の海の上に煙火が天に沖する。白赤青と五彩の華がベニスの夏の夜を彩どる。見物の船が多い。橋からじつとパイプを加へて見てゐるものもある。

「ゴンドラ〳〵」と客引の船頭の聲がする。入浴して快談しつゝねる。室の中に宿泊料二五〇リラと書いてあるので兩人、伊太利の高價なのに驚き稍不安になる。

ベニス

九月一日

ベニスはラグーニ湖上百十七の島の上にあつて運河が百五十と石の橋が三百七十八ある。人口は十七万五千人である。それで海運業、書籍、ガラス細工、寶玉、レース等の商業を重に營んでゐる。中央に大運河があり、周圍七哩ある。小さい運河をリオ、街路のことをリスタ四つ辻のことをキヤムピエロなどといふ。

此の島は紀元六百九十七年からこゝへ本島から逃れ來て住む者が多くなり、八百十九年には首府となつた。十字軍時代にこゝは發展して伊太利のアドリアチツク沿岸の最も隆盛なる所となつた。爾後三百年間はヨーロッパに於ける最も交易の盛なる所であつた。

一千五百年代から衰へ初め、一千七百九十七年に佛軍がこゝを占領し、後にオーストリーに併合され後又伊太利領となつたのである。

起床朝食を食堂でする。からりと晴れて北の方の陰暗な空と違う。室内でもむつと暑い。明るい暑い光が日本の盛夏を思はす。微風はある。モーター船やゴンドラが走る。電車のかはりの小蒸汽が四方に走る。

四方八方に橋があり、運河がある。道路にあたる處が青くそして割合に美しく澄んだ水があると思へば間違ない。もすこし汚い所と思つたが、家の基礎の處まで、ひた〳〵と水が流れてゐるから氣持よい。河の兩側に沼があり泥土があり猫の屍體や果物などか浮いてゐると想像してゐたのは誤りで、道路卽ち運河の清潔法宜しきを得て不快の感は少しもない。

それに煉瓦造りといふより大部分白味を帶びた石の橋や建築であるから、目立つて美しい。宿を出て、橋を渡りサンマルコの廣場に出る。こゝは仲々廣く、ベニスの中心である。

夕方こゝで奏樂するのを四方のバーで聞くのである。東側にベニス的ビザンチン建築のサンマルコ寺がある。ドームが五、大理石柱五百、モザイツクが四百六千平方尺のギリシヤ形十字の形に建てられてある。

入口の上に一千二百四年コンスタンチノーブルからダンドロが持つて來た四疋の銅の馬がある。

これは一千七百九十七年に巴里へ持つて行かれ、一八一五年に又元へ戻されたのである。

外側にも內側にも金色に黑味がゝつた、モザイツクで宗教畫を描いてある。內部の柱も大きく、聖徒の像も黑みがゝつて美しく床しい。

案內人が大勢居る。五リラで說明してもらう。朝の勤行が初る。裏のガラス工場へ連れて行てくれる。この邊は商業の中心で重に土產物を賣つてゐる。その入口に時計塔がある。隨分古いのだそうだ。大きな鐘がある。

寺の橫にドーヂアース、パレスがある。入口の彫刻が美しく、二階の廻廊も廣い。內部には立派な繪が多い。ドーヂアースは此處の領主であつたのである。廣間の天國の圖は澁味を帶び結構も大で立派な藝術品である。古の武器を飾つてある部屋がある。下の大理石で疊んだ內庭の中には有名な銅の彫刻の水盤がある。古色を帶び立派である。

サンマルコの塔と白い彫刻の像に朝の日が輝き鳩が飛ぶ。見物が引きも切らず。南國の情緖がある。空は無類飛切の紺靑である。この廣場の海に面した所に二つの大きな圓柱が立ち、像がある。

そこに立つて見ると、大運河をへだて右にセルテ寺のがつしりした圓塔が靑い水の上に一廓を構へ左の島の上にはサンジョルジョの四角塔と寺の白い石階と入口が繪の樣である。

日は仲々暑い、ゴンドラが澤山客をよぶ。よぼ〳〵の爺が石階に腰かけてゐる。大戰中此の邊は

獨墺軍の爆彈に見舞はれ數千發も落されて處々に被害があつた。裏町みた樣なせまい所が此では歩き得る商業區である。道幅は二間もない、然し四通八達の運河を利用するから此れでもよいのであらう。

魚の新しいのを店に並べてゐる。久し振りの光景である。食事をする。それから宿に歸り一服する。午後三時私は又出て、も一度サンマルコの寺へ詣でて土産物を賣る店を見て廻つた。こゝでは少くも三四日滯在して、見るとよいが、サンマルコを見れば心急ぐ旅には充分である。

四時支拂をする。二百五十リラではなかつた二割位引いてあつた。それでも一泊十圓以上についたから今迄の三圓前後のホテル代とは大分違う。財布の口をしめる必要がある。宿の前から、小蒸汽に乘る。右に左に停留所へよる。白い寺が水に浮く。

鐵橋がある。勾配のついた石の橋がある。塔がある。果物をつんだゴンドラが通る。驛の前につく。手荷物をポーターが一個一リラくれといふ。驛の食堂で食事をする定食が十二リラは普通である。

八時半ローマ及フローレンス行に永峯氏と乘込む。次の驛で辨當を賣りに來る。試に買つて見ると厚紙の袋の中にパン二ツ銀紙包のチース、煮卵子一つ、林檎一ツ、小菓子二つ、ニツケルのフオーク、油紙にポテトとチキンの片足とブドト酒一瓶入りで九リラ半で(一圓十五錢位)だから安いで

あらう。

それからぐつすり寢入る。所がボロニアの大きな驛へつくと皆下りる。そして私にも乘替へよといふ。その箱はフローレンスには行かないのである。目をこすり乍ら他の箱へゆく。席がない。廊下にハンドバツグと折鞄をおいて立つてゐる。

隣室で女が席のことで喧嘩をしてゐる。あちらでは夫婦が車掌に喰つてかゝつてゐる。英獨以外は柄が惡い。伊太利人は怒り易い。廊下を歩きまはる。立つたり座つたりする。國民性があらはれる。所がふと思ひだすと巴里で百四十圓出した寫眞機を元の列車に忘れて來た。びつくりして外に出たが、列車は數回線路を構内で入替へたからどこにあるか分り樣がなく、外にも列車が澤山並んでゐる。ねとぼけては居り見當はつかず、とても探し得ない。ねぼけ乍らも一時に惜しさが胸に湧き出して來た。

そこでプラツトの巡査に、ベニスから來た列車内にコダツクを忘れたから賴む。こゝで乘替た時忘れたといふと、よし〳〵と何處かへ行つたが、どうも心元ない。そこで廊下の鞄を兩手にさげ、何、フローレンス行は後れてもよい、今夜此の驛で明してもよい、下車して愛好のコダツクを取りかへさではとひよろ〳〵と下に下りる。群集が左往右往する。そこに一士官みた樣な金筋入りの立派な男が居る。

君は英語を話すかといふと少しは分るといふ。それで私の事を訴へると、さあ、どうかねえといふ口ぶりで歩いて行き居合せた、黒シヤツ黨の一員に傳へてくれた。流石はムツソリニーのファスチー黨員丈あつて、よろしい來給へといふ。心強くなつてついてゆくと驛の一室の戸をたゝく。中へ入ると驛員の机の上にパンやハンカチなどと一緒に私のコダツクがある。それを見たときの嬉しさ。サンキウ〳〵、ダンケセン〳〵と英獨兩方で黒シヤツの手を握らうとすると、チツプでもくれたかと思つて引き込める手を強く四五回打ふつた。書いて見ると簡單であるが此の十分間内外の私のうろたへたことは歐洲へ來て初めてであつた。

そして驛員の出す紙にサインと國名をかいて厚く禮をのべ、元の列車の廊下にかへつた。恰度こゝで蒸汽機關車を電氣機關車に替へる爲隙どつたのでよかつた。廊下に立つてにや〳〵笑ひ乍らほつとして汗をふき、幸運であつたことを感じつゝ頭に手をやると帽子がない。これは困つたはゝあ、驛の拾物室で机の上に脱いで忘れて來たな、然し、カバンを置いて又取りとゆくとこの列車は發車するかも知れん。

ムツソリーニー

しばらくためらつたが帽子は同僚職員からの贈物である。おめ〳〵置くのも惜しいと思ひ走つて行たが、どの部屋も締てあり、何の部屋であつたかの見當さへつかん。一旦引かへしたが、惜しくもあり忽ち困ることである。そこで少々恥しかつたが又一人の黒シヤツを捉へて、「マイハツト、ゼアー、アイ フオアゴツト」といふと、よし〳〵と行つてくれる。戸が明かぬ。どの部屋かといふ。食堂かといふ、どの部屋と見當がつかんと答へる。

苦笑し乍らあきらめて、廊下から首を出して見てゐると思ひがけなく、その帽子を持つて來てくれた。寫眞機を忘れてとりにゆき嬉しさの餘り今度は帽子を忘れて來た。粗忽な日本人だと笑つたことであらう。然し原因は寢入込んでゐて、乘替はないと信じ切つてゐたのに早く乘替よといはれたので泡を喰つたのによるのである。漸く正氣になつた、但惜しさ丈は早くから正氣以上になつてはゐたのである。

此處で一言したいが、此の黒シヤツは警官以外驛に澤山居つて、旅客に奉仕し車中をも警戒してゐる。伊太利にはスリが多く少しも油斷がならん。旅行者として警戒を要する土地であるのであるが。黒シヤツ黨の壯士が至る所で人々に厚意の援助を惜しまぬのは感謝すべきことでもあり、社會政策上よいことである。

私は是非感謝狀をかゝねばならぬ。大に有難く思つてゐる。忘れた寫眞機が直ぐ拾得品室へ行つ

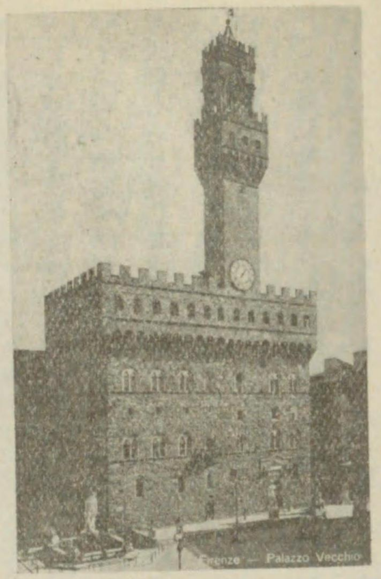
て居るなどは感心なことである。大休ならば夜中混雜の際だからとられてしまふのが當然すぎる程當然と思つてゐた。然し私はサックの中に私の住所と若忘れてあつたら日本大使館へ送つてくれ禮を出すとかいたカードを入れておいたのである。

それから四時にフローレンスにつく。暗いので仕方なく、驛の食堂で茶をのみこの日記をつけると明るくなる。外は暗い。兵士が數人來て茶をのむ。ウエイターが眠そうに給仕する。

フローレンス

九月二日

外が白むで來た。手鞄を提げて寢不足の眼をこすり乍ら外へ出ると後から聲をかける者がある。パンションの客引である。三食付三十五リラで勉强するから來て呉れといふ。ベニスの第一流旅館に比べると五分の一にも足らぬ。早速行て見ると古い汚い下宿である。見劣りのすること夥しい。然し此處の一流旅館でも隨分拙いのであるから致方あるまい。それでも北歐の國の旅館に比べると値は高い。室へ入ると服をぬぐ。明日迄にシヤツやカラー類をチエムバーメードに洗濯を賴む。疲れて一時間餘りぐつすり眠る。



パラゾ ベキオ

町の中心に近いので喧しい。九時半頃食堂で朝食を濟し、外へ出て寫眞屋へ現象を四本賴む。町の幅は狹く建物は高い。この町はキリスト以前ローマ人が建設したに初まり、一時は商業上重要な所であつたが、現在では生活の安きこと自然の美、藝術の寶庫として訪客の絶へ間がない。

一方にはアペニン山脈の支脈の丘陵が連り中央にはアルノ河が流れてゐる。人口は二十五万人である。ピアザ、デラ、シグノリアは市の中心の商業區の廣場でコスモの銅像があり、四百年前のネプチウンの泉水がある。

こゝに、パラゾ、ベキオがある。これは一二九八年に建つたもので、コスモ一世の宮殿であつたが今はタウンホールである。高く大きく岩丈な砦式の建築である。外にヘリクレスの大理石像の大きなのがある。そこから入ると、アラバスク造りの小さな子供像の泉水がある。二階は明日見たい。こゝの廣場には汚い服を着た相場師らしいのが數百人がやゝと言ふてゐる。電車が通る。自動車が來る。草をつんだ馬車が通る。陽がカンゝと照る。

横のウフイジの繪畫館の入口にも大理石像が澤山立つてゐるが、樂書がある。午睡してゐるものがある非常に感じが惡い。この後の古い長家の樣な橋を渡る。河の水は一部涸れてゐる。だら〳〵と上るとピチパレスに來る。

この一部は王家の別莊で、一部は美術館である。大きな自然石の樣なのを積み上げた建築で、タスカン式である。十一時の開館を待つて入る。二階にはラフアエルのマドンナを初め、チヽアン、レニ、ルーベン其他の大家のものがある。

摸寫してゐる人が數人居る。階下には古代の寶玉類、盃類、箱、象牙、漆塗等の珍寶を飾つてある。切符賣場で米國の婦人が釣錢が足らんと口論してゐた。

こゝを出て、この後の庭が有名なのであるが、暑いから見ないで元の橋を渡りサンタマリアデルフイオレの寺院へ行く。これは一千二百年代から四百年代までかゝつて建てたもので、白大理石と黑大理石とを混じて建てゝある。五百五十六呎と三百四十二呎ある。入口のドアの銅の彫刻がよい。中は裝飾とてはないが、八本の四角柱の一本は周圍四十足あるく丈あつた。內部にはミケランゼロ作入棺の彫刻其他立派なものが多い。

その外見物して一旦宿に歸り午食して眠る。とても暑くて外へは出られぬ。然し午後三時過ぎ又服をつけて、ほこりの町を歩く。も一度ベキオやマリア寺へ行き、寺々と博物館の位置などを調べ

る。夕方七時食事をして、暑いうす暗いベッドの上に横はる。

花の都といはれる、フローレンスの感じは惡い。こう暑く、せまい町に人がうよ〳〵しては仕方がない。今日午後、ダンテの家を見た。

恰度歩いてゐると繪はがき賣りの乞食の婆が、こゝがダンテの家だから見よといふ。時間は遲かつたが、老人が巧な英語で案內する。彼の遺物などをおいてある。少々改造を加へたらしい。天井などは昔のまゝの木である。窓ごしに彼の妻の家も見える。

此處で今、夜學校の印刷の教授などをしてゐる。成程、彼がビアトレスに戀した、橋の袂も近い。階段から下りて來る美女と彼との繪はよく人の知る所である。そんなことを思ふと興が深い。

それから一臺の馬車に柩をつんで數人が旗をたて肅々と徒步で後からついてゆくのを見た。その時通りかゝつた鐵工所かなんかの小僧は汚れた服を着て教育は無論ありそうには見えなかつたが、柩車を見ると直ぐ脫帽して右の手を差し上げて一禮した。其他の老人も同樣に脫帽した。誠に死者に對する禮として感心した。七時に夕食して暗い暑い部屋で寢る。今夜はつらかつた。

九月三日

朝食後、ウフイジの繪畫館を見にゆく。時間が早いので、タウンホールの泉水の小供の彫刻を見

直したりする。やがて定刻九時に開門したので中に入て見る。

こゝには、ローマ派、ベニス派、フローレンス派、ナポリ派、ボロニア派などの彫刻其他を陳列してある。中にも宗教畫では隨分よいものが澤山ある。昨日ピチ、パレスでは餘り感心しなかつたが、中世紀前後の宗教畫、殊にキリストの誕生十字架、マリア、再生等を取扱つたものは宗教全盛期と中世紀の敬虔な氣分に打たれた。非常に感興が深い。

ラフアエルのものもある。マドンナを初め、小兒の繪其他の傑作がある。ルーベンの室もあつて戰爭畫、狩獵圖などに大作がある。彫刻も相當にある。其他レニ、バンダイク、フイリポ、チントレツト等のものを初め、餘り名を聞いたことがない作家のにも隨分立派なものもあつた

こゝにも婦人數名が名畫の摸寫をしてゐる。出掛けに東京市會議員茂木氏外一人に遇ふ。そこを出て、ギオバニ寺へ行く。ミケランゼロ、ガリレオ其他の墓がある。こゝの寺の戸の彫刻は有名で內部も亦立派なものが多い。とても案內書片手に見つくせない。由緒は分らずとも鑑賞する丈でも澤山である。

宿へ歸つて午食少憩して、午後はミケランゼロの家へ行く。三時開門なのでしばらくまつ。物賣が聲高に商うてゆく。

室に入ると、彼の彫刻したもの、デザイン、スケツチが澤山ある。此の家は彼が好きで求め子孫

が博物館にして市に寄附したのである。それから、セントマリア、フイオレの博物館へゆく。餘り見るべきものはない。

次にマリア、ノベラ寺を見る。大理石の建築で內部は簡單であるが仲々よいものがある。

夕食には早いので活動寫眞を見る。とても暑くて外へはゆかれない。七時寫眞の現象と燒付を受取り宿に歸る。下宿には伊太利語の分らぬ西洋人もいて手眞似で話してゐる。マカロニーを食べた。ブドー酒は瓶の外部をかや卷にしたのが多い。

チエムバーメードが廊下で輕い歌をうたつてゐるのが珍らしい。

ロ　ー　マ　へ

九月四日

支拂をする。拙い宿だが三食付三十五リラは安い。男衆に送られ驛へ行て乘込む。ローマの下宿を紹介してくれる。汽車は少雨の中を出た。こゝの郊外にも新しい借家が建ち初めてゐる。直ぐ晴れる。丘と川とが多い。

刈りとつた畑は赤茶けて見るからに暑い。土も白赤味を帶びチエツコやドイツの樣な造林は少し

もなく。家は古びて居り、せゝこましい。畑には橄欖や葡萄を造つてある。
トンネルが多い。煤煙がとびこむ。車中にはデンマルクのコベンハーゲンの七十五歳の兄と七十四歳の弟が一緒に旅行してゐる。色々話す。市の重要なる位置にゐる人らしい。此の高齢の兄弟が元氣よく旅行するのを見て羨しいと思つた。
日本の腹切りと祖先崇拜が充分分らぬといふので説明してやつた。日本に關する書物も讀んでゐる。此間車中であつて話した人も佛人ロチの作で日本を知つてゐる。此の老人とも名刺を交換する。日本の風景繪ハガキをやると喜ぶ署名してやる。
コベンハーゲンでリングビトの高等國民學校へ行たといふと、その弟の人の子がそこを卒業したのだと喜ぶ。汽車はタラシメの湖に添うて走る。日本程の綠がないから景色が落付かぬ。二人はオルビエットの古い街を見るとて大きなバスケットを携へて下りた。バスケットを運び出してあげると二老人私の指が切れる程握手して分れた。
オルビエットの町は高い崖の上にある。古いくずれかゝつた町だ。伊太利は妙に、町が丘の上にある。不便であらうと思ふが外敵に對する防禦の意味か。
所々水牛を放牧してゐる。煉瓦工場がある。草が日に燒けてゐる。暑い國だ。伊太利は秋がよからう。夏の伊太利はとてもたまらぬ。でも日本の六月位のことであらう。久しく北國の涼しさに慣

れてゐたから餘計に耐へ兼ねるのであらう。
午後三時半羅馬につく。馬車で、パレルモ街のジユリアノへ行く。若い妻君か娘かゞ巧に英語で御世辭をいふ。仲々大きいパンションである。三十五リラで三食付もあつたが、水道のついてゐる室がよいからとて四〇リラの部屋へ入る。汗を拭ひとつて、シャツ類を洗濯する。
ホツトする割合暑くない。よい部屋だ。一休して日曜ではあるが大使館へ行く。入口に居た小使が日本人と見て喜んで案内してくれる。伯林の友人から二通の手紙と、ハンブルグドイツ物産から五〇ポンドの現金を送つて來てあつた。
ドレスデンを出るとき貳百圓あつた金がまだ百圓ある。一日貳拾圓と見ておけば私らには充分である。ボツ〳〵歩く。行人の髪の毛が黑いのが多く、皮膚の色も日本人に似たのが多い。
スリ御用心と大使館にかいてあつたのを思ひ出す。トリアノ街の日本館へ夕飯を食べに行たが、七時でないと戸が開かぬといふ。一時間程ブラ〳〵待つたが正七時になつてベルを鳴らしても開かぬので宿に歸る。八時食堂へ出ると十二三人宿泊者が出て來た。ビールを一瓶のんだが味が拙く、今夜は下痢するか知れんと思つたが幸ひ何事もなかつた。
今日車中で八リラ(九拾六錢)で紙袋入の辨當を買つた。大きなパン二個、プドト酒一瓶、チース菓子、プドト、無花果、紙の盆入のマカロニーと鷄肉の二皿とても食べ切れなかつた。汽車辨で辛

棒するのも食堂へ行た不在中に手荷物が心配なからの事である。伊太利は物騒ときいて居るから。

宿の主婦に明日觀光自動車を頼む。アメリカンエキスプレスの方は七十五リラで、此の宿の特約の方は四十リラである。流石に羅馬はゆつたりしてゐる。

街幅も廣く建物もよく涼しい。ベニスとフローレンスの暑苦しかつたことは何れ丈その土地に對する愛好の念を殺いだことやら。この宿は仲々よい。ホテルより家庭的で居心地が善い。

九月五日

九時半に觀光自動車がまはつて來る。行く〳〵乘客を集めローマをかこんだ塀を外へぬけ、槲の街路樹の茂れる下をゲーテの像や、ヒューゴーの像を見つゝ走り、大理石の立派なる裁判所前を通り天使城の古き塀を見つゝラフアエルの臨終の家を見る。

次に、セント、ペトロの大寺院にゆく。詳しくは後日として大廻廊の柱の間をもぐり、寺の後に出る。番兵の服裝はミケランゼロの意匠とかで頗る奇拔である。

バチカンの宮殿につく。此れは世界第一の大いさといつてもよいといふ。例へば廊下が直つすぐに一千二百尺あるのである。室が一萬一千ある。紀元四九八年に建築にかゝつた。附屬の圖書館から見る。冊數二十萬部、記錄三萬四千部ある。

廊下には、法王に呈した鍵、フランシスザビエトル住家の模型、ブーニーが十二歳の時の彫刻、古き聖書、ダンテ神曲の原本、マルチンルーテルが法王に反對の書ラフアエルの書、ミケランゼロのスケツチ、ナポレオン二世が洗禮をうけし水盤ウラル山よりとりし珍石の大水盤、伊達陸奥守が慶長八年九月四日に認めし信認狀がある。其時案內人が「ホエヤイズジヤパニースボトイ」と呼ぶ。皆が「君の背後にゐる」といふ。此れを見よといふ。大勢は「君は此の手紙の字がよめるか」と尋ねる。

別に絹のしゆ色に梅と雲の模樣の袋がある。紅の紐も色あせてゐる。上の壁畫には日本使節ローマ入りの繪がある。オトストリーの、ジョセフ王寄附の一四〇ポンドの金のキリスト像がある。

一尺四五寸の厚さの古い聖書と一寸四方位の小さい聖書がある。三百年以前のもの。ルイ十六世が斷頭臺にたつた時手にした十字架は見るも悲慘である。

チントレツトの壁畫を見て、武器室に入り次にラフアエル室に入る。法王の住んだ所でキリストやギリシヤの學者を主題にしてゐる。ロヂエには新約聖書の繪をかいたものが多く、みなラフアエロと弟子がかいたのである。

現法王の住まはせられる室の横迄行つてその部屋を見た。中には入られない。それから、チヤペルに入る。キヤペラ、シスチナといふ。此處にはミケランゼロが壁畫をかいてゐる。

大きな殿堂であるが非常に暗い。世界創造などをかいてゐる。正面は最後の審判の繪である。

それから、ラフアエルのタペストリーがある。各一枚が三間四方位あり、キリストの誕生などを畫いて有名なものである。彼のデザインであつたが彼の死後出來上つた。彫刻は二萬四千ある。とても見られない。

チヤリオツトが立派である。コンスタンチン帝の大理石柩と娘の柩は大きく彫刻も立派である。タイタス王の水浴盥は直徑二間もある。

ジユピターの首、アポロの像、鳥獸類の彫刻、眠れるアリアンナ像、トルソー像、レオコン像の手がないのでミケランゼロが彫刻しかけて中止したのもある。此等は美術史上有名な作である。

此時大雨沛然として降り來つた。窓から見ると庭園には松と樅との老木が茂り一種ローマ獨特の氣分がある。雷鳴甚しく、ペトロ寺の尖塔の上に電光がひらめく。

宿に歸り食事をして二時半をまつ。雨は止まぬ、篠つく雨だ。主婦はスイス人だ。五月二十一日以來の雨ですといふ。これで氣持がせい〳〵する。實際ベニス入以來の暑さには困つた。

三時發車して、ネロのコロシアムに行く。ユダヤ人の奴隷を使つて紀元前八〇年に仕上げたので竣工の時には一萬人の人間と五千疋の獸を血まつりにあげたといふ。周圍三哩高さ百五十六呎ある。見物は五萬人を收容することが出來る。

一間四方の角柱何百本と數知れず實に大きなものである。然も近代の演武場など〻同じ式であ

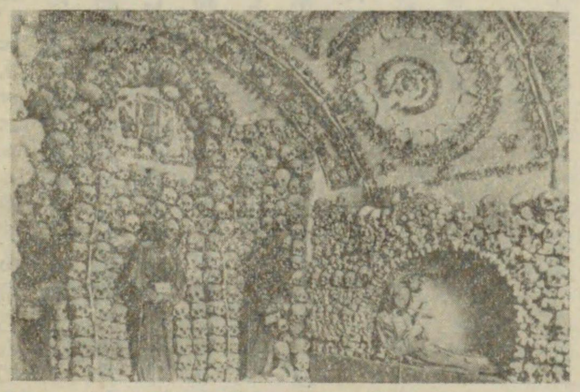
る。子供が二人金をくれといふ。十歳位の子供であるのに煙草を喫ふ。繪ハガキ賣が辻々に多い。

それから、有名なビーナスの古殿堂のくずれかけつ〻あるを見て、セントポール寺へ行く。夕立晴れて入道雲が白い。これは昔あつたのが燒けたので五十年以前から再建にか〻つたのである。天井には法王の像が畫いてあり、白と金色との格子天井、八十幾本と兩側にならんだ大理石柱、大理石の床實に世界の寺院の最美なものといへる。

光線も多く入り、實に美しい。チヤペルで僧が四五人歌つて禮拜してゐる。然しこの寺の外觀は粗末である。それから、チーベル河の中の島を橋から見る。セスチアス、フアブリシアスの兩橋はキリスト前二三百年頃に架した橋であるといふ。

その横に、ホレシアス時代の橋もある。その河畔に古い殿堂がある。ローマで最古なものである。

次にパンテオンに行く。これは古代ローマ建築をよく保存したもので紀元前二十七年オーグスタスの聟のアグリツパがたてたものである。周圍の壁の厚さ二十尺あつて圓形で天井の中央



屋部の骨骸

は圓く穴があき採光用としてゐる。ラフアエルも此處に葬られ、エムマヌエル皇帝も葬られてゐる。私等は墓前で署名した。實に此の樣な古い建築がかく完全に殘つてゐるのは珍らしい。

次に、セントマリア寺へ行く。驚いたのは地下に數室あり、四千人の僧徒の墓から頭蓋骨や骨をとり出してつみ上げ、天井も壁も一切粧飾してある。來世を少し知らせる爲ださうだ。

肌に粟を生じた。中には死体にかたびらを着せたのを何十も飾つてある。この話は聞いたこともない丈、度膽をぬかれる。これで今日は一段落にする。案内人と運轉手に五リラ宛やる。同行の日本人と日本館へ行つたが不在。大使館へコツ〳〵いたが手紙は來てゐない。昨日私が署名した帖の次には誰も署名してない。暑いから夏は來ないのであらう。宿へ馬車で歸り日記をかく。

ポンペイ

九月六日

早起六時半に朝食して驛へ行く。大分歩いて急いで行かねばならぬから馬車にのつて角をまはると驛だ。二リラ只とられた感がする。ナポリ行に乘る。七時半發車。郊外に羅馬の古い城壁がくづれかけて立つてゐる。大分長く續く。久しい旱天で草も小さい木も枯れ、畑は餘り作らず。葡萄を

植へたのと橄欖が多い。丘の上に人家がバラ〳〵とある。

畑は石のゴタ〳〵したもので不毛の感がある。畑は餘り作らず。水牛が居たり豚が居たり何だか貧乏くさい。古い朝鮮の感がしてならない。

湖水が一寸見えた。夏の雲が湧く。車窓の光景極めて惡い。十二時過、五月に香取丸から見たベスビアスを望む。白煙が昇つてゐる。

ナポリに近づくと流石に蔬菜を作る家が多い。汚い古い石造の低い百姓家がある。ナンバキビ、南京、赤とうがらし、などをつくり、妙な井戸の水を小馬に廻はらして水を上げさして畑に入れてゐる。

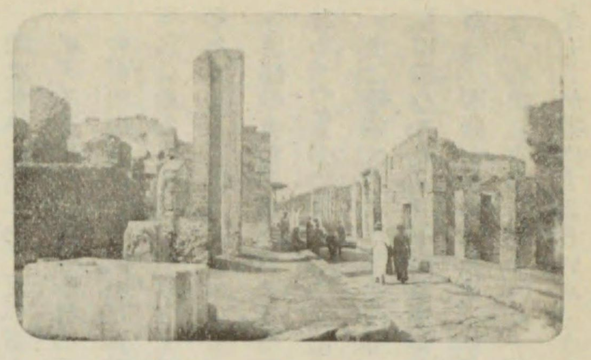
道路の土が眞白の粉になつて街路樹を白くし車中にまで舞ひこむ。驛でアイスクリームを賣つてゐる。「ゲラーチ、ゲラーチ」と聞へる。

十二時過ナポリに着き、ポンペイ行の切符を買つて乘る。驛辨のワイン丈除いて買う。汽車は海岸に添うて走る。海水浴場がある。長家の樣な脫衣場が澤山ある。古い大きな傳馬船を修繕してゐる。別莊が並んでゐる。如何にも小さい古い家がある。汚い感がする。

ベスビアスの裾をまはる。海に日がキラ〳〵光り、むし暑いこと夥しい。ポンペイ驛で下りるとガイドが案内するといふ。

昨日遇つた日本人は半日四十五リラ拂つたといつてゐた。一時間二十五リラでやりますといふ。兎に角雇うて馬車に乘る。

十數軒の家がある。つき當りに新しく寺院が建つてゐる。左に折れると直ぐ入口の前のホテルに着く。案内は、ポンペイとベスビアスを見せるから百五十リラくれといふ。ポンペイの人間の惡いことは豫て聞いてゐたから、腹をくゝり、兩方七十リラなら賴むといふ。



ポムペイ

ホテルから上へ上りかけると爺が蝙蝠傘を持つて行けといふ。借りる。坂を上りかけると、人足達が「暑い〳〵、萬歳」などゝいふ。こちらも「暑い〳〵」と調子を合せる。半町もない坂を上ると早や入口である。

大体ポンペイはギリシヤの商業港であつたので（紀元前四〇〇——五〇〇年）それをローマが征服して王侯貴族の別莊地となり、人口も二萬五千人あつたが、紀元六十五年に地震で倒され、再興したが七十九年に二十尺の地下にベスビアスの噴火の爲、埋められたのである。その時二千人の死者を生じた。

こゝの發掘は一千七百四十八年に開始して今尙續行してゐる。塀の長さ一哩半あり八つの門がある。町幅は十二尺から二十四尺ある。溶岩でペーブして角には泉水がある。入口で先づ右手の博物館に入る。

繩や衣のやけた儘のもの、戸の埋れしもの、松の木、犬、灰の中で化石狀となつた人体六個、中にはガスをよけるため布を鼻にまいてゐるのもある。悲慘である。

貝、オリーブの實、壺、鍋、ランプ、銅器、燭臺、ヒキウス、鐵製道具、象牙パイプ、青銅の器具。其他色々ある。子供の死体などもある。足の爪も頭蓋骨などもよく見える。人間の身体の周圍をメリケン粉で堅めた樣である。

坂を上ると、バシリカの殿堂がある。その地下は牢屋である。もうそこはポンペイの廢墟であるが、屋根こそ無けれ、道の敷石も、家の柱も、凡て殘つてゐるから土に埋れたとは思へない。

アポロの殿堂は柱四十八本ある。大理石の立派なもの、ジユピターのフオトラムを見て、アポニダンス街を行き富者であつたチンアリ家の跡を見る。敷石の上に妙な形のものを彫つてある。

ツリアングル、フオラムへ行く。劇場は二ケ所あり立派なものである。パン屋、兩替屋を見て、コルネリオルソフオー家を見る。大理石のテーブル臺には獅子をほつてある。寢室はせまい。公衆浴場の設備は昨日迄開業してゐた樣なものである。モザイツク、脫衣室、富者室、民衆室等廣大で

ある。

水道の設備など鉛管は現今の通りである。公娼の家の窓の高きこと壁畫もある。熊の家がある。有名な家であつたらしい。立派なモザイツクのストーブが目につく、最富豪のアブザビチ家の寢室食堂、金櫃、風呂、大理石柱、裏庭、大食堂、その壁畫など、どうして二千年昔のもので、久しく地下に埋れたものと思へよう。

幾分修繕を加へて舊態を了解出來易くしてある。妙な寢室があり彫刻がある。壁畫がある。門の入口の右手の小さい戸をあけると、男根の諷刺畫がある。この樣な所はガイドが其家の番人に案内さすから少々くれてやる必要がある。

あそここゝに制服の番人が居るが、皆煙草一本、銀貨一枚欲しい連中であるから、今日は機嫌よく一二枚宛ほしがる奴に與れてやる。案内を連れないでも充分行ける。澤山行てゐる。然し、要領よく見るにはガイドが必要で、チツプも五六リラをあそここゝでまいてやるのである。

ベスビアスを後に前にも山があり海を見晴しこゝはよい所である。廣くはないが狹い街が四通八達してゐる。夏雲が湧き暑いが興味はある。それから門へ出て來て、蝙蝠傘をかつた男に一リラやると、もう一リラくれといふ。ホテルで繪はがきを買う。男の手代が如何はしいものを賣りつけにかゝる。

ガイドが、此れが親方(ボス)だから八十リラやつてくれ、そしたら入場料も往復の馬車賃も此方で支拂ふといふ。そのボスは立派な服を着た横柄な男だ。一時間二十五リラで、二時間五十リラでないかと押問答しかけたが、少々のことだから負けて八十リラやる。親方はガイドに少々やつてゐた。

馬車にのつて三四丁の驛へ引きかへす。車上、一杯のむ丈私にくれ、人によると午飯をくはせてくれるなどといふ。然しこの男人相は惡いが愛嬌者だから、驛へかへると十リラと馬車屋に二リラやると兩人大喜である。

前の茶店でサイダーを飲む。一リラである。拂ひかけると、ガイドはウヰスキーを一杯のんで其分も當方のもち、日本人に紹介してくれと名前をかく。馬車屋がマツチをくれる。靴のほこりを拂つてくれたから又半リラ餘りはり込む。

暑い海際をナポリへ歸る。ナポリは既に海から見たし、ローマにも未だ見るべきものが多く、かう暑くては耐らぬ。驛でトイレツテンへ入り、頭やら身體を水で拭ふ。六時二十五分發車。ベスビアスが紫の山肌をあらはし靜に殘光を浴びて煙を吐く。月が上る。涼しい。食堂へ八時にゆく。割合に馳走である。食堂車はチースをよく出す。

氣持よく車窓から、夜の伊太利の野の月を望んで口吟つきない。山影黑く中腹に人家の灯が赤

い。ローマに近づくと、黒い廢墟の塀に新月が光を投げて二千年の歴史は默として眼前にあり思へば深い味のある所だ。ケーザルもネロもギボンも皆此の月を眺めたのである。

興亡こゝに幾千年、時の流れは東方日本國の一窮描大を、此處に拉し來り幾萬頁の人類史の一頁を一寸のぞかしてくれる。理屈もいはねば感想もいへず、只大に喜んで微笑しつゝ、月を見てゐると十一時ローマに歸つた。

大きな戸をたゝくと愛嬌者の方のチェンバーメードが開けてくれる。二リラ與へる。ダンケシセンといふと「ビタシエーン」といふ。「ニヒト、シュリーベン」と尋ねると「否」と答へる。室に入り身體を洗ひ、日記をかくと午前二時近くなつた。

九月七日

カラニ、カーションカトに乘り市中見學。陸軍省、クリノパレスを經フォルムオフトリジョンの塔を見て古き牢屋を見る。地下が二階になつて下の方が死刑にされるものを收容した所である。

次に有名な、キヤビトルミウジアムに入る。川の神、ブロンズ室、プリニーの鳩（モザイクにて五十萬個を用ひ繪と同樣に見ゆ三尺四方位）皇帝の像八十二、哲學者及神の像、死せんとする騎士は有名なるもの、別室にビーナスの像がある。至純至高の藝術品である。

市會議事堂はミケランゼロが裝飾したもので歴史の壁畫がよろしい。小供が足の刺をとる彫刻も有名なもの。これは紀元前三百年にミランの作である。ミケランゼロが大理石に半身像の彫刻もある。それよりセント、ペトロ寺へ行く。

ミケランゼロ其他ブラマント、ラフアヘル、フオンタナ、ベルニン等が設計したもので一四五〇年から一六二六年間にたてたものであつて、此處で、セント、ペトロが殉教した所、シヤレーマン其他の皇帝はこゝで戴冠式をした。費用は一億二千萬圓を要した。百七十六年間二十八代の法王の御代の間かゝつた。

二十四萬平方尺あり、世界第一の寺院である。長六百九十六尺、塔の高さ四百七十尺あつて上に十九尺の高さのキリスト像及聖徒の像がある。內部に三十の聖壇と、百四十八本の柱がある。彫刻モザイツク、金と白との模樣壯麗を極めてゐる。

ペトロの墓は中央にあり、百十二の燈明が常に輝いてゐるミケランゼロ、キヤノーバー等の力を揮つた彫刻がある。ジョツトの作の繪もある。ドームの內部の廊下を歩いてゐる人を下から見上げると豆の樣である。只々驚くばかりである。塔の上へも上れるがとても勞れて上られない。

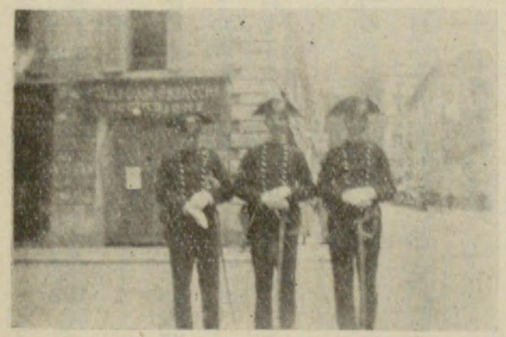
一旦宿に歸り、一寸睡つて午食後二時半又出發。サンタ、マリア、マジーフへ行く。立派なチヤペルである。ミケランゼロ作、モーセの彫刻が大である。これは六十四體の聖徒の像を造る筈であ

つたのを彼は四つしか仕上げ得なかつた。ペトロが、エルサレムで縛られた箱入りの鎖を壇上寶物箱の戸をあけて拜ましてくれる。

次に、クオ、バヂスへ行く。ミケランゼロ作キリスト像がある。靈夢に感じ此の堂を建てたといふ。次に郊外のカタコムに行く。丘の上に木が數本生へ何の奇もないが、銘々小さなろうそくをもらつて地下に入る。地中深く幾層にも櫃を埋めたり、チヤペルがあり、石棺の中に死骸のくさつたのも二個ある。鬼哭悚々の感がある。

何とかいふ娘の大理石像の前には花を多く捧げてある。二十尺の地下で二列で通りかねる所であるから物すごい。それから、丘の上を走る。有名なカラカラの湯の所を通る。古代ローマの名所で一千八十呎平方あり、一千六百人が入浴出來たものである。

次にセントジョン、カシドラルに行く。大きなもので堂内に立派な彫刻がある。ミケランゼロ作パのイプオルガンがある。その前のサンタスカラは二十七段の石階があり、カトリツク教徒は祈禱しつゝ膝づいて上つてゆく。とても立派な寺が多く、彫刻と殿堂とモザイクと壁畫に逆上しそうだ。



伊太利の巡査

又雨になる。疲れて歸る。然しローマは仲々よろしい。町も大体美しく所々に、大きなパームがあつて熱帶の氣分もあり、行く所として古代ローマ人が水道に熱心であつたから、彫刻のある泉水が水を噴き、流石に世界の古い藝術の庭に來た思ひがする。

今日の一隊は、印度人夫婦、支那人、ギリシヤ人夫婦に米人と私であるが、其他大勢ゐるから通譯はフランス語と英語で話す。別の組はドイツ語組である。

宿は下宿であるが十六七人宿つてゐる。朝食は室へ持つて來るが晝は午後一時、晩は八時に食堂でする。婆さんと夫婦の食卓、男一人に女二人の食卓、老人の卓、夫婦と子供一人の卓、男同志の卓、女三人の卓、私の卓、何處の國の人か御互に分らん。

九月八日

觀光を止め朝は荷物の整理をして、大使館へゆく。久次米、三浦君からの來信をよみ、土產にイタリー風景入のかべかけを十五枚買うて日本へ直接おくらす。それに大分隙どつた。午食、伯林以來の繪はがき、案内書、繪帖を一つに纏め小包にして主婦に賴む。

シーザーの墓へ行きたく、主婦に、「タムバ、チエーザー」と書いてもらつて、タキシーに乘つて行く。河を渡ると、こゝが、シーザー街だといふ。無論墓らしいものはない。墓はないでないかと

いふ。通行人に馬丁が聞く。結極分らぬ。仕舞にはこゝが終点だといふ。こちらも怒つてなじつたが、語が通ぜず澁々五リラを拂ふ。そこでオートに乘り引かへす。

ローマ畫帖を買ひ、主婦が小包にしてくれる。朝のは重すぎて局で受取らぬ爲に仕直す。合計五包にする。支拂をする。洗濯が出來てくる。四日居ると馴れて來る。割合安くてよい宿で英語も相當話す。

畫兩替をして五ポンド渡し、八百八十リラもらつて外出から歸へると五ポンドですから半分多くあげましたといふ。こちらも氣がつかずに居た。

洗濯屋の主婦が洗濯を持つて來る。ワイシャツ一枚、シャツカラ、ハンカチ等で六拾錢は安い。その洗濯屋の妻は美人であつた。歸りもせず喫煙室にゐた。夕食後こゝを出て驛へ行く。手カバン一つポーターに持たし、多いが二リラやると、もう一リラくれといふ。二リラでも多いといふと笑つて有難うと引退る。こんな手合が伊太利に多い。

ペンテイミラ

汽車に乘ると、伊太利人が東京時事新報の七月廿七日のをくれる。これは驚いた。たれか日本の技師からもらつたといふ。發車するとローマの夜景が美しい。

驛で見送りの青年が何か萬歳を頻りに唱へてゐた。直ぐ電燈を暗くして同室の人は眠に入る。ゼノア經由、ニースへ行くのである。

ニース へ

九月九日

眼がさめると汽車は海岸に沿うて走る。漁村がある。砂濱、漁船、斷崖、トンネル。九時ゼノアの町に着く。驛から海邊へかけて仲々商工業の盛な町である。

港には大きな船が澤山碇船してゐる。造船所がある。キールを据へつけてゐる。ガントリークレーンが澤山ならんでゐる。一時間乘換で待つのでトイレッテンへ入り洗面する。

プラットのブフェーでコーヒとサンドイッチを食す。十時發、海に　うて走る。こゝから電化である。トンネルが四五分おきにある。

熱帶らしくパームが茂る。右手は山、左は海の紺碧で、恰度須磨のあたりの景である。終日海に

添うて走るのである。海水浴場がある。少しさびれてゐる。脫衣場は餘り多くない。砂が美しい。

二時頃、サンレモを通過する。ホテル、公園、街道にパームが兩側に並びスペイン、イタリアとフランスを合した景である。

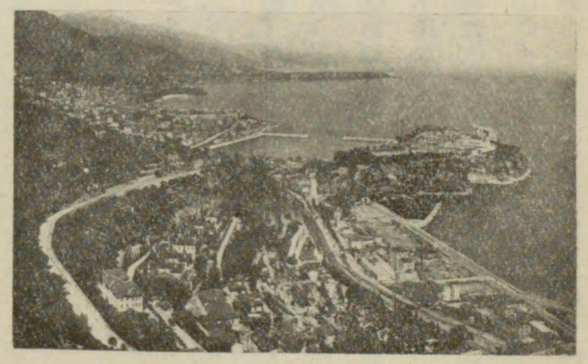
この町は非常に美しい。海に臨んで丘の上に卵色を帶びた家が和かい。それから二時半、ベンチミリアに着く。

二時間程待たねばならんので、同車した伊太利の大學生と兩替する。一ポンドが百二十フランである。一緒に前で繪ハガキを買ひ。パームの並木の下を拔けて海岸へ出る。河が流れてゐる。大勢女が洗濯してゐる。

川をへだてゝその向ひは佛領で丘の上の家が寫眞にとりたい景である。日が輝き鷗がとび交ふ。冬はよい所であらう。

町をあるいて、驛で稅關と旅券の檢査がある。伊太利の金を持つてゐないかと尋ねられる。こゝからは、二時間餘かゝつて、メントンを通過する。こゝも景物はよく似てゐる。

モナコを通る。斷崖に近い下に町がある。下の海に大きな客船が浮んでゐる。防波堤の内は深く



モ　ナ　コ

美しい船が浮んで、その横に散步道がある。舊城は突出た丘の上にある。乘降の客が多い。

米人がニースつて此樣な所か、こんな所は米國にいくらでもあるとつぶやく。日沒ニースに着く。驛前のターミナスホテルに入る。善い部屋で一泊三〇法である。

こゝは人口十五萬、頗る大きい町である。冬季の避寒地として、歐米から客が多いらしい。氣候が海に面してゐるから和かい。ゼノア以來の海濱は皆此種の療治場と、冬季の社交場になるのである。

昨夜十時ローマ發以來であるから疲れた。今日は拾圓以内で濟んだ。餘りないことである。

九月十日

起きて、朝食後、見物に出る。實は荷物を出來る限り簡單にする積りで、ロンドンを七月上旬に出るときから、洋服は一着きたまゝであつた。所が各地を步いてゐる中に大分よごして、部分的に汚くなつたので、ロンドンにある分を、ミュンヘン迄送つてもらう樣にしてゐるが、今朝散步してゐるとシグランドといふ大きな巴里に本店のある店の窓に頃合のがある。

そこで中へ入つてきくと、貳參拾圓で相當なのがある。三階に上つて縞柄を見ると、邦貨拾四圓程ので冬服三つ揃のがある。兎に角、着てみると袖が長い。十時半に來てくれ直しておくとの事で

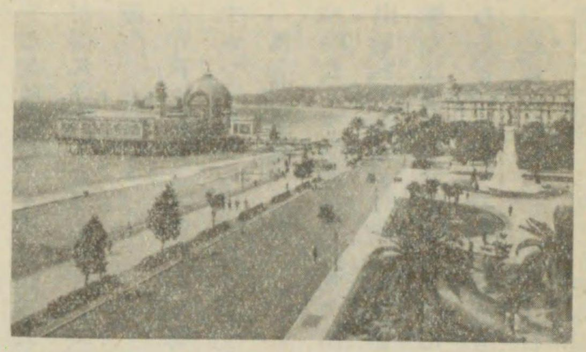
支拂をして海岸のプロメナードへ出る。

實に海が美しい。眞砂の石も美しい。波打際が直ぐ深くなつて紺碧である。後に丘を負ひ、横は兩方へ彎曲して伸び、ニースの町を抱いてゐる。その波打際に廣い散歩道がある。

パームが生へ、空には雲もない。水泳場がある。水の上に餘興場がある。如何にも冬は善い所であらう。長閑で暖い避寒地には違ひない。然しこんなに暑くては仕方がない。

クツク社へより手紙を受取り、パームの隅のベンチで讀む。左の丘の上に古城があり、見物する所も多いが、一通まはつて服をとりにゆき宿に歸る。

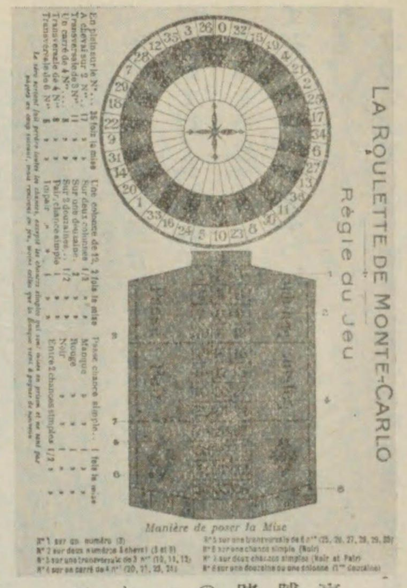
それから支拂をして十一時二十五分の汽車に乘り、モンテカーローに行く。



ニース　海岸

驛を下りて手荷物を驛へ預け、世界の賭博の本山カシノを見物に行く。カシノは、モンテ、カーローの驛の直ぐ上にあつて五分もかゝらぬ。大きな立派な建物である。

入場券を買うのに、旅券を見せ、仲々くわしくかく。室に入ると、三間位のテーブルの上に數字



モナコの賭博臺

が澤山かいてあつて、横の圓がまはり、圓の中の數字のどれかに玉がころげ込む。その玉があたつたものが勝つ。

親方は二人で棒の先に木のついたもので金をかきよせる。一つの卓に二十人位すわつて、はつてゐる。

夫々帖面に、あたつた數をかいて罫線をつくること相場の高低表を研究する樣である。

ミニマム、一〇フランとしてある。老人、若い人、女、紳士が默々としてやつてゐる。勝負は極めて早い。數字の圓盤と白い象牙の玉の廻はる方向は違ふ。

小柄な美人が札束をつかんでカバンに入れ、ニヤツと笑つて出て行く。「ムツシュ、ムツシュ」と親方は、はることを皆にうながす。王宮の樣な廣間の中に此樣なのが十組ほどある。或る臺では、トランプを用ひてゐる。一寸見るが中々分らぬ。

こゝを出て下の、レストランで午食をする。三時十五分に發車する。驛の下が直ぐ青い海で、白い帆がみえる。西日をうけて暑い。

昨日の道を逆戻りして、ベンチミラに着く。又税關である。伊太利に入るのである。モナコからスイスのジネバに汽車がある筈であるのにクツク社は再び、伊太利ゼノアに逆戻りのプランにしてあつた。つらかつたが仕方がない。税關では絹のスエータを量つて課税さゝれてゐた者、卷煙草を澤山持つてゐて税をかけられた者もある。

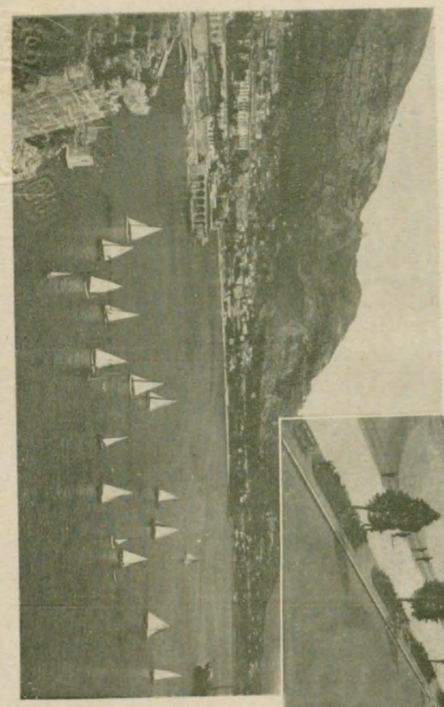
伊太利から來るときも、煙草はないかと尋ね、フランスから伊太利へ入るときも煙草はないかと尋ねる。それが同じ驛であるから、一体何處で煙草が持てるのであらう。此の時パツスポーツを檢査する役人が私のは見もせね位に通過さした。それで他の者のはよく調べてゐる。

差別對遇も此の様なときには痛快である、さつさと大手を振つて出て行く。それから又汽車にのる。

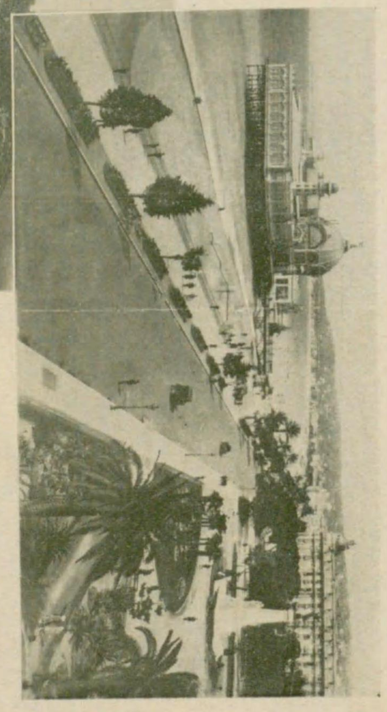
夕日をうけて暑いが、そのくせ、汽車は何處の驛にも止まつて長く止る。サボア、サンレモの町々も美しく、次第に日は暮れる。

町の灯が美しい。滿月が海の上に上る。夕方の町の家の窓の

カンヌの花賣り



モンテカーロ



ニース

灯が照る。ブドーの棚の下で酒をくんでゐる。所々の道の横にキリストの像があり、燈明を澤山さゝげてある。日本の辻地藏の樣だ。

九時半ゼノアにつく。驛前のホテルに入る。ダブルベッドの室で一六リラは安い。風呂に入る。かへりに部屋が分らず、ノックモせずにドアーをあけると婦人がゐた。急いでしめて自分の部屋に入る。ビールをとりよせて飲み疲れてねむる。一昨日來大分强行軍であつた。

ゼネバへ

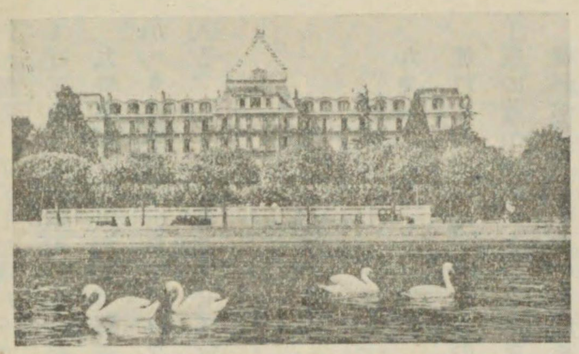
九月十一日

疲れてゐるのに、スイスのゼネーバ行は六時十五分である。四時過に目がさめ、顏を洗ふ。新の洋服に着かへる。よくこんな古い服をきてゐたなとおかしい。

番頭が目をこすり乍ら起きて來る。支拂をする。コロンブスの銅像を見て汽車に乘る。大勢乘つてゐる。しばらくは電化である。伊太利も此の邊はよい。百姓家も大きく、桑を澤山植へてゐる。子供が顏を洗つてゐる。

ミラノの町は古く大きい。こゝで乘換たが二等室は滿員であるから三等でしばらく居つて、その

中に車掌に二リラやる。大分行た時客車二臺後へつなぐ。それに乘ると、ポーターがカバンを持つて來ない。車掌と一緒に行つて見ると待合所へ運んでゐる。急いで車内へ運んでくつろぐ。危く大變なことになるのであつた。



國際聯盟會場

コモの湖水の水が美しい。山の裾の家、田舍の家、別莊が見える。國境に近づくと山容が嶮峻になる。

稅關と旅券が難なくすむ。食堂車へ行く。ポンドで拂ふ。一ポンドがスイスの二十四フラン七〇といつてゐた。伊太利の金でも拂つたが銀貨が殘る。各國の銅貨と銀貨とが大分殘る。子供の土產である。

雨になる。山の裾に霧がかゝる。シンプロントンネルに行く途中は平い溪谷が幅二百米突位あつて、兩側は思ひ切り削りたつた山である。山といつても木は少く岩山に近い。

トンネルを越すときは餘り長いので、うと〳〵と眠り何時出たのか知らなかつた。レールと殆ど同じ高さで清流が流れる。

雪すべりの跡が岩の上に見える。山の所々に家がある。スイス

である。急に寒い、冬服でまだ寒い。栗の實が澤山なつてゐる。田舍の家らしいのがある。

淋しい驛に、山登りの歸りの人がルツクサクを背に負うて立つてゐる。モンブランへ行く分れ路である。山の所々に白い雪が見える。雨の名殘は霧になつて頂を包む。やまならしの並木がすつくり立つてゐれてゐる。

伊太利の並木は上を丸く剪つてあるのが多かつた。こゝのポプラの木はすつきり立つ。淋しい所に美しい農學校の建物がある。農園がある。

石垣を積んで、小さいブドーを澤山つくつてゐる。ローザン、オバーランドは善い町だ。ゼネバ湖が下に見える。湖水の對岸の丘に家がある、尖頭が白い。それから、美しい町と村を過ぎる。ローザンもよい町である。公園の樣だ。

六時半ゼネバに着く。驛の近處のホテルにつく。三食付十五フランといふのを食事を別にして、五フランで止り、食堂へ行く。先日來の疲れを休めるため一圓二十錢のワインを注文する。これは安い方なのである。非常に甘かつた。

食後ハガキをかく。雨がひどく降り出した。少し醉つたので床に入る。

インターランケン

九月十二日

八時起床、荷物を整へ下りて行て、食堂で食事をすませ支拂をする。一ポンド兩替して、湖畔の橋へゆく。こゝから、ゼネバ湖が二つに分れて、ローン河に急に落ちて行くので、中に島があり、橋がある。

島は小さく、ポプラが生へて、ルーソーの銅像がある。リーグオフネーションの建物は元ホテルであつたのであるが、湖水に面し、少し青味がかつた建物である。樹木の中にある。

九時二十分モントロー行の船にのる。切符は汽車でも遊覽船でも共通である。ゼネバ湖は三ケ月形の湖水で幅は狹いが長い。湖岸は綠したゝる林の別墅と、村とその後に高い山が續く。

樂隊が奏樂する二、三曲濟むと。金を集めに來る。快晴でない空には灰色の雲が多く、風は冷い鷗がとぶ。乘客は少い。食卓の豫約をとりに來る。十二時半の方を賴む。

船は北岸のニオン南のトノンやエビアンレスバーンスに寄る。ホテルがある。乘降の客がある。又北のウトシールザンに寄る。雨が頻りに降る。山の頂が隱れる。

英字新聞をよむ。英皇帝が、寺院の基本金を寄せる爲、バザーを催され、皇帝親ら、花を賣られた記事がある。三時間程の內に悉皆賣切れて、終ひには花を入れてあつた壺などまで高値に賣られたとある。皇帝も初には、拾シリング札などを充分心得られなかつたらしいので、釣錢にまごつかれたが、客の方が氣を利かして釣錢を受けなんだ。で白い花が賣れてしまうと巧に殘つてゐる赤い花をほめて賣られた腕前は天晴れとある。

食堂にゆく。此の舟は外輪船で、食堂とシツチングルームの立派な遊覽船である。樂隊はニオンで下りてしまつた。寒い、モントローで下船して、階段を上り、インターランケン行の電車をまつ。ミラノ行の汽車の窓に日本人が二人見へた。日本人には久し振りであるが先方は此方を見なかつた。

電車に乘ると、前に座つた婦人が「有馬々々」といふ、「有馬を知つてゐますか」と問ふと、寶塚へ行たことがある。ウイーンのコンサートの、ソプラノの唱ひ手であるといふ。立派な服裝はしてゐるが美人ではない。色々と日本のことを話す。

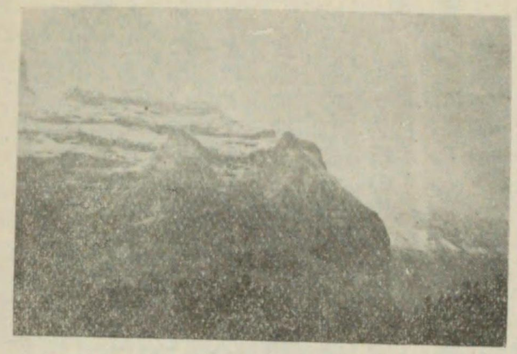
これから、電車は、モントローの上の山に登る。今迄船で來た湖岸の村々が眼下に見へる。この山を越へると景色は一轉して、唐檜の茂つた間に、スイス獨特の山家がある。

牧場が多く。牛がゐる。直下は深い溪谷であるが、牧場はビロードを敷いた樣である。その景色

は全く別天地である。

すつくと山が立つ。白雲が湧く。山家から煙が上る。山男がすた〳〵と山から下りて行く。半マントを着た子供が居る。山から下りると河に添うて進む。よくもこんな山に電車を走らしたものである。河のあたりは平地があり、山の宿がある。夏冬ともに客があるらしい。

全く上高地の景である。家は木造で、がつしりとして屋根の勾配が緩い、階下で牛を飼ひ二階三階に人が居る。



ユングフラウの麓

ショートードツクスなどのあたりは双方に山がそびえ、やゝ少しある河岸の平地に家がある。家は山の上にまでぽつ〳〵あるのが珍らしい。あんな所にと思ふ様な所に家がある。それが他と違つた光景である。

サアネンも善い。パンション、レストランがある。直ぐ上の山まで先程の雨と共に雪が降つてつもつてゐる。恐らく今年の夏の後に於ける初めの雪であらう。

■ツアイシンメンで汽車に乗替へる。右手に岩山がそびえる。スビツツにつくと日はくれる。山中にしては大きな驛である。

それから湖岸(ツーナー湖)に添うて進むと、インターラーンケンである。スプレンヂーホテルに宿る。ランニング、ウヲーター附で六フラン。夕食後散歩する。立派な店がある。土産物店も多い。磁石を買う。

クルサールへ行く。花時計がある。ダンス場、オーケストラの室等、ベルリンにも少い様な設備がある。ウインワルツ、モツアール、バツハのものなどを聞く。外へ出ると町の兩側の山が黑く天氣は惡い明日のユングフラウ上りが氣遣はれる。

ユングフラウは往復二十四圓かゝるのに驚いた。ビクトリアホテル其他の立派なこと、そして靜かで、花が咲いてゐる前庭は美しい。ダリアと菊とがゑも言はれぬ色を添へる。街路樹がしつとり山氣に濡れて行人も少く、瓦斯の光は明るい。

ユングフラウ

九月十三日

六時前から目が覺めた。早速用意をして食堂へ行く。皆山登りの服裝甲斐々々しく急いで朝食を認めてゐる。前でフイルムを二箱仕入れる。レインコートとシャツを二枚着込んで馬車で朝の靜か

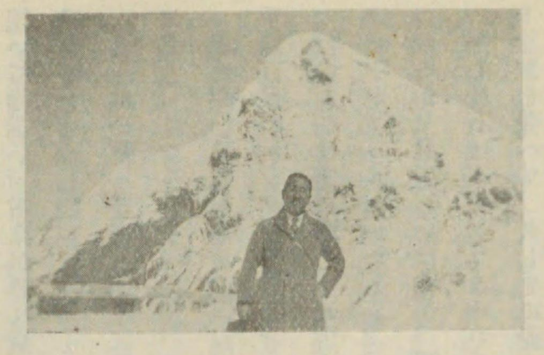
な街を驛へゆく。

二三等あつて、三等でもユングフラウヨツホ迄五十八フランで、二十二三圓につくから二等にする。三輛聯結で進む。天氣は昨日迄惡かつたのに、今日は早くから、山影がくつきりと私の寢室へ見えて、ぱかりと朝日が出た位であるから、理想の登山日和である。

電車はすぐ、谷に添うて進んで、ツワイルートシンネンへつく。こゝで二道に分れて一は右の方へ一は左のグリンデルワルドの方から進んでシエイデツクで合して尙上へ進むのである。私らの電車は右方のラウターブルンネンの方へ行くのであつた。

双方に絶壁がそびゑ、向ふの奥に白い雪のアルプスが見へる。仲々溪谷が深い。ラウターブルンネンで乘替へる。此處は一寸した村でホテルもある。こゝから眞すぐに上へ上ると、所謂ミウレンといふ所で、ケーブルもあり、何千尺の崖上に一つのコロニーがある。冬も夏も色々のスポツツの盛な所で、アルプスを前に控へよい所である。

この上の崖から瀧が直下九百八十尺の下へ落ちてゐる。那智も物かはであるが、水量は崖が大きい丈小さく見える。こゝから電車は谷を渡つて急勾配で、ぐん〳〵と上りヴェンゲンに至る。こゝはトボガンをやる名所である。無論スキトも盛である。パレスホテル、レギナ、ブルンナーなどの宿がある。向ふの山の上のミウレンと相對してゐる。



ユングフラウにて

こゝからはユングフラウが直ぐ上に見える。山の上で頗る見晴がよい。樅の林を過ぎる。こんな山の上でも百姓屋があり、百姓家といふより、牧場の家がある。

牛が澤山ゐて、特殊の鈴を首につけてあるのが鳴る。よく此の樣な山の上に住むものであるが、どこを見ても繪よりもよい所だから住むには善からう。

林を抜けると、朝日が雪に輝いて照る。實に快晴である。やがて、シセイデツグにつく。もう樹木はない。

電車は山の尾根を廻ひ乍ら進んで、アイズミアーに至る。ユングフラウ一帶の山がもう鼻の先にそびえる。

シエイデツグからは三哩程、眞上へ向つて、萬古の雪の下の岩の中にトンネルをうがつてあるのである。隨分大事業で十四ケ年かゝつて、一千四百萬フランを費したといふのも故ある哉である。

此の山の上で、然もアルプの大盤石を三哩にわたり穿つて行つた根氣は、青の洞門の話にも比すべきである。大分電車に疲れるとトンネル中で休む。

その時電車を下りて横の岩の厚いガラス窓から見下すと、アルプの山嶺がぐつと眼の前にあるのに驚く。一二回休んで、矢張トンネルを進んで、遂にユングフラウヨツホに着く。隋分廣く岩の中をくりぬいてある。バーもあれば食堂もあり、リフトもある。

その一角にベランダをつくつて眺望を充分にしてある。眼前に鋭峯がそびえ、直下は雪田が遠く續いて物凄い。雷鳥が群れ飛ぶ。大勢寫眞をとる。きやつ〳〵とさわぐ。食堂で、サンドイツチと茶をのむ。少し胸苦しい。

こゝは一萬一千三百四十二呎ある。ハガキをかく。記念品を求める。日本人山口高商教授と一人に遇う。リフトで上へ上り、それから、雪の中を進む。廣場へ出る。

雪は深い、こゝから、ユングフラウの頂上はすぐ近い。大勢ロープでつないで上る。見よ一萬三千六百尺のユングフラウを。ムンフの鋭峯を。アイガーの嶮峻を見よ。並び立てるアルプの群峯。空の紺碧は實に美しい。雪は常に降り積むと見えて、純白である。グレツチヤーホーン、ドレツクホーン、ヘルセンホーン、シヤーバヅンクの諸峯は精鋭天を突くが如く競ひ立つてゐる。雄大といはうか、壯嚴といはうか。實に神秘である。吾を忘れて見とれる。

然し流石はユングフラウである。物凄さは尠い、富士などは一瞬の間もなく白雲が湧き夕立が來り惡寒を覺へて、久しきに耐へないが此處は割合に氣持がよい。尤も理想的の山登りの日であつた

からかも知れない。山の犬の數疋に橇をひかして、平地の部を走る人もある。あちらの峰を極めんとする人もある。私は寫眞に急しい。

スキーをやつてゐる人もある。無論それは、ヨツホの上の平地である。平地といつても比較的の話で一歩誤れば千仞の谷である。それから二時十五分の下り電車にのる。贅澤なもので、車内は、暖房がよく出來てゐる。だから、婦人や老人などが多くて青年は少い。

然し中腹のホテルからルウクサツクを負うて上る青年男女も見へる。世界相手であるから出來た仕事で、三哩位の上下往復が十六圓といふのだから隋分高い。眺望は恣にした。

アルピグレンの方を下る。牧場が多い。アルプの乳の上の所まで牛を放牧するのである。下の村々の家、川、丘が見える。全くの繪である。シユレツクホンの裾を下りてゆく。

グリンデルワルドへ着いて乘替へようと急いでゐると、突然私の腕をとらへて「カム、カム」といふ人がある。見ると昨日のウインナのソプラノ婦人とベルリンの夫人である。

此れから時間がまだ充分あるから此の川上の、グレーシアー(雪河)を見に行かうといふ。そこで馬車を賴んで三人乘る。ゆら〳〵と阪道を上る。下宿がある。農家がある。少女がバスケツトを持つて買物にゆく。夫婦が刈草をあつめる。

外側を澁く塗つて、窓のシヤツターを青く塗つた特有の家が山の腹にある。牛が鳴く。谷があ

る。蕗や、山ザンショ、谷ビワなどは日本の深山の谷の傍に生へてゐるのと一緒である。たゞ林檎は南國の私等には珍らしい。隨分パンションが多い。

すた〳〵と見物から歩いて歸る人に遇う。前には、バツタルホーンとメツテンバーグがそびえる。この二つの山はユングフラウに次いで私の心を喜ばしめた。全くの岩山である。

細い溪流の上に數千尺思ひ切り一つの岩が削り立つて、雄渾さを示してゐる。その間に氷河が谷まで續いてゐるのである。この二つの岩山は實に素晴らしい。

私は先程、ユングフラウから下りる時も此の二つに目をひかれてゐたが、今目の前に遠慮なく、その全山容否、岩容を露出してゐるのを見ると今迄日本で見て物凄いと思つた、溪谷などの雄大さが比較の隅へもぐり込んでしまう。その上の雪に落日が朱を濺ぐでないか。實に造物主はヨーロツパを作る時には怠業狀態にあつたのに違ひない。

神はショベルに土をすくい込んで無造作に投げ出したとき、そこにヨーロツパの天地が出來上つた。そこで神が神の仕事を見直すと、これは誠に平凡にすぎた。職務上これでは手落ちになると感づいて、再び神が雄渾の靈腕を揮はれてヨーロツパの中心にスイスの國を造つた。否アルプスを作つた。

だからヨーロツパの他の國は平凡だが、スイス否アルプスは確に造物主のオールマイチーたる所

以を吾々に示されたのだといふ落ちになる譯だ。

されば此の、バツタルホーンとメツテルホーンの二峯が、目の前に荒れ狂ふ獅子の如く突立つてゐるのである。峯といへば、木と土との山を思う。峯ではない、天を摩す怪巖の矗立である。その下の谷へゆくと、グレシアーがある。

雪か氷かその下のトンネルをくぐると水晶宮とは此れをいふか。地上何百尺と屈折して進むに、極めて明るくその青味を帶びた光は清淨そのものである。この上の氷河も物凄い。

アイガー、、ユングフラウの氷雪が凡てこゝへ落ちるのである。こゝを見て引返す。馬車を殘した所の店に、農民美術の細工物を賣つてゐる。アルピンスチツクが安く、山羊の角の杖はよほど欲しかつたが邪魔になるのでやめた。こゝから又馬車でかへる。

落日は漸く西の峯にかくれんとして、アルプスの浮彫の冴へは極めて天空にあざやかに。牛をよぶラツパが谷に谺する。日は漸くくれる。寒さがひし〳〵と迫る。ホテルの客引が、グリンデルワルドの驛でふるへつゝ立話をしてゐる。

溪谷は暗に落ちた。電車は暗をついて、インターランケンに歸る。あゝインターランケン。

飛彈の上高地に立派な歩道を設け、銀座の華美な店の一角をそこへ移し、奈良と京都と日光のホテルを今少しエレガントにして、そこにおいて、立派な音樂と、夏の流行を競ふ西歐の婦人の群を

想像するとき、ツーン湖とブリエンヅー間のこの山の町の氣分が分る筈である。寺の鐘がなる。華やかな食堂で食事が初まつてゐる。栗の木の街路樹が暗に立つ。彫刻とレースと毛皮と革細工の店の光が明るい。

ホテルへ歸ると主婦が、どの客にも愛想をいふ。食卓には感心に昨夕飲んだ殘りのワインに新に栓をしてちやんと置いてある。少しの殘りでコツプに二杯しかないが、こゝに女給仕人の細心さがある。これが客の心を落付かしめる、感心である。

ベルンとルツアーン

九月十四日

バルコンで冷い朝風を吸ひ乍ら、朝の光に浴して朝食をとる。食後そこで昨日の日記をかく。續々と下の道を山へ行く人がある。今日も天氣はよい、ユングフラウの頭がこちらの黑い森のあなたに突き立つ。

九時半頃下へ行て汽車の時間をきゝ荷物を整へ、宿のタキシーで驛へゆく。長閑な日和である。下界では夏であらうが、こゝは夏らしくない。牛乳を積んだ馬車に老人と乙女がのつてゐる。プラ

ツトの彼方である。背景には清い川と並木と遠方の山々がある。それを一寸撮影する。

汽車は此の國としては平地を走る。ツーン湖の水が美しい。平地であるが畑はない。畑といつても牧草をのみつくるのである。だから何處も青々としてゐる。伊太利の樣に焦々した暑苦しい、枯葉や、赤い葉の木や草がない。景色が充分落付てゐる。長閑である。

一時前ベルンの町へつく。手荷物を預けて、三等食堂で午食をする。それから市中を歩く。此處は人口八萬人、アール河の上にある。街路の兩側にアーケードがあつてそこを歩くのが一寸變つてゐる。泉が街の中に澤山ある。一一九一年にたてた時計塔も有名である。

熊の泉と鬼が子供を食ふ彫刻のある泉は名高い。熊の彫刻や繪が多い。熊は愛らしい。何處となしに人の好くものである。一寸山國の人の氣質に似てゐるかもしらん。

アール河は美しい水が多量に流れてゐる。そこに架けたキルシセンフエルド橋は高く長い。景がよい。一方に古いゴシツクの彫刻の有名な寺がある。

橋の下の古い家も奥床しい。堰堤の淵で魚を釣る舟がある。その橋を渡ると、萬國聯合郵便の記念碑は美術的である。その後の丘に、熊の門があつて、歴史博物館がある。入口の左手に日本館がある。

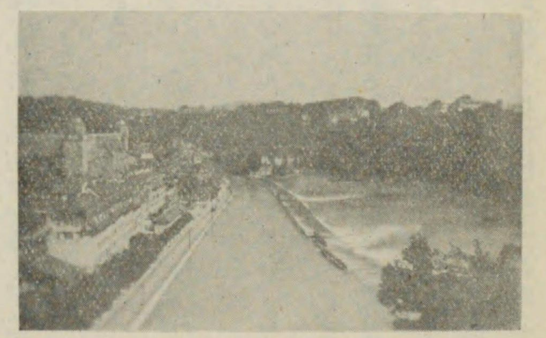
第一に日本の中老婦人の像がある。そのとなりに、日本まげの娘が縮緬の裾模樣を着たのが立つ

てゐた。かすりに袴の小供と一緒である。それを見ると嬉しかつた。これ位のものを外國へ持つて來ておかんと恥しい。

日本の國粹宣傳の爲、日本の美人ならずとも立派な服裝をした人形を世界各國の博物館へ寄贈することの必要をこゝに提唱する。私は二三回その陳列棚の前へ行つた。

西洋婦人の服裝に飽いた私は、その人形がなつかしく、挨拶でもしかねまじき心持であつた。そのとなりの人形は首をこちらでこしらへた拙いもので、兩手を袂の中から出してゐるのだから、この國の人が着附をしたに違いない。あれは取替へてほしい。其他、雛段の飾り、神道の神棚、浮世繪、煙草盆、印判纏など澤山集めてある。感心しないのは小さくはあるが、色々のザルや籠を數十一荷にしてかついだ、ちよんまげ男が褌一つで歩いてゐる像である。能狂言の服裝などもある。

それから、支那の部を見る。この國のでは軍服、大砲小銃、軍旗、陶器、コップ、古い時計、古い診斷書、地球儀等がある。初めて見たのは、世界戰爭のとき獨佛兩軍が飛行機から落した、宣傳文書を澤山、原形に近い通りにして陳列してあるものである。



ベルン

各その國の有利なことを印刷してある。ビール入れの壺やコップが目をひく、この町の古い繪もある。こゝを出て、アルプス博物館を探したが見へず、時間も遲くなつたので驛で繪ハガキを買ひ早く汽車にのつて此の日記をかく。

前にはフランス行の汽車がゐる。ぼつ〳〵乘込んでゐる。三時十五分發車する。車内へは二組の男女が來たばかりである。男子は三十歳過女は二十二三歳である。

「ギーベン、ジー、ミアー、グロス、バナーナ」など言ふからドイツ人かと思へば、今度は伊太利語で喧しくいふ。それが發車すると間もなく、私の前横に座つて、喃々と話しては接吻する。一組は穩和しいが、一組がはしやぐ。十回二十回と接吻する。何時も女の方から攻勢である。見まいとしても何時迄も顏を横にするとこちらの首が痛む。

少々執拗である。抑も東方君子國の男子を前にして、こはそも何の体たらくか。笑ひも出來ず、怒りも出來す、神色自若たるに努めた。西洋の旅の物憂さは此の種の事項も豫め考慮の一に入れておく必要があるか。

町を出離れると南の方に、昨日上つた山々が一列に居並ぶ。アルプスの觀兵式である。窓から小手をかざして一々指呼し、その精鋭を稱へるのである。

汽車は田舍の村々を過ぎる。牧場ばかりである。橋がある。此國特有の屋根付の橋である。日沒

ルザーンに着く。

食堂へ出て見ると、三人の樂手が奏樂してゐる。面白く聽く。ふと見るとあちらの隅に日本人がゐる。食後その卓へ行つて挨拶すると滿鐵の宇木氏である。その室へ行て互に旅の話をする。

帖場で明日のリギ行の時間をきゝ床に入る。

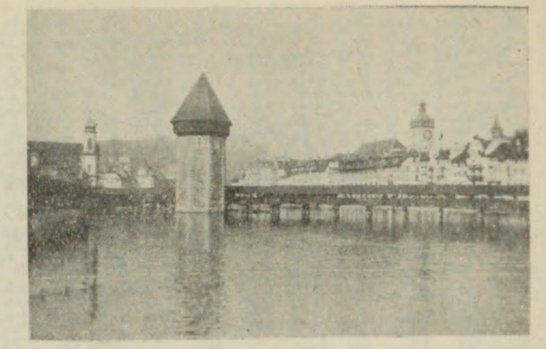
ルツアーン

九月十五日

ルツアーンは、リギ山とピラタ山との間にあつて、スイスの最も美しい湖水とアルプスの連山に面し景色の善い町である。朝食のとき、食堂のマネージャーが、色々話してくれる。

ペスタロジーの話、大戰中、獨佛伊に挾まれた小國として困つたこと、今でも此の町に此の三國の系統の人種が分れて住んでゐるが、不思儀なことに少しのあつれきも無い。學生の能力のある者が、どん〳〵高い學校へゆかれる。此處の郵便配達夫の二人の子が大學を卒業したこと、自分の弟もエンヂニアーであること等を話す。

宿を出て近處の橋の所から、水中に立つ塔を見る。元は、これが燈台でルツアーンといふのであ



ルツアーンの水中塔

つたが今は、それをとつて市の名前にしたといはれてゐる。それに屋根のついた木の橋が架してある。カペル橋といふので、その中には此の國の歴史の繪を百五十四枚かゝげてある。此の橋は一千三百三年に架したそうだ。一方のミウレン橋には三十枚の死の舞踏の繪がかゝつてゐる。

美しい水で、小さい魚がゐる。水鳥をかつてある。魚を食ひ放題に出來るであらう。

それから、湖水に沿うて栗の木の並木のプロメナードがある。大きな實がなつてゐる。枝の剪り樣で上は全く一緒になつて凉しい綠のアーチである。それから、つい近くの山のふもとの、自然石に、二十八呎の死せんとする獅子の彫刻を見る。

「これは一千七百九十二年に、此國の兵士がツィレリーを防禦せんとて佛軍と戰ひ、戰死した八百人の記念碑であるそうな。四方に樹木が生え前は池で、崖の斷面のこの獅子は如何にも悲痛に見える。土産物屋が多い。時間がないので、驛の前の波止場から、リギ行の遊覽船に乘る。

水が透き通つて美しい。白く塗つた船に白十字の旗をかゝげて行き交う。こゝの周圍の山は直立

してゐるから景が珍らしい。一二ケ所寄港してリギに着く。リギは殆どルザーン湖、ツグ湖、ロワルツ湖に包まれた山である。船が美しい停船場につくと、直ぐ、蒸汽機關車のついた登山電車に乘る。そして、リギ、カルトバルドなどを經て眞直に上る。

レールの中央は齒車式になつてゐる。何だか危險な樣であるが、スイスでは嶮い山へ電車を引き上げることは他の國に於ける平地同樣に心得てゐるのであらう。どこにでもその設備が澤山ある。ルツアーンを發して二時間半で頂上に達する。リギ、クルミといふのである。こゝは少し遠距離であるが、アルプスの展望台である。

先日來の、ユングフラウ、アイガー、ベツタルホーンを初めとして一列に多くの雪を頂いた山がよく見える。むしろ、山よりは四方の湖とそれに添う森や町を見下すこと、遠距離まで眺望し得ることがこの〻特徴であらう。

五千九百五尺の此の山上に立つて眺めるに、實に美しい。下の湖水が青い池の樣に小さく見え、チウリツヒの方も遙に見える。眺望に於ては雄大そのものである。

ホテルもあるが、寫眞を寫したり、歩きまはつて、それには入らず、少し下つて一軒の小さい茶店に入る。娘がゐて、板敷の間にテーブルをおき、コーヒとパンを持つて來てくれた。ゆつくり食べて金を拂ふ。五フランの銀貨を机の上に三枚おき忘れて出掛たが、娘が注意してくれた。

余り時間が多いので、歩いて下る。花賣の娘が、紫の花、白の花をブケーにして買へといふ。何とも言はず行き過ぎたが、せめて一〇サンチームでもやればよかつたと後から思ふ。大抵の人は辨當を持つて來て、あそこ〻で開いてゐる。夫婦連れが多い。

下の、リギ、カルトバルト迄下りる。驛長が、リギ、シヤイデツキへ行つて來い、充分時間があるからといふけれども止める。驛の家の六つ位のい〻女の子とその弟が、薪運びをしてゐる。それを手眞似で姉が薪木をか〻へ、弟が鳥の羽根の風車を持つてゐる所を寫眞にとる。

御禮にチヨコレートを分けてやる。三時半にぞろ〳〵大勢集つてくる。頂上から來た電車に乘つて下る。疲れてゐるのでうと〳〵眠る。湖岸の終点へつくと、栗の並木で庭は全く日蔭になつて涼しい。茶亭でコーヒをのむ。湖水の夕日の反射が、木の葉を下から光らす。やがて、フルウエンの方から船が來る。フルウエンの向ふにはウキリアムテルのプラツツがあるのだが、それに詣でる時間もない。船に乘る。

見かへれば斷崖が岸に迫つて、その奥には雪のアルプスがほの見

リギ山上にて

えて白鷺の様な遊覽船がスピードを早めて行き交う。船と船とが行合うと乘客は互にハンケチを振つつて挨拶をする。

六時に船がつくと宿へ歸つて直ぐ荷物をもつて驛へ行く。チウリツヒへ行くのである。乘込むと少し時間がある。日記をかく。前へ座つた二人のスイス人が字を縱に書くのを不思儀に見る。發車するとやがて日が暮れる。チウリツヒの町はチウリツヒの湖水に近く、丘をなして、町の灯が窓に美しい。

驛へつくとすぐ前の、ホテルナチヨナールに入る。こゝでも直ぐに、マネージヤーは一番に十五フラン位の室をすゝめる。私は今晩はランニングウヲーターは、いらないからといつて六フランのにする。此處は一流であるから高い。

安い部屋は洗面器と壺に水を入れておいてあるのである。ランニングウヲーターは冷溫水が出て便利で隨つて設備もよい。風呂付は十五フランである。室はよくないがソーフアもある。泊ると朝飯丈ならば、別に一割五分申受ける。宿泊と朝飯と晝食か夜食をすれば一割三分である（三日以內宿泊）と掲示してある。成程ヨーロツパは宿泊料丈は割合安く、二圓から三圓位で結構である。

所が食事は高い。いやだけれども食堂へ行く。所が、もう八時ですから定食はありません。定食は七時から八時迄ですといつて、アラカートで注文させる。ポークカツレツに、サラダをつけたの

とビール一本に果物で十フランである。一皿二圓のポークカツレツである。スイスは物價が高い。反感が起る。殊に況んや大分旅行をしてポケツトが淋しくなりかけておるのであるから。

食後近處をあるく。例によつて、どんな店でものぞき込んで品物を見る。相當に高い。一寸辻に植木の一角がある。夜目にそれと知れた、ペスタロジーの銅像である、星は暗い。

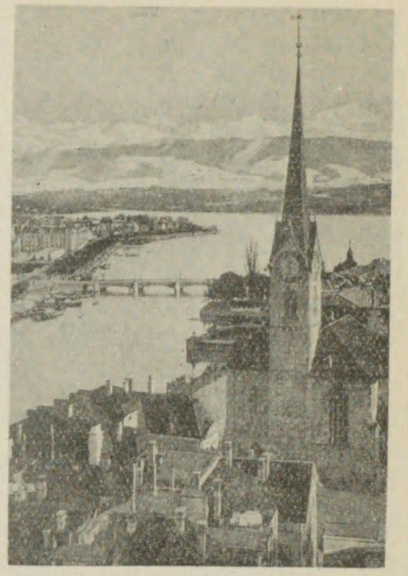
然し彼が粗衣をまとうて貧兒を愛撫してゐるこの銅像は世界の幾万の教育者の理想である。彼の學理と彼の實際、殊に彼が貧苦の中に兒童愛に燃へた精神は永久に忘られぬ偉大さと光輝を放つのである。宿に歸つて床に入る、眠られないで一寸困つた。

チウリツヒ

九月十六日

食事をしてまだ早いが昨夜のブラツツへ行く。その通りは目抜であるが兩側に、果物野菜花などの市が立つてゐる。二三丁にわたつてゐる。こんな光景を見るのも面白い。國民の眞の姿が分る。老幼男女が夫々買物をしてゐる。

ペスタロジーの姿を見直す。日はどんより曇つてゐるが、入念に撮影する。それから、ウラニア



チユーリヒ

ると、金曜は午後一時に開館とある。別の入口に少女が二名ゐたのでそれに尋ねて、二階のジヤツコウ氏方へ行く。夫人が出て來る。要領を得ぬ。その内に主人が寢室から出て來て、ラートハウスケーのペスタロジ圖書館へ行けといふ。

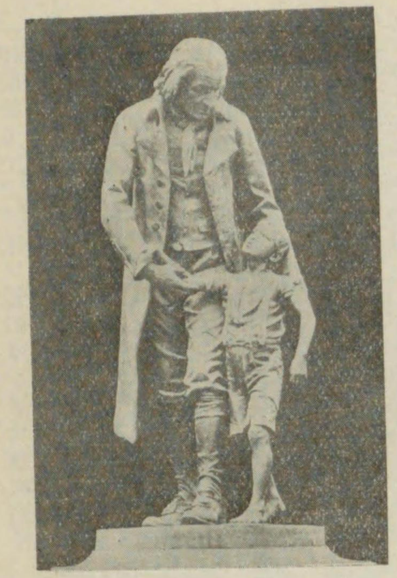
雨が降り出したので電車で又河に添うて逆戻りをして、三階の圖書館へ行く。只此れは十數ケ所にあるペスタロジー圖書館の一つであつて格別、參考になるものはない。そこを出て湖水の方にゆくと左手に大きな本屋がある。そこへ入て、ペスタロジーの肖像を見せてもらう。兒童教育畫一枚と銅像の繪を二枚十圓程もした。それを日本へ宛て書留で送つてもらうことにする。その本屋から橋の袂の彼の博物館へゆく。

川に添うた家である。所が入口に掲示がして閉館中である。馬方が前の家から木を運び出して車につんでゐる。下の番人に聞くと、ベツケンストラツセの方へ行けといふ。仕方がないから、その前のウラニア橋を渡る、美しく水が流れてゐる。

ベツケンストラツセのビブリオテークを尋ね

出ると、橋がある。湖水と河との堺である。成程ペスタロジーはチウリツヒが好きであつた丈美しい景色である。タウンホトルがある。釣をたれてゐる。ボートが浮んでゐる。

又反對の河岸に添うて、朝行つたペスタロジ博物館の下を通つて、有名な工科大學を丘に見つゝ驛へ歸る。驛の後にミウジアムがあるが時間がない。宿で支拂をしておいて、驛の三等食堂で午食をする。恰度一時前になつたから、ベツケンストラツセのペスタロジー圖書館前へ急いで行つてみると老婆が來て戸を明けた。此處にも何にもない。圖書類丈である。



ペスタロンチの像

失望した。今朝から二三回あちこち往來して要領を得ぬ。まあ然し、ペスタロージーの銅像や博物館の跡を見た丈で急ぐ旅人には充分だと思つて三十九分の發車に間に合ふ爲大急ぎで宿に歸り、驛へかけつける。朝一ポンド兩替して又畫一ポンド替へる。スイスは金が早く減る。發車すると牧場と林檎の赤く實つた木の多い間をミユンヘンに進む。林檎は澤山實つてゐる。

ロマンショウは湖岸にあつて、こゝで汽車を下りて聯絡船に乘る。鷗が後から追うて來る。

一時間餘りで、ドイツ領のリンドナウに着く。稅關の檢査がある。旅券は調べなかつた。又汽車に乘る。同室の人がミュンヘン畫報をもつてゐる。よく見ると開卷第一頁に、日本人のブラジル移民六万人と題して植民地の繪をのせてゐる。ドイツは餘程日本に注意してゐる。

昨日のデイリーメールを讀む。水曜日に熊本縣から九州一帶及東京にかけて大暴風雨があつて、無宿の者六萬人出來たと報じてゐる。それが此の田舍のスイスで、金曜日に新聞で讀み得るのである。嘸大阪の方も荒れたであらうと思ふ。水曜日は英國から大陸も相當に降つたが偶然の一致か、誠に日本はよく荒れる國である。

食堂車で夕食をすまして、とろりと眠るとミュンヘンにつく。教へられてゐた、シュワーツアーアドラーホテルへ行く。昨夜お越かと思つてゐましたとて、數通の手紙をくれる。ビールを飲んで手紙をよむ。伯林の人々からである。

ミュンヘン

九月十七日

疲れたのと、ミュンヘンへ來た。大陸の旅行は略終つたといふ氣持で起きられぬ。初めて、室へ

朝食をとりよせて外國人の樣にベッドの中で喰ふ。

十時起きて無精々々毛剃をして、伯林から送つてくれたといふスーツケースの有所を聞合してもらつたが分らない。それはそれとして郵便局へ電車で行く。英國から冬服を洗濯して送つてくれてあるのをとるが爲である。引換證で小包を受取り別の係官の前で開けて見せる。古いのであるから早速パスする。他の人は量目をはかつて課稅せられてゐる人もあつた。

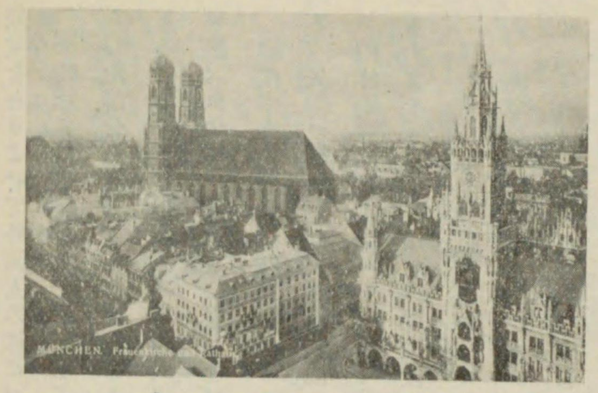
繪はがきを買つて宿に歸る。四階のダブルベッドの部屋から一階へ移轉してあつた。午食をする。矢張、スーツケースは何處にあるか分らぬ。

伯林の三浦君の處へ飛行便で聞合す。明日は日曜だから月曜の朝でないと、着いて居ると思はれるオフイスへも行けない。午後、驛前から、觀光自動車にのる。

見物するによい町である。カールプラツツのドイツ銀行、ゲーテ像、博物館、マキシミランプラツ、圖書館、博物館、ナシヨナルミュジアム、ドイツミウジアムへ行く。このドイツミュジアムは仲々面白い陳列があるから明日再び來るつもりである。大きな公園、川、橋何れも美しく、凱旋塔イングリシユガーヅン、貴族町、工藝學校、新美術館、アカデミー林業の大學、音樂學校を見て、ルイポルドカフエーへ入る、古いカフエーで彫刻壁畫の見るべきものが多い。こゝで同行の支那學生とコーヒをのむ。

次にシラーの像、取引所、オベリスク、カロリナプラツ、古い繪畫館、工藝學校を經てクーニヒプラツへ出る。三方にアテネを思はす建築があり有名な所である。

車は進んで植物大學、裁判所、エキシビシヨンパークへ出る。澤山の見世物や、キヤラバンがある。そこにババリアのナシヨナルモニウメントがある隨分大きなものである。



ミユンヘン

病院町を通る。ミユンヘンの新聞社の前を經て、古い寺やタウンホールを見て大雨の中に見物を終つた。

しばらく、支那の學生と雨の止むのを待つて、ミユンヘン第一のビアハウスである所のホフブロイハウスへ行く。大きなホールが三つあつて三四千人位入場してゐた。

只見る一面に人々が卓をかこんで、一リツトル入りの大きなコツプで呑んでゐる。煙は濛々と上り、見渡す限り下級中級の男女が賑い土間で、カルタをしたり、歌をうたつたりして飲んでゐる。隨分よくのむ者である。

私らは此の光景を見た丈で逃げ出さうとしてゐると、入口の

近くの卓の連中が、來て飲めといふ、ビールはミユンヘンが本場である。

七人ゐる卓へ行く。一人は大分醉つてゐる。色々話す。ビスマーク顏、ストレーゼマン顏の男の連中なれど極めて無邪氣である。一リツトル入をもらつて飲む。仲々重い。味はよい。

樂隊が奏樂する。外のレストランの樣な生優しいのでなくて、混然雜然を極めてゐる。ソーセジを賣りに來る。その醉つた男は世界戰爭の話をして、七日間ルーマニアの戰線でパン一切で戰つたことを繰りかへす。話の間に嗅煙草を鼻に入れる。その卓全体の無邪氣和樂の狀態に釣り込まれ支那人も私も杯を傾ける。仲々半分も飲めない。

ミユンヘンの風俗

色々話してゐる內に、こちらも氣が大きくなり、卓の連中にヘレスを四杯とヅンケルを三杯と奢つてやると皆喜んで、杯を擧げて健康を祝してくれる。さきの醉つた男は立つて、日獨親善の演說を初める。それが中途で口笛の歌になる。他愛のないことである。

こゝにドイツ人の眞面目がある。彼等殊に南方ドイツ人は國粹黨が多いから愛國の精神が燃

えてゐる。そのことを繰り返し〳〵話す。此の町には帽に鳥の羽根をさした男がよく見える。ババリアの男である。然し、ビールの滿をひく調子は面白い。泡が口ヒゲにつく。縞のハンケチでふく。今朝も樂隊が喧しく聞へるので出て見ると、大きな自動車數臺に娘子軍と樂隊と男子連がのつてワグナーのビールの宣傳をやつてゐた。皆大きなコップを持つて、歌を歌つては飲んで進むのである。

その一臺に豚の子を三四疋のせて、合間々々に、ギアー〳〵鳴かす。見物ははやす。何かしらドイツの古い、昔風な味があつて、大まかで、間が抜けて、こせづかぬ所が面白かつた。このビール連中とは惜しい別れをつげる。六つかしい顔の男が相格をくずして握手をして、又來いといふ。下層階級との國民外交をやつたつもりで宿へ引上る。

夕方食堂へ出ると日本人が三人ゐるのでその食卓へ行く。同船で來歐した秋田鑛專の教授下川氏大阪高等學校及旅順工科學堂の教授である。共に夕食をする。恰度今日から此の町のオクトバーフエストが始まつたのである。地方の祭である。食後、公園へ散歩する。

澤山な人出である。書見た見世物、屋臺店、射的、ブランコ等が賑つてゐる。その間に、ビールの飲み場がある。二三千人位入られるのが數軒ある。その一つ一つを見る。入口に腸詰パン、赤大根などを賣つてゐる。

數千の人々がビールを飲んでゐる。高い所で樂隊を奏する。私等も卓の一つに座した。青い服をきたミュンヘンの田舍娘に粧うた女が一リツター入りのビールコップを八ツ位運んで來る。樂隊は半ズボンで鳥の羽根のついた帽を着て、面白可笑しく奏する。大勢がそれに和す。子供がタクトをとる。皆が腰掛の上に上つて抱き合つて歌う。それに喧嘩一つ起らぬ。中には泥醉してゐる者もある。如何にもこゝならでは見られぬ情景である。これが一週間續くそうである。此の土地の人は四杯はのまないとミュンヘンの人間といへないそうである。

十時半が來ると皆出て行く。歸り道に互に知るも知らぬも握手をしたり歌ひあつたり面白い風俗である。私の宿の隣に日本人好きの日本人婆さんが住んでゐるそうだ。

此の町は有名なケルシセンスタイナー老教授が住んでゐて、學理は勿論、殊に此の町の補習教育は彼の理想案によつて出來てゐるそうだ。ウェイター、書記、散髮屋、煙突掃除等細かく專門的に補習教育をやるそうである。實に老教授は理論と實際とを徹底さす人である。今は旅行中不在であるといふ。

九月十八日

朝食後電車でドイツミウジアムに行く。早大勢見學の人々が詰めかけてゐる。こゝは各種の工業

の狀態を新舊比較して實物通りにしてあるので有名である。その規模の大きいこと見學者に了解し易くしたこと等に於て世界に類がないのである。

先づ鑛山の狀態を新舊兩方の實地の通りにしてある。大きな地底、採掘等鑛山の中へ入つてゐるのと同じ心持がする。製鐵、石炭採掘、岩鹽等を大きな室を惜し氣もなく用ひて細大洩らさず實物通りにこしらへてある。身自ら深い坑道の中を進んで順々にそのプロセスを見るやうにしてある。そこへ番人が來て說明してくれる。鑛抗內の瓦斯及空氣を換へるのでも、ボタン一つ押せば大きな音をたてゝ動く。鐵工所、器械類、旋盤、風車なども横に煽風機があつてその風で、風車が廻る狀態が分る。

乘物の部は馬車、人力車、橇、サイクル、昔の自轉車、自動車、大きな機關車の斷面、電車、市街道路の斷面、ケーブルカー、橋梁、ワイロツプ、トンネル作業、高架鐵道、船舶、築港、築堤、港灣、地質、倉庫、煙臺、飛行機、傳書鳩、風船、時辰器、測量機、電氣、磁石、エキス光線、電話、ラヂオ、蓄音機、光學、望遠鏡、幻燈、樂器、ガラス、藥品染色、食料等最新の發明品其他を大きな建物全部を用ひて展覽してある。これを見るに四週間かゝり、歩くと幾哩もあるそうで到底見つくす譯にゆかない。

殊に陳列法の巧なこと、見學の順序の正しいこと、手を觸れて實驗してよいこと、大きな場所に

思ひ切り金と頭腦を費して獨逸の獨逸たる所以を示してあるには驚いた。

余り疲れたので正午前引上げて、宿に歸る。恰度、お祭の行列で、樂隊が一町おきに一組宛二三十組あり、男が大部分で馬車には女子供が女神に扮したり旗を澤山立て、男女共に胸や帽に花を飾り二萬人位の行列である。見物は山を築き、花を投げるもの叫びかはす者賑やかなことである。

如何にも長い行列である。それが公園へ乘込む。樂隊と行列の好きな國民であると思ふ。午飯をたべて室へ入り日記をかく。

午後三時過になつても曇つた空の何處からか高い細い笛の旋律がひねもす聞へてくる。御祭である。飲み祭かも知らん。三月には特にその爲にビールを作るのである。ミュンヘンの空が樂の音に滿ちてゐる。市民は子供らしく無邪氣にビールの杯をあげて喜んでゐる。田舍からも澤山の人出らしい。

郵便局へ引換小包をとりにゆく。夕方ラヂオを聞く。オペラである。夕食後早く休む。大勢客がとまつてゐる。食堂へ消防手が義金を集めに來た。今日七八臺市中を練り廻つてゐた。多く與へて花の徽章をもらう。愛嬌のあるウェイターが氣持よくサーブする。

ハイデルベルヒ

九月十九日

一昨日來懸案の伯林から送つてくれたスーツケースは電話で聞くと、來てゐるから使の者に旅券を持たしてとりに來いといふ。安神した。驛へ行つて兩替する。寫眞屋で現像を受取る。重いけれどミュンヘンビールのコップを求める。澤山買いたいがとても持てぬ。人形のマークと、HBのマークがある。蓋付が此處の特長である。宿で無理矢理にスーツケースに何角詰込む。支拂のとき、以前に十五日頃行くから荷物を受とつておいてくれとはがきを出しておいたが、それを宿の方では室のレザーブと解釋して實際一室あけて待つたらしい。それで、宿らないのに四マークつけて、支拂つてくれといふ。支拂つてやつた。ポーターに荷を持たし大急ぎで正午の汽車にのる。

昨日の午後からの雨はしばらく止んだが悪い天氣である。ウルム、スツツガルトを經る。スツツガルトは下車の豫定であつたが田舍の町ではあり、天氣は悪し、先を急いだ。牧場ばかりである。所が車掌が此の汽車はハイデルベルヒへ行かない。次の驛で乘替だといふので、淋しい驛で大急ぎで親切な西洋人にスーツケースを下ろしてもらうて、プラットに立つと、そこの驛員が、此處とは

違ふといふ。又大急ぎで、ハンドバッグ、スーツケースと折鞄と本の包とを汽車の廊下へほり込む。何の事だ。そして次の驛で下車すると、そこが、ハイデルベルヒであるのである。車掌はマンハイム行と思つたのであらう。

シロスホテルの自動車にて暗い町を丘の上へ走りホテルへ行く。食堂へ行くと下のネツカの河が見え眺望がよい。此の町はネツカが峽谷の間からラインの平野に流れ出した所で、平野と山との堺目である。食堂を半分に仕切つてダンスをしてゐる。山の中のホテルであるが踊好きだからであらう。このホテルは立派である室代は六マーク。

九月二十日

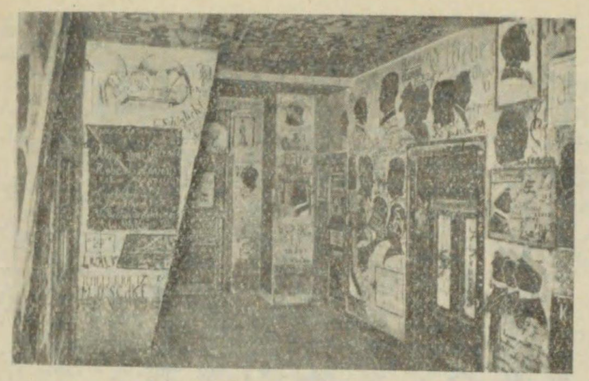
朝食後ミュンヘンのホテルへ、上靴を忘れたので一マーク封入して巴里大使館宛送つてくれる様賴む。上靴はベッドの下に入れるから忘れ易い。支拂をして、荷物は三時に停車場へ送る樣賴み、老樹鬱蒼たる丘の間を歩いて城へゆく。

この城は河上三百三十呎にあつて、一千百九十五年に築いて大名のキングの住んだ所である。所が一千六百九十三年にフランスの大將メラが退軍の際此の市を燒き城を爆發したので、ドイツに於ける大なる廢墟である。廢墟といつても嚴丈な石造の櫓の部分が大きく破壞されて、屋根もない所

があるが、丘の上に赤茶の大きな建物で、眺望雄大、古風といふ感が起る。然し中央の建物には立派な物が澤山ある。下の綠樹とネツカの河、それに渡した彫刻のある橋と町を見下し、要害堅固である。大きく割れて半ばくずれた城の一部には蔦が匐うて、古い歴史を語る。朝風涼しく二人三人靜に低徊してゐる。此の中に五万ガロンのブドー酒の入るツンといふ樽があるので有名である。

こゝを見て丘を下る。女學生の一團がさつさと見物に上つてくる。下でルパートカローラ大學を訪ふ。

建物は立派でないが、ドイツ最古の大學で、又有名なのである。これは一千三百八十六年にルパートカローラが建設したので、神學、法學、醫學、哲學科がある。番人に案内してもらつて、公堂を見る。ブンゼン、ヘルムホルツ、シヤシホフなど有名な人の名を左右に刻んである。正面にはローマの科學がドイツへ入るの光景を繪にしてある。ホープレシトの像があり、百三十八年前の校旗がかゝげてある。學生は三千人内女子三百人ある。



大學牢屋内の落書

この由緒ある公堂を一巡して、學校の牢屋を見る。四室あつて、パレス、ローアル、ソリツチウド、サンスーシー、ビラトラルなど名附けてある。學生が惡い事をすると警官が學校へ通告してこゝへ入れるのである。面白いのは室や廊下の壁といはず天井といはず樂書が何千とある。それは入牢した者がかいたのである。巡査に牢屋へ入れられる圖、猫の樣なのもあり大抵は自畫像のシルエツトである。詩もかいてある。後年米國の大使になつたバーンスタフ氏のや、英國大使になつたスターマ氏のも、三日間とか八日間とかかいてある。ビスマルクの子も寫眞が二つある。入牢したのである。米國人のもある。ホノルルのジョセフといふのもある。英人のフイリツプは八日間。皆墨やペンキやローソクの煙で書いたもので實に澤山ある。

部屋は板敷でベツドが一つある。ドイツ學生生活の一面が分つて面白い。今では立派な人もあるであらう。規則に從う所が宜しい。牢屋の名をポツダムのサンスシー宮殿の名をとつたり、王宮と稱したりする所にユーモアがある。旅行者の是非一見する所である。その繪はがきを買つて禮をやり、町を歩く。少さい町である。寫眞屋に學生の寫眞が多い。此の國の大學生は海軍帽の赤や青のを着てゐるのもおかしい。ビール樽に腰かけて寫してゐる者、大きなコツプで、プロジツトをしてゐるのを寫してゐるのも面白い。トボ〳〵と歩くと此の町は見てしまつた。

驛へ行つて、シロスホテルの案内に三時の筈であつたが、見てしまつたから、マンハイムへ行く

から、荷物を早く頼むといふと、ホテルへ電話をかけ、自動車がとりにかへつてくれて十一時廿四分の汽車に澤山の荷物をつみ込んでくれた。室に只一人である。腸詰の煮たてと梨二つパン二つを買つて食する。半時間もたゝぬ中にマンハイムへ着く。ホテル、ナチヨナルに入る。

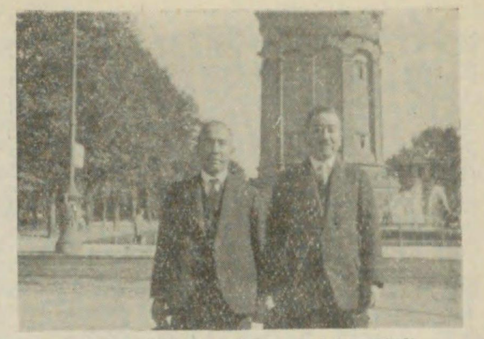
直ぐ近處の小學校にゆく。校長は不在で圖畫教室其他を見せてもらう。一時になつて放課時間なので兒童がはや歸宅する。先生も鞄を持て一緒に出て行く。

フリードリツヒプラツツあたり街路整然、立派なものである。道幅も廣く、並木、處々の廣場建築等近代都市である。人口は二十一万である。

それから美術館を一寸見てゆくと、教會の前に大勢人が集つてゐる。見れば、中から新婚の夫婦が出て來る。數人の友人が賀びの握手をしてゐる。やがて自動車で何處にか去る。見物は矢張女が多い。

電車で、ラインに架した橋を見にゆく。極めて大きい橋ではないが有名な橋で、兵士が番をしてゐる。ラインが濁つて流れて蒸汽船が浮ぶ。對岸には工場がある。こちらは公園である。一旦宿に歸る。

夕食後目抜通りを散歩してゐると偶然久保田權四郎氏に遇つた。實は先日來渡歐されたことを聞いて何處かで御目にかゝれるか知らんと氣をもんでゐた際であるので奇遇を喜び、共にパークホテ



久保田權四郎氏（向つて左）と著者

ルに至り種々話をした。

氏は技師二名とシベリアから來られたが、露國の窮乏狀態は甚しい。停車場の土間に汚い窮民がごろ〳〵して居り、町を歩いても、女などで貧乏な爲に安價に媚を呈するもの多く、店はあれども品物は風呂敷に一負位しかなきもの多く、實に一般に困り居ることは甚しい。口に共產を說くの日本人に一度あの現狀を見せたら如何だらうとの話であつた。其他、英獨の鐵工業を視察するに日本も決して劣つて居らず、只市場が狹いのが欠点である。こちらでは、ずく鐵二十五圓で仕入れて製品を百圓に賣るに對し、日本はずく鐵を五十圓に仕入れて九十圓に賣つてゐる。差引此の差額丈日本が勉强してゐる譯である。つまり、マーケツトがせまい丈け苦心が多いのである。

十時半頃歸宿。

マンハイム

九月二十一日

今日は八時半に久保田氏の宿を訪ね共に工場を見學する。工場はマンハイム第一の製作所でドイツでも有名な工場である。ハインリツヒ、ランツ工場といひ、プレシングマシーンと、ツラクターを製作してゐる。隨分尨大な面積をとり、棟數數十、職工四千人、職員八百人で、元は一八五八年にハインリツヒランツ氏が自分と職工二人で初めたものである。

從來はハインリツヒ家のであつたが、少數の親族を交へ株式組織にしてゐる。先づ技師長兼專務に遇つて、久保田氏一行が、パテントの契約の話をきく。それから、私一人、案内してもらつて見る。事務員がどの部屋にも急がしく執務してゐる。

木工部、鑄物部、發電部、ツラクター部、プレスマシン部等實に廣大である。一々器械によつてやつてゐる。一通り見るのに四五時間はかゝるのを驅足的に見せてもらう。一々分業にして職工はよく働く。

實に大きな仕掛で、然も此の不況時にどし〳〵製作して、プレシングマシンなど一日二十五臺位

作る。その一臺は二千八百圓で、構内より工場の汽鑵車で毎日運び出す。南米、アフリカ、オーストリア其他世界各地へ出す。實に盛なものである。

職工は爭議もなく一日平均八マーク位の賃銀で八九時間から十時間働く。土曜は午後二時迄でスポーツもやらせ、病院もある。共同購賣はない。十一時になると二十分間休んで、その間に、パンと瓶入のビールを水代りに午食してゐる。老人もゐる。

精巧な器械で一々自働的にやつてゐるのもある。木工部丈でも何千坪の廣さがある。ペンキ塗などは、噴霧器でやつてゐる。

ツラクター部も順々に細部から組立て、クレーンで次へ送る。兩方に研究所の大きなのがある。汗まみれになつてよく働く。此の町は此の工場でもつてゐる。否、ドイツの田舍の都市は鐵工業が中心になつて發達してゐるといつてよい。ドイツでも有數の工場である。

大汗をかいて一通り見せてもらう。專門外であるから充分分らないけれど如何にドイツが戰後の工業に於ても、英國などの工場の或部分〳〵は休業してゐるに拘はらず、ドイツの隆昌なることは注目すべきである。

支配人は久保田氏に自分の息子が來年三月米國の大學を卒業するから、久保田氏の店に暫時使つてくれないかと賴んでゐた。久保田氏は技師ならばよいが普通の商業事務員は目下入らないから三

井へでも世話しようといふと非常に喜んでゐた。

工場の自動車で送られ、市の中心の民衆食堂へ行く。女學生の一團が午食してゐる。無論ビールを飲んでゐる。午后宿へ歸り、今日は非常に暑く疲れてゐる。夕方、久保田氏一行は工場で契約書の相談をして歸途ホテルへ立寄する。一緒に出て、フリードリツヒプラツの食堂で夕食。雞が甘かつた。ビールも仲々甘い。五人が面白い話をして活動見物にゆく。

十時過終つて、久保田氏一行と愈々分れ宿に歸る。明朝ベルダン行の汽車の時間をきゝに行く。片手のない、驛の世話役が色々世話してくれるから、五〇ペンニヒやり、ビール一杯買うてやると大喜である。兩替を出札所でする。實は五ポンド札で一ポンド半丈ドイツの金にしたかつたが、先方は英貨をもつて居らず、もう今日、ドイツの金の相場もよいから、皆かへておいて明日フランスのに兩替しても、英貨から代へるのと同樣だといはれ、いらぬけれども五磅かへる。

午食後、久保田氏と廣場で私のカメラで寫眞をとる。日本では彼岸だなど、話し合ふ。

九月二十二日

早く起きて用意し驛へ行く。荷物は宿のポーターが持つて來てくれる。余り多くのつてゐない。八時五十分發車。マンハイムの町と、ラインとに分れを告げる。大分西へ行くに從ひ、牧場がなく

なり、畑が多い。馬鈴薯の收穫をしてゐる。ホムバーグを過ぎると、車中旅券調べと稅關が來る。煙草を持てゐないかときいた丈で今迄では一番簡單に、カバンにさわりもせず、さつさと濟む。實はかみそりなどを十三四本持つてゐたのであるが調べもせぬ。

サーブルツケンで乘替る。驛で待合す間に食事をする。十二時前である。堂のメニウはフランでかいてあるがマークと兩方用ひる。乘込んでメツツに行く二時間程うと〳〵眠る。

メツツで又乘替である。此の間二時間余り驛で待たされる。メツツはアルサスローレンと共に佛と獨とが奪ひ合をしてゐる町である。大きな寺院などもある。工場もある。

四時半に漸く、ベルダン行が此處から發車するので、乘込む。余り後に乘つたので、コンフランス、ヤーリーで前の方の箱にのらぬといかぬといはれ驛員に手傳つてもらつて移る。スーツケース一つ增した丈で面倒である。ミュンヘンから大きい方を巴里に送つてよいが稅關があるので一緒に持て來たら面倒である。もう平野になつて見渡す限り廣い。屋根のない家のくずれたのがある。今のコンフランス、ヤーリーなど田舍に似合はず線路が驛に十數線ある。戰時中活動の後であらう。小山のトンネルをこすと盆地にベルダンの町が美しく見える。驛には米國の元從軍してゐた者及家族一千人が佛國訪問した際なので大勢見物に來て居る。自動車で、コトク、ハーヂの宿につく。二十二法。夕食後散歩する。酒店が多く勞働者がのんでゐる。

空は暗い。淋しい町。寺の鐘がほの寒く身にしみる。

九月二十三日

八時半ベルダン見物の自動車にのる。運河の橋をこえると、三千人を葬つたフランス兵の墓地がある。右に飛行隊のあつた丘を望む。此の邊ベルダンの町の東北に一休の丘が連つて丘の上は三四丁の幅の起伏になつて、此の附近の平原では非常に好い戰場である。なだらかな丘は遠く續き、巴里を防禦する第一線としては此處を措いて他にはない。だから佛軍が此處を死守したのも無理のないことゝ思ふ。

十年前には此のあたりは林であつたのであるが、激戰の爲全部禿山になつたといふ。今日では灌木が茂つて凄慘の氣が少い。空が曇つて風は寒い。乃ち「秋風丘に寒くベルダン十年の夢」と吟じた。此の丘から見ると遙に遠方を見渡すことが出來る。十年前は如何に肉彈と肉彈との阿鼻叫喚の血戰場であつたらう。

屍は屍を築き、たゞ見る砲煙濛々の間に祖國に殉する大勇猛心の武夫が見る見る何百何千何萬と倒れて行つたのであるから、その光景はとても想像出來得べきでない。

タバントンネルを見る。一九一六年九月此の地下に佛軍一千二百人が埋つたのである。ボー砲臺

も丘の上にある。此等の砲臺は實に近距離で十分間歩けば屆く所であるが、その奪略に幾萬の生命の犧牲を要したのである。

それから東の端のドーモン砲臺にゆく。外には新に堀り出した小銃數十挺を積んである。こゝは一九一六年に五ケ月間佛軍が占領してゐたのを同年十一月に佛軍が奪回した所である。

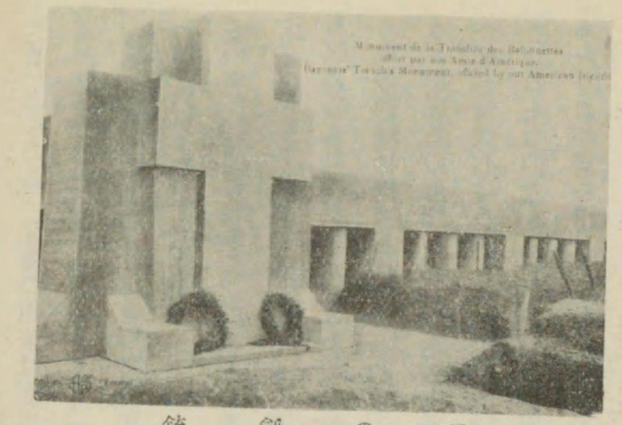
兵士に案内せられて、砲臺内に入る。當時用ひたガスマスク、電話、司令部、牢屋、病室等をカンテラに照らされて眺めつゝ歩く。地下の坑道は上下左右に續いて分り難い。中に泉がある。とても飲める水ではないが、一日に一杯丈は飲むことを許したさうである。

中の薄暗い隅に形ばかりの祭壇がある。これほど拙い、これ程みにくい祭壇が歐洲の何處にあらう。然しこの岩窟の隅にある。この祭壇こそ最も多數の最も貴き祖國愛の靈魂をまつゝてあると思へば、鬼哭しゆう〳〵の感がある。それから暫く後がへりする。

丘の上の凹地をはさんで兩軍が對峙したその丘は大聲で話し合ふことの出來る距離である。此のあたりの平野の中に立つ丘、誠に無雙の絶景として山遊びの場所ではあるが、此處が祖國の興亡のつながる唯一の線として死守に力めた所である。

スービル砲臺も少しはなれた所にある。こゝでドイツ軍が强襲を試み一日に六萬人戰死した所で死せんとする獅子のモニウメントがある。その獅子のあはれなる哉。

こゝに百五十軒農家があつたが、皆燒けたそうである。一面の岡で、砲丸の落ちた所は凹んで草は青い。以前此のあたりは焦土であつたのであるといふが、十年の夢は大分悲慘を掩はんとしてゐる。ドーモンの丘に行くと、佛軍八千人の墓がある。白い十字架が秋風に冷い。白い十字架は赤土の岡に淋しくうなだれてゐる。皆悲しさうである。永遠に泣いてゐる。



銃剣の丘

丘の上には高い記念碑が立つてゐる。此邊で一番大きい此の記念碑はまだ增築中である。嚴丈な新しい型のモニウメントである。三十二萬の無名戰死者を祀るそうである。中に美しいチャペルがある。大きな勝利の鐘をこしらへてある。それから、フランスのオスラー大將戰死の小さい堂に詣でる。死んだ人の寫眞が多い。皆立派な人だ。

廣い岡だ。美しい丘だ。然し十年の前は如何に凄かつたろう。大分高い岡である。世界の涙で淸めた丘である。永遠に深い歎きの丘だ。

それから、銃劍が丘といふのがある。こゝでは、四十四人

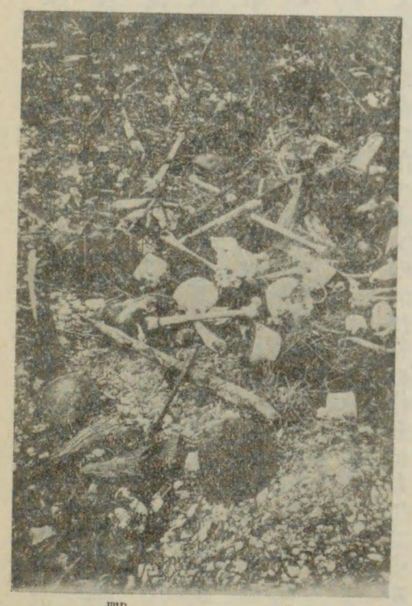
の佛兵が、銃に着劍して突擊を待つてゐる、塹壕內で砲丸に潰され生き埋めになつたが、劍の先丈が地上に出てゐる。その上に立派な廊下の樣なモニウメントをこしらへてあるが、その下から、銃劍の先が見える。

それらの兵士の死体は銃を持つて立つた儘、護國の鬼となつてそこに永久に禮拜されてゐるので名狀し難い感に打たれる。その横に二人の兵士の銃口が地上に見えてゐた。

吾等は思はず頭を下げて拜したのである。そこから丘を下る。丘の間にも激戰はあつた。ビシーといふ村を見る。皆こはれて新に出來た村である。フランス兵四千の墓がある。

そこから、ベルダンの町にかへる。ミューズの河につながる、運河の水は青い。そのほとりの並木と共に美しい。

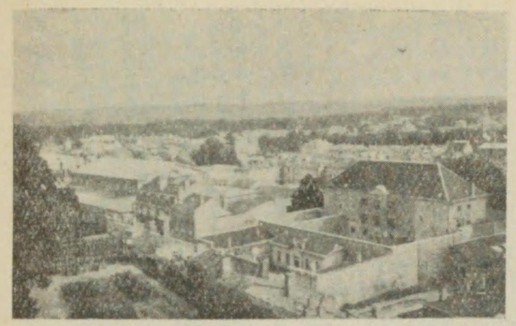
ベルダンの驛の前には、一八七〇年の戰死者の記念碑がある。午食後町をあるいて、後の丘のカシドラルに上る。敵の砲擊でガラスは破れ「危險立入るべからず」の札がある。立派な寺である。



戰跡

その横のパレスも訪ふ人もなく、破れかけてゐる。大分古い寺であるが、獨軍にはよい標的となつたのであらう。破れかけた廻廊に立つて町を見下すと、今は平和であるが、家の屋根の瓦は新しく美しい。その東にあたつて、丘が一帶連續して閑雲悠々としてゐて雞犬の聲も平和だ。

下へ下りると、大きな粗末な建物の中で米人の參拜團に午食を出してゐる。それを町の汚い男女が見てゐる。二時に宿のタキシーで驛へ送られ、巴里行にのる。



ベルダンの町

車中、巴里の日本人會の清原氏と大同電氣支配人木村氏に會して席があるにも拘はらず巴里迄立話をつづける。

畑が多い。大激戰のあつたマーンの河は帶の樣な流れであるが世界人類の運命の河であつたのだ。

その東に丘がある。巴里迄四十分の距離で、こゝで佛軍が死守した。

巴里につくと大雨であるが三人自動車で、日本人くらぶの横のホテルダーマイレに投じて直ぐクラブへ行き、うなぎ、とーふ、かやくなべなどで夕飯を食ふ。戸祭氏、阿邊氏などと話してかへる。宿に、須藤氏が居り、又話に實が入り十二時入床。

九月二十四日

疲れて九時起床。此處は食堂がないので朝飯を省き、エトワールへ出て、タキシーで、大使館へゆく。九月初めに內親王御降誕の旨掲示で初めて知る。手紙はみな、伯林倫敦へ行つたと見えて餘り多くない。數通受取る。

メトロで、コンコルドへ出る。仲々美しい。矢張り巴里は美しい町だと思ふ。附近で朝午の二食を一緒にして、徒步であちこち廻り、一旦宿に歸る。須藤君夫婦と日本人くらぶへ行き、二君は刺身にうなどん、自分はそーめんを一寸食べて、百貨店ラフアエットで買物をする。安くない。

それから、パラストへ行つたが、今晩の切符は惡い場所しかないので、モンマルトのヂウモンといふ第一の寄席へ行つて六時過に切符を買ひ、宿に歸り日記をかき、夕食を日本人倶樂部でする。大阪市電の吉川氏に遇ふ。スエーデンで一緒に旅行した人で久濶を叙す。

かきのどて燒、ゑびの貝足煮など、すつかり日本氣分になつて九時半ヂウモンに行く。澤山の人である。矢張り華やかな、只美々しく衣裳を飾り、あつといはす仕組である。美女數十人が目もあやなる衣裳をつけて、ぞろ〳〵と恰度都踊りの樣なものである。

それが千變萬化の趣向で殊にスターとなると、一寸一分位引籠むと直ぐ別の服を着替て出て來るといふ風に、藝よりも美貌と衣裳と電氣照明と背景で客をよぶのである。

然し中に、テノールで甘いのがあつた。この女優は終始出演してよく活動した。一寸感心したのは、スケツチ劇である。

シーン、舞臺左手に港町のカフエー入口、ガラス戸より内部を、すかし見ることを得。中央に、小形帆船あり、手前の海岸歩道から船へは小板を渡してある。そこにワインの大樽がある。中央正面は入江の港。

船から船頭が二三人上つて來る。カフエーの女と色々の仕草がある。皆カフエーに入る。漁夫の娘が來る。戀人に久しく合へない、船出して久しく歸らないことを愁嘆する。

バーの女が出て來る。漁夫の娘をからかふ。喧嘩になる。船頭が出て來て、結極無理矢理にこの娘をワインの樽に入れて船に積み込む。

第　二　幕

舞臺全面は海で、先の船が赤の三角帆を上げて荒海を進む。雷電頻りに至つて、激浪あれ狂ふ。この海は布に電氣仕掛應用で、全く海と同樣に見えた。やがて船頭同志喧嘩になる。船が搖れて、ワインの樽がころげて娘が出て來る。船頭は互に海に投げ込み一人殘る。その一人と娘が爭ふはずみに娘が船頭を荒海につき込む。浪が荒い。

帆がちぎれる。ますとが折れる。娘一人のつた船は荒波にもまれてゐる。その海に一人の男が浮

き沈みしてゐる。娘がよろ〳〵と舷から手を伸ばして、半死の内に助けてやる。自分の戀人である。悶絶せんとしつゝ抱擁する。

舵の所の二人のみを強く照らして暗黑の怒濤は物凄く舷は半ば沈む。

第　三　幕

月が冴へる。海は益々あれる。舷の破片が漂うてゐる。

幕

一寸氣の利いた、スケツチである。今一つは、舞臺の横から強い電光を照らす。

惡魔の形、(一寸法師の形をした)うすい羅衣をまとつたものが、その電光の傍で舞ふと、舞台正面の壁に大きく影がうつる。實物と非常に廓大されたシルエツトとが兩々相待つて面白いエフエクトを與へる。

そこへ十數人出て來て踊るが、遠近の工合により大小色々に見え、一寸澁い、汚拔けのしたよいものであつた。矢張り巴里でなければ見られぬ、すつきりしたものである。興業本位で嫌になるのは、妙齡の娘が殆ど股間を最も少い面積だけ蔽うて、他は全く裸体で踊る場面が多い、數十人の娘が、裸足で、一列になつて跳ねるのを見ると何だか馬の足の樣な感がする。十一時半終る。

モンマルトンの町は此れからである。晝の樣に明るい。タキシーが四方に飛ぶ。案内せられて

Aux Belles Poules Rue Blondel 32 へ行つて見た。實にこんな所もあるかと、早速引上げた。
社會研究の方の參考の爲、アドレスを書いておく。米國人が澤山行つて居る。

九月二十五日

今日は日曜でひつそりしてゐる。正午迄宿に居り晝飯を日本人倶樂部で須藤氏夫妻と共にする。午食後馬車で一同、ボローンの公園へ行く。行樂の人織るが樣である。池に船を漕ぐ人、樹下に憩ふ人など多い。大体は下層階級の人が多い。コーヒを飲んで、ソルボン大學の方へ行く。こゝも公園へ行く人がせりあつてゐる。

日曜でもその道邊の店には開いてゐるのがある。バスクで出來る緣なし帽を買ふ。メトロで宿に歸り、書類を認め夕食を倶樂部でして三人散歩して歸る。

九月二十六日

朝リスボン街の三井支店へ行き、金を受取り土產物を賣る伴野へ行く。十二時一寸過ぎたので店は閉してゐる。仕方なしに、ブルバールの店の品物を見て廻りマタン社の前へゆく。

晝のオークストラのラヂオを大勢聞いてゐる。午食して伴野へ行き、買物をする。

そこを出て、ラフアエットへ行き、一階から順々に念入りに見つゝ階上へ行き、少憩すると六時になる。ラツシュアワーでとても澤山な人々が通り、折から夕雨が激しく降る。

タキシーで歸り須藤夫妻と夕食を喰ひに行き、柳氏と四人、文豪畫家連の行く、ロトンドコーヒ店でコーヒを飲む。

大勢の人々がゐる。繪ハガキを買つて數枚かく。風が冷い。街路樹の葉が散りかけた。こゝの店には畫を澤山かけてある。又貧しい文士を救ふ會が出來てゐるといふ。

十時歸宿する。

九月二十七日

朝セーヌ河畔の大阪朝日新聞社の重德氏を訪問する。恰度來客中であつたので、モンソーの、セント、マリア學校へ行く。

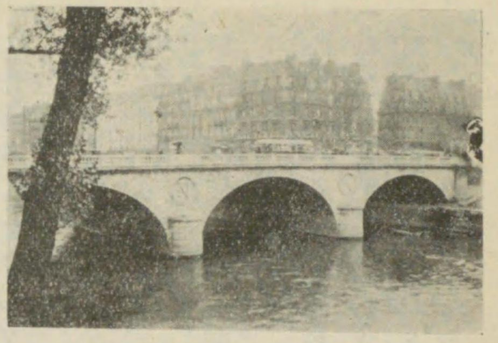
此處はカトリツク教の學校ではあるが、生徒は滿六才以上十八才迄、各宗教のものを入學せしめてゐる。生徒數五百人、設立は一千八百五十六年であるから七十年餘りになる。

寄宿生と通學生に分れて上級は五千フラン(一ケ年)下級は一千フランの授業料である。通學生は午食丈學校でする。

基本金は一千萬フラン位ある。公の補助はないが建物を無償で借りてゐる部分がある。教師三十五名。

學校で宗教を各組に毎週二時間宛教へる。新舊約聖書と其他の道德を授ける。購賣部がある。

卒業生を澤山出し、世界大戰で戰死したものは百名に近い。教師は一週に一時間教へる者を七百フランとして、一ケ年にその十倍丈給與する。



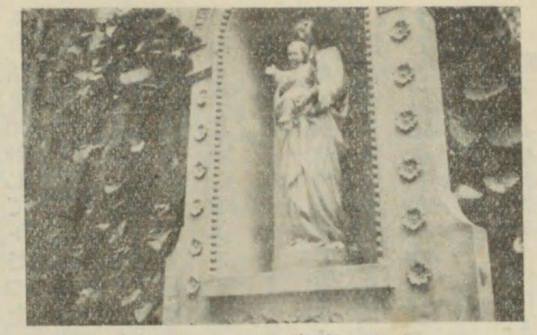
セーヌ河

それが單位で時間數に應じて多くなる。教師は通勤が本則である。立派な建物で、四階建である。

一部分に有名な元師ネー氏の古い邸宅を學校に使用してゐる處がある。運動場は二ケ所にあつて、合せて三百坪にも足りない。

有名な人々の子弟が多い。理科室、デッサン室等から体操場を見た。セント、マリアの像が處々にある。

學校は休暇で十月五日から初まる。こんなに寒いのに休なのである。十人位の生徒が十月の試驗を受けてゐた。此の國では特に學校で計り教育するのが本休と考へない。



サンマリヤ學校庭々

此處のチヤプレインの、デビル氏に案内の勞を謝して日本倶樂部で飯を食べて、買物に行く。ブールバーで、日本の貴顯の方々の御用を蒙つたといふ店で買ふ。

ソルボン大學のあたりで買物をする。

談　片

巴里では年末に配達夫がカレンダーを持つてくる。それに歳暮をやる。配達夫の服裝が藝術的でないから改良してくれとて、ストライキがあつた。日曜の配達數は少い。

ルーブル博物館では先日五萬フランの繪を買つた。あれ丈あるのに未だよいのがあれば買込む。流石は佛蘭西だ。

米國で拳闘があるとて、ヨーロツパで大騒してゐるが、タニーがデムプシーに勝つた、その光景が電氣寫眞で逸早く新聞にかゝげられてゐる。

九月二十八日

朝食後外に出る。靄か霧がかゝつて、シヤンゼリゼーあたりが美しい。一二丁しか見えない。コ

ンコルドの銅像と門のあちらは薄くぼけて水彩畫である。日がほのかに白い中に滲む。

ルーブルの博物館に行く。畫帖を此の中で買ふと安い。大急ぎで、今春見た所を見直す。大勢見物してゐる。如何にも大作を集めたものである。世界の寶である。

外へ出て土產など求め、午後一時過倶樂部で食事をして、三時朝日社の重德氏が來て色々フランスの話を聞かして下さつた。五時前、ラフアエツトへ行つて玩具部を見る。

伯林の百貨店の玩具部の廣大で種類の無數に多いのに比して、此處の玩具の少いのには驚く。一寸した小店の品物の半分もない。如何に子供が取扱はれてゐるかゞ分る。此國では人形でも大人向即ち妻に買つてやる人形は少々あるが、子供の人形はない。子供に與へる玩具といふこと迄苦勞してゐられないのである。先づ大人の愉快を先にするのである。

それから、コーヒーを飲む。霧はまだ充分晴れない。夕方倶樂部で食事をして附近を散步し、今夜は早く寢ようと床に入つたが、矢張書類の整理をしてゐると十二時になつた。

都合により、英國へ再び行つて、直ぐ米國行の船にのる面倒を省き、フランスから直接乘らう。すると荷物などの手續が仕よいと思ふ。

フランスの話

戰前に大學教育をうけたものは

一、金持の子弟

二、貧家の秀才を最高學校にやる、ブールスカラシツプ（政府及各縣にありし）によりて就學せしめた。

總理を二回と文部大臣をつとめたエリオや世界的數學者、今陸相パンルベー此の二者もそのスカラシツプを得た。其他非常に多い。

縣とか國家にてその制度あつた。個人としてもより、國家としてもよき制度である

然るに戰後は

一、ブルジョアーは打擊をうけ資力減じ、以前の如く自家の子弟を大學にやれぬ。やるにしても少しの學資にてはだめ。

二、學生の質—戰爭直後にては大學生の戰死及三四年間從軍（動員）されしにより學生の質が低下した。之を補ふには女子入學が增加した。注目すべきこと。大學は男女共學。何の弊害なし。大學に於ては性の差別を感じない試驗の結果女子は成績よろし。

現今大學入學には試驗がある。學生の質の下れるをなげいてゐる。それは大戰中、家庭教育が行屆かざりし爲、これは過渡期の現象である。頭のよきことは世界中の第一である。頭腦明晰、數、法、醫、理學などよろし。これは動かすべからざる事實である。

フランス文明、文化の根本は

日本、ドイツの如く學校本位でない。學校化していくのが日本の現狀。頭腦と手先の器用と感じの强きこ

とこの天性を發揮することを多くする。先生によつて一々後天的に啓發することは日本やドイツが上である。その天性を惠まれてゐるから最高學校を出れば尙强く發揮さるゝ譯である。フランスは數量よりも質を以て論ずべきである。數を以て大學、中學生を日本に比ぶれば少いけれども質は勝つてゐる。

人口の增加率は四千萬人の人口中一年六七萬である此は悲觀して居るけれども、徒に悲しんでゐない。日や印度などは如何であるか。

フランスは歐洲に於ては大國であるけれども、質に於ては文明國である。然も戰爭をやらすと仲々强い。中學、高等女學校へ上る生徒は少い。中學へゆく者は大學へ行く。日本の樣に中途半端ではない。女學生は大分增加しつゝある。

フランス學校制度の特長は普通の女學校の外にパンションといふのがある。これは貴族や金持の子女が入學する。これが女子教育に大に力がある。生徒數が少く、授業料が高く、寄宿制度のものが多い。凡ての學課と英語を教へる。そこを出れば英語がよめ、日常の話が出來、又そこは規律が喧しい。先生數人、生徒數十人が普通である。出入も嚴格である。

遲刻の際は父兄同伴でないと入れてくれない。この制度は一種の習慣、傳統的に上中流の教育機關として欠ぐべからざるものになつてゐる。無論その教育も仲々よろしい。

室の宿料丈は三千五百フラン。夏季休業は七月二十日より十月初め迄。冬季休業は十日。春季のイースターの休日一週間。授業料も高い。非常に勉强する。

休暇と雖宿題(學問的のもの)を與へる。風俗、歷史、習慣から考へると、此の國は社會も國家も古いから、傳統と習慣といふものが力强く存在してゐる。此の力が此の社會を十何世紀間支持したものであるから根强い。此の力は如何に養はれたか。

一、家庭の傳統及習慣の力

それは母親の感化である。母親の感化は天性より來る。母はパンションにて勉學と規律とにより上中流の婦人としての條件を有しており、又母はその子女をパンションに送る、そこに一貫した傳統の力がある。新思想などから考へば餘地はあるが、此の傳統の力が强いことは否まれぬ。

小學教育に就て、義務教育尋常科は六年——高等もある。大部分は尋常丈でやめる。就學率は日本に比し割合惡く七十パーセントである。一般民衆で高等小學校にゆくのはよい方である。然し近時高等小學へゆくものが多くなつた。女子高等小學校が發達しつゝある。

小學教育は四十年前より義務教育になつて無月謝である。教員の俸給は全部國庫支出である。校舍は狹く、近代的の設備を欠いでゐる。大きな公立中の中學(アンリー四世小學校)などは小學と中學など一緒にある。

各學校とも夏休の長きこと小學校は二ヶ月半で大學は七、八、九、十月が休みである。然し大學生はよく勉强する。

人種の優良な譯は食物、氣候、休養をよくすること、餘生を樂しむことはあれども壯年期の間に於ても休養といふことに注意する。それが反てよろしい。從て夏季は凡てのこと

が停止される。日本人は一日、一年、のべつ幕なしに働くが五十歳にもなれば働けぬ樣になる。反て佛人は年とつてもよく働ける。新聞記者は日本なれば四十歳止り、こちらでは六十五、七十迄位やつてゐる。ゼネバの三國會議のとき、日本の記者連中は若く、西洋の方は老人ばかりであつた。これは國民教育上注意すべき問題であると思ふ。試驗過度の爲に　本が疲れる。これは學校を尊重し過る理由に基くと思ふ。思想上に於ては工業に於て、工場主對雇人の關係が變化しつゝある。政治上にもこの關係が深くなつていく。青年の一部が共產主義になつてゐる。大學生中にも多い。大學生には一部に極右黨も多くある。巴里大學にそれらの力が、左黨及共產學生よりも多い。但大學生が思想にかぶれ、社會上に活動したことは一八九〇より一八九六年迄前にもあつた。現今は研究丈である。それは自然の結果である。大學生中に王政思想のものも可成多い。

巴里高等師範は大學以上の大學理科、文科である。その學科は巴里大學の科目の外に特別のものがある。入學試驗がある。各縣の秀才がその試驗をやる。採用するのは二十人で成績順である。二十一番からは巴里大學に入る譯である。中學五年でバカローレアの試驗をして、それに通るとやるのである。高等師範の校長はフランス一流の學者人格者である。

財產は三四人の子供に平等に分ける。フランス革命の結果、多きことのは財產分散を意味する。貯蓄心もあれど、財產も多くして讓り渡したいのである。天富と保存と相續法よろしき故此の國は富んでゐる。個人としては仲々金持が多い。

大戰後民衆の思想に干涉しない。共產黨員が軍隊に宣傳して兵卒が上官に不柔順になることを嚴しく取り締つてゐる。大戰中百四十萬の壯丁が死んだ。ドイツと和解して永久平和を確立したいが警戒はしてゐる。スポーツは相當盛である。

九月二十九日

早く起きて、マダレイン街のクツク社へ行て、倫敦で日本へ歸る切符を得る筈で半金拂つてあつたが、フランスから直ぐ紐育行に乘船するから、その手續を賴む。矢張フランスの港からのつても三十圓位かゝつて英國へ渡る費用とは變りはないが、面倒は少い。

英國の佐々川君へも其旨傳へる。十一時ベルサイユ行のサイトシーイングカーに乘る。ボロンの公園を拔けて、ロンションの競馬場を通る。村に入ると、コロー、ガンベタなどの家がある。朝の風が寒い。冬服にレーンコートでふるへる。

それでも學校はまだ夏休である。十一時半過ベルサイユ宮殿につく。正面左右に兵營がある。此處は初め、ルイ十四世が建てたので高低とり〳〵の丘の上に廣く面積をとり、世界一の宮殿といはれてゐる。チヤペルは大理石と彫刻が立派。ルイが結婚した所である。

酒の間、和蘭畫家の密畫の間、ルイス十四世及マリアテレザの肖像のある間、マー、ノサロンと

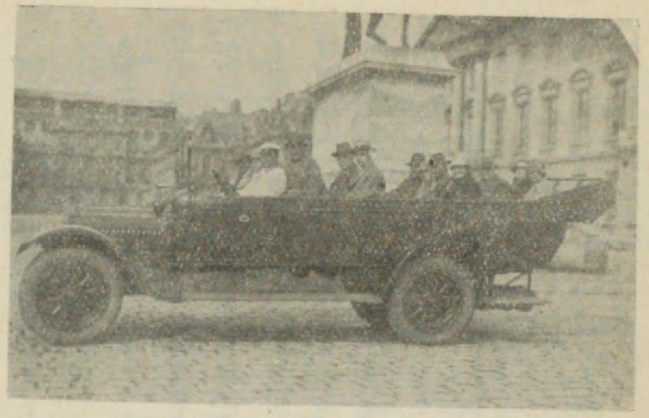
稱する室、マーキウリー室等を經て外の庭を見ると實に美しい。廣大である。

花壇と樹木、百二十七の池、四千六百七十四尺の長さと百八十六尺の幅の運河があり、夏季は別として毎月第一日曜には噴水がある。

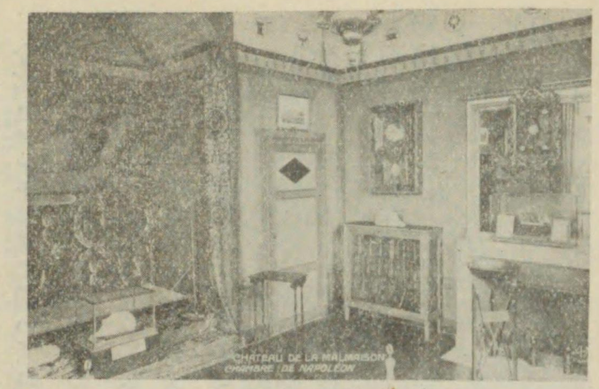
戰の間、平和の間を經て有名な鏡の間に入る。六間に四十間の長さで、こゝでドイツのウヰリアム一世が卽位式をやり又世界大戰の平和條約の調印をした所である。

彫刻といひ、壁畫といひ美麗である。寢室、侍從室、及マリアテレザ、ルイスアントネツト及マリー、レヂンスカの住んだ室、及戰爭畫の室はフランスの戰の光榮を描いた室で隨分廣い。

外を見ると、一面に池と花壇がシンメトリーを作り遙かあなたにマロニエの森と、目の屆く果に丘が連る。立派な庭である。實に大規模にやつたものである。それから附近のホテルで食事をする。朝寫した寫眞を賣りにくる。



ベルサイユ宮殿前



ナポレオン記念室

底のない帽を持つた爺が奈翁や其他の名將の眞似の假粧をすること話し家の樣にやつて金をもらふ。

食後、ナポレオン一世の馬車、チヤールス十世の馬車、奈翁ロシヤ遠征の時の馬車等數十萬圓を投じて作つた華美なのを見る。それからルイ十五世の食堂の贅澤なる建物を見て、マロニエの落葉と實を踏んで幽邃なる森の間を歩いて、マリアアントネツトが折々來住した別宅へゆく。池に臨み、鯉が泳ぎ廣く菜園もあり、簡素なかくれ家である。又木の間を同行者と雜談し乍ら愛の殿堂を見つゝ、ルイ十五世が建てた、ペチ、ツリアノンへ行く。

食堂の床は下の料理室へ下る仕掛である。カードルーム、寢室、化粧室に六万圓の鏡臺がある。

此處を自動車で出て、村の間を走る。このベルサイユの爲に、ルイ十四世が作つたセイヌの河水を送る水道工事の跡を見て八哩走る。そして、マルマイソンに着く。こゝは、ナポレオンがジョセフインと共に住み、後にジョセフインが離別後淋しく住んだ所である。

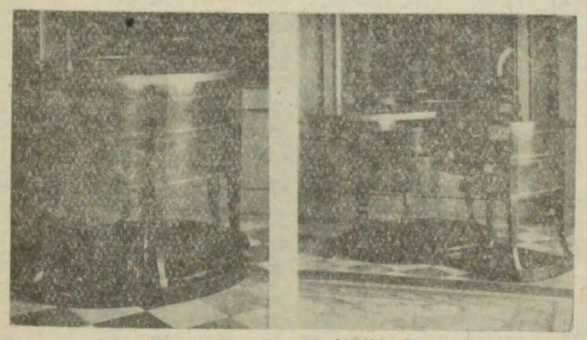
ナポレオンの服は紅と白と薄紅のがある。勳章、手紙、メダル、肖像がある。ジョセフインの寢室、それにその眞紅のタペストリ！は甚だ變つてゐる。ナポレオンがセントヘレナで死んだ其儘の寢臺や、その死際のシヤツ、死の假面、勳章、時計、ローソク臺は何と悲愴でないか。

今迄ロマンチツクに響いてゐたこの蓋世の英雄の面目が躍如となつてくる。實に偉大な英雄である。この部屋にゐるとゾツトする。何といふ、なつかしさを以て彼の覇業を省みることであらう。

下の部屋には會議室がある。二重である。それから、奈翁が設計して命じた書齋も大分風變りである。彼はクロスワードパズルみた樣なことが好きで、彼の机と椅子は組立てれば何處から明けてよいか分らぬ。彼はこんな急しい人物でありながら尙日常の器具などをも復雜にして喜んでゐたのである。書類箱も智慧の輪同樣どこから明けてよいか分らぬ。

音樂室がある。ジョセフインの彈じたピアノがある。庭も美しい。門に近く古時計のある堂もある。

大フランス帝國のルイ、ナポレオンが今眼の前に復活して在りし



ナポレオン考案の机

碑念記

て、寫眞屋により歸つた。日本倶樂部で夕食して散歩後寢る。

九月三十日

朝食後書類の整理をする。兒童生活の原稿をどれにしようかと迷うた末に矢張り伯林日記の一部を送ることにする。手紙を書く。實際毎日視察してゐると、とても手紙をかく隙がない。夜分は疲れてぐつたりする。朝は出掛ねばならぬ。

午食を須藤、座田の二君と近處の伊太利食堂でして、ルクサンブルグの美術館に行く。入口に大日の絢爛たる光彩を見るが如き心地がする。フランスの歴史が讀みたくなつた。

同行の人が、ナポレオンは色彩に對して非常に鋭敏であつた、あの馬車の色彩、馬丁の服を御覽といふ。成程、色の美に對する奈翁は大藝術家の樣に秀れた、鑑賞眼を有してゐたに相違ない。

夕靄が下りかけた。エトワールで私丈下車し

戰のモニウメント的の彫刻が澤山ある。新畫も出てゐる。コテーのが一室を占めてゐる。割合小さい室なので一休に疲れないで見える。

ゴツホ、ルノワール、ドガ、シスレー、モネ、ピサロ、アドラー、マンギヤン、バジレの大家の作が並んでゐるが、日本でも、ルノワールや、マンギヤンのものを見てゐるので深い感激を與へるものは少い。ロダンの肖像も彫刻もあつた。

こゝを出て、ソルボン大學前で休み、ルクサンブルグの公園に入る。大勢婦人と子供が遊んでゐる。子供の遊び場である。車を驢馬にひかして、數人の子供がのつて廻つてゐる。池に浮べるおもちやの帆船を賃貸してゐる。小さい小屋で、自動あやつり人形を見せてゐる。十四五人這入つて一杯である。

リラのカフエーへ行く。島崎藤村の好きなカフエーであるといふ。序に藤村の宿つた宿を見に行く。夕方宿に歸つて、西本君の手紙を讀む。本國の事情がよく分つた。日本人倶樂部で夕飯を食ふ。食後三人、タバリンといふ、ダンスホールへ見物に行く。

此の店のスケツチ師が似顔をかいてやらうといふ、三十フラン出してかいてもらう。割合甘い。ビールを飲んで、今日買つた外套を着て宿に歸る。

午後は暖だつた。もう歐洲滯留の日も數日を餘さない。心急しい。そろ〳〵胸算用をせぬと路銀

が不足する。

十月一日

早朝から座田氏と、ナポレオンの菩提寺アンバリドにゆく。今日は午後の開館の日なので、墓へは入ることが出來ん。大きな寺院である。横に戰爭の記念館がある。戰利品や繪畫武器などがある。此處の廣庭で先日、米國の兵卒歡迎會をしたので跡仕末をしてゐる。

ぶら〳〵歩きつゝ、セーヌ河の岸の古本屋をあさる。それから、ノートルダムへ行つて、怪獸の像を見たり、彫刻を見る。何度見ても、此の邊の河と橋と河の岸の歩道の氣持よいこと。岸の木の上に白い雲が動く。上の白い塔の美しいこと。すが〳〵しい町である。寺の横の土産物屋にはこの怪獸の像を賣つてゐる。

それから、先に行つたことのある、カブールカフエーの地下室を見る。昔の牢屋と革命黨の本據であつたのである。それを見て疲れて歸り、一寸眠つて夕食に行く。倶樂部では毎夜同じ連中で色々話をして、後四人連れでオランピアを見物する。はねてから、踊場でレモンを一杯のみ歸る。

學院へ兒童生活原稿として伯林日記送る。カフエーではハガキを書いた。土曜であるから中流以下の人々が踊つてゐた。オランピアではスペインの歌ひ手が聲も容貌も美しかつた。

今夜の十二時に、時計を一時間おくらすこと。卽、サンマータイムは終つて普通になつたのである。處によると汽車は一時間停車するといふ。エトワール附近の電車のレールは三本になつて架空線がない。女車掌がゐる。戰時中に採用したのが解雇出來ずにある。

電車に一二等ある。停留場の柱に番號の紙札があり、それをとつて待つてゐて番號順に乘る。電車切符、マツチ、レツテル、受取、入場券の類を私は棄てずに記念の爲に持つてゐる。巴里にはタキシーが非常に多くあつて安い。大分乘つて五フラン前後。卽五十錢あれば大分のれる。

今日の晝飯は、サラダ、ビフテキ、チース、コーヒ、ブドー酒で五十錢位の所へ行つた。これも贅澤の方かも知れん。レストランの店先でかきを澤山賣つてゐる。レモンも添へてある。

婦人が油繪の額を三枚さげてすた〳〵と行く。美術の都だ。夜の女が多い。掃きとばす程多い。踊場で黑奴の紳士がよく踊る。アルゼリアの黑人兵卒も踊つてゐる。フランス式の帽子が美しい。男の帽子が無造作で氣が利いてゐる。

夜の町が明るい。踊り場は極彩色の粧飾で、數百人それ〴〵卓について、ビール、ワイン、レモン、コーヒ位を一杯のんで音樂に合せ中央で踊るのを見るのである。大抵樂隊は二組あつて、交互にやる。タンゴや、チヤーレストンをよくやる。素人もあるが黑人が大分ゐる。煙草をくれと言ひ寄つて來る。

十月二日

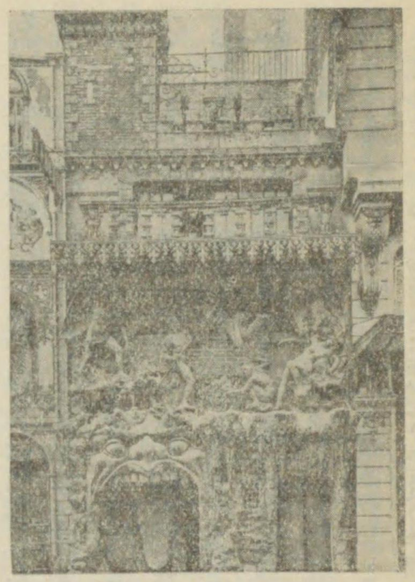
ゆつくり休む。イタリア食堂で須藤夫妻と食事を共にして、サツクレ、キウルの寺院を參拜する。これは、ビガラから電車を下り、だら〳〵阪を上つて行くと大凡建築は出來上つてゐる。新しく白い建物で既に四億フランを費した由。巴里市の北部の丘にそびえて一望遠く郊外まで見晴しが出來る。

堂內正面には、キリストの像のモザイツクがあり、中には一杯の參拜者が午後の禮拜をしてゐる。市中の建物は一々指呼することが出來る。巴里も隨分廣い。ケーブルに乘らないで下りる。コーヒをのんで宿にかへり、外交秘話をよみふけり、晩食もイタリア食堂でする。

エトワール附近のコーヒ店でハガキを書く。日曜の散步者が多い。須藤夫婦はレストランの店先の、生カキの貝の中にレモンをしぼり込んで食べる。甘いといふ。大きなカキだ。クラレツトといふのは淸水の中で培養したので一ダス六フラン五十で外に種類が四五種ある。四角なつゞらに入れて店先の机の上につんである。巴里の秋の食物の一つであらう。

十月三日

朝電話でフランス物產(三井)へ、船賃の半額拂込にポンドが入用であるから、信用狀は磅である



ますが、日本のは分らんといふ。結局四米か四米半といふことに落付く。

マダレンのクツク社へ行つて、倫敦から切符が屆いたかと聞くと、午頃來てくれといふので、其邊をぶらつく。ラフアエツト百貨店へ行つたが月曜は午前中休みである。依頼された時計を買ふ。四百五十フランで金時計(腕卷)にサフワイアの入つたのを求める。ダイヤの飾付などは二三千フランである。クツク社へ行くと、氣の毒だが明朝來てくれといふ。仕方なしに宿に歸る。

倶樂部で午飯を食つて須藤氏とソルボン大學の方を見て歸り外交秘話をよむ。

から、磅で呉れまいかと申込むと、フランスにはポンドはないから、フランにして呉れといふ。それで、會社へ行つて、フランで七十ポンド分をもらふ。

獄館

婦人のコート用のビロードを頼まれたが何米だらうかと尋ねると、はつきり分らん。店員の

地

人は日本へ五米突買つて歸つたが、餘つたといふが、どれ丈餘つたか分らん。そこにゐたフランスの女事務員は三米突位で此處のならばあり

伊太利食堂で夕飯を共　食べて、座田氏と三人フワンタジオへ行く。こじんまりとした所である。ビールを飲んで歸る。明朝トランクをクツク社から運送屋にとりによこすので大きなのを買つて、印を入れさせ、夕方つめ込む。ケビントランクの大きなのに土産が入り兼ねる位である。

十月四日

倫敦から手紙を澤山小包にして送つたのが屆かない。いつそ手紙にしてもらつたらよかつたと後悔する。クツク社へ行く、切符を受取り、シエルブルグ迄の汽車賃、トランク送料等相當に要つた。その係に二マークの銀貨が殘つてゐたので「これは十法以上だよ」といつて與へる。

フランス物産でもらつたフランを弗に兩替する。ラフアエツトに行く。こゝも午後三時迄休みかといふと否と答へる。ビロードを買ふ。午後六時迄に送つて呉れる筈。倶樂部で晝飯を食つて宿に歸り、ハガキをかく。久しく御無沙汰してゐた所へ出すのである。愈々ヨーロツパの旅も今日で終るのだ。

昨日となりの小學校で生徒が階段から落ちて死んだといつてゐたが、角の教會で葬儀がある。その子供のではないかと氣に懸る。二學期の初まる日に死んだとは如何なる因縁か。學校で心配なのは子供の不慮の災厄である。學校當事者としてはそれが一番苦になるものである。

夕方倶樂部にゆく。いつも地下室の料理部屋の横で食べる。常連は京城警察部長の安藤氏や其他數人いつも同じ顔觸れである。二階三階の部屋べは行かない。色々の話がはずむ。戰爭の話、藝術の話、フランス人の話。かうしてゐると、日本を離れてゐる感がなくなる。支拂をして數日ではあつたが此處の支配人清原氏初め數々の苦勞をしてこゝで料理に從事してゐる人々と別れを告げる。

モンテカーローのカフエーで、須藤夫妻及びその友人と五人で、相當に評判のよい踊場を見物する。二三十人位で踊は格別感心しなかつた。冷くて、灯の美しい町を歸り、座田氏からジュネーブ會議の時日本の新聞記者團から、米國の記者團に野球を申込んで日本側が勝利を得た寫眞を見せてもらふ。ヒウス氏が始球式をして、ボールに署名したのを見せてもらふ。

船中に讀む石川三四郎の本をもらつて部屋に歸り荷物をこしらべる。ロンドンペカバンの送り賃等二ポンド送る。

十月五日

七時に起きて、コーヒとパンを食べ須藤氏同乘サンレザ驛へ行く。二等のシェルブルグ行發車は八時二十分である。愈々須藤氏と別れて巴里を去る。

牧場の多い野の間を汽車は走る。車中は大方米國人ばかりである。一人の元軍人であつたのがの

巴里記念碑

ぞき眼鏡にベルダンの戰爭の繪を入れて同室六人に見せてくれる。私にも見よといふ。それを數十枚二時間位にわたつて順々に廻はす。その根氣には恐れ入つた。もうよろしともいへず有難うといつて見せてもらつた。

一驛で停車したのみである。午食は食堂でしたが餘りよくない。驛でサンドウイツチとワインを買つて飲んでゐる者もある。食事は二十五フランで小瓶のワインは十二フランで高かつた。二時過シエルブルグへ着く。カバンをポーターに持たし、パスポートに印を押してもらつて乘船券をもらふ。

そこの黑板に英文で左の人々はトランクがあちらにあるから立合の上、稅關吏に調べてもらつて下さいとある。昨日送つたトランクのことである。そこで今日のスーツケースを調べてもらつて一旦艀舟に持込んでおく。六フランやつたら、も少しくれといふ。二フラン增してやる。

それから大きなトランクの所へゆく。役人が何かないかといふ。無いと答へてポーター一人が背負ひ一人がついてハシケに積込む。十フランやればまだくれといふ二法はり込む。

黑板の掲示に、霧の爲に出帆がおくれたから七時頃着港の豫定である。それで四時半から茶をのむ人はカシノホテルで喫んでくれとある。テンダーは五六百人宛乘れるのが三艘並んでゐる。私等のは二等のテンダーで、三等のテンダーには自動車などを澤山つんである。